

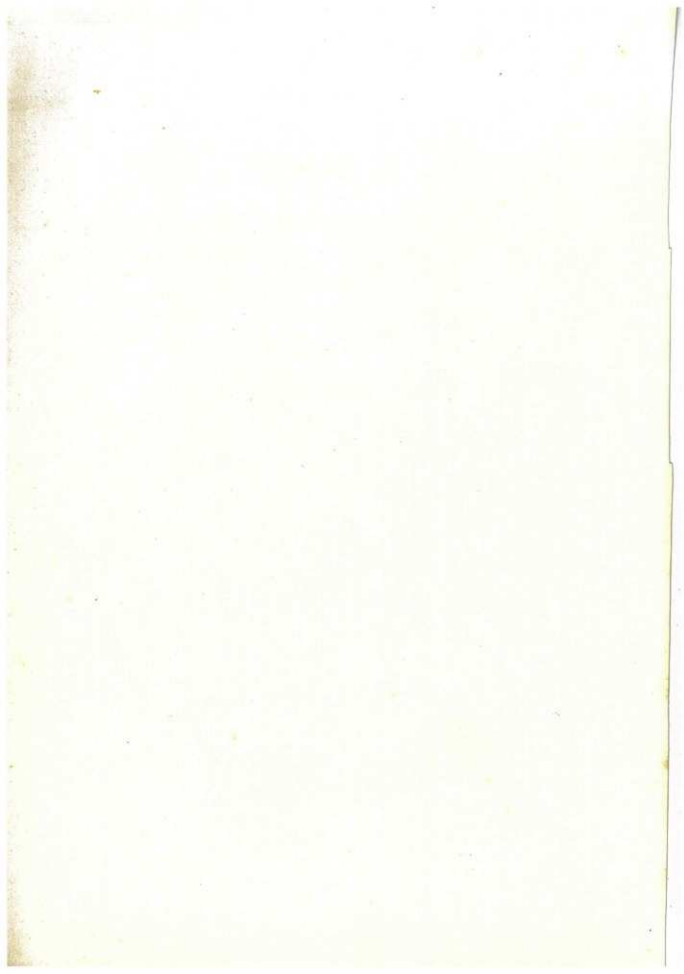
宇土半島基部古墳群

宇土半島基部古墳群分布調査報告（總集編）

宇土市埋藏文化財調査報告書第15集

1987

熊本県宇土市教育委員会



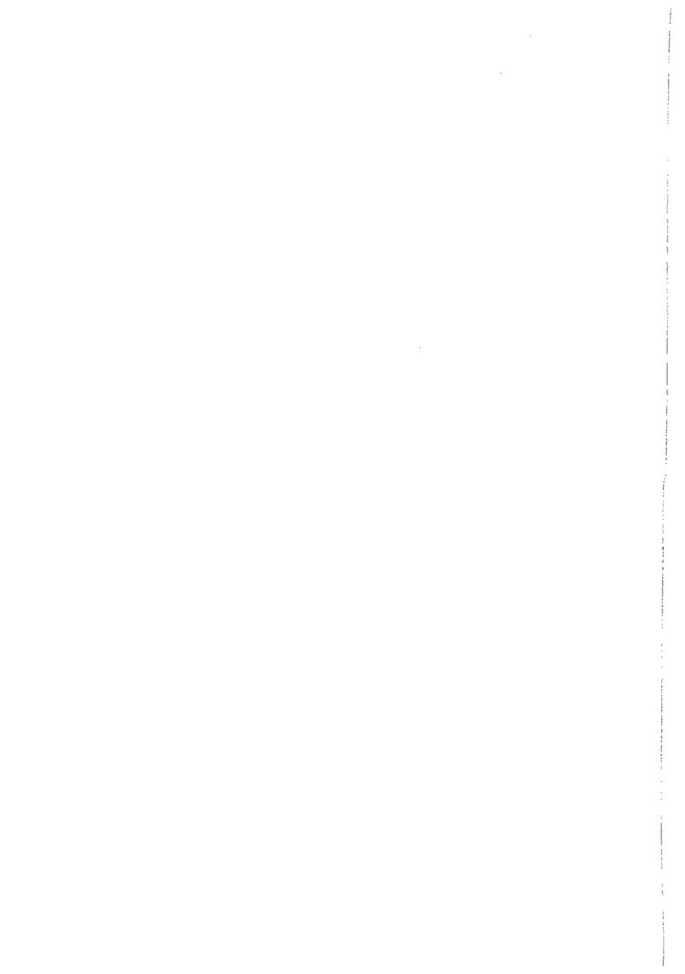
宇土半島基部古墳群

宇土半島基部古墳群分布調査報告（総集編）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集

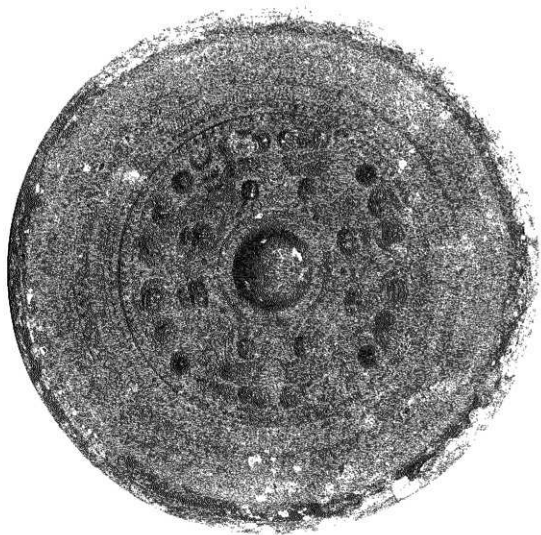
1987

熊本県宇土市教育委員会





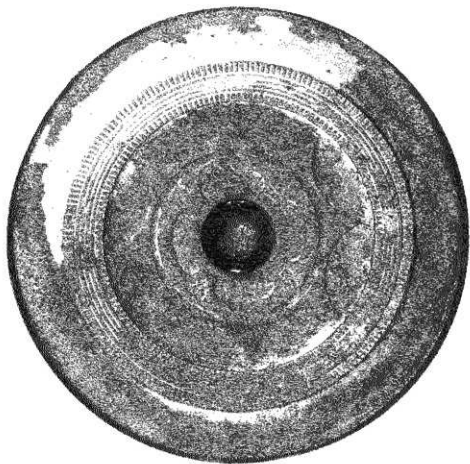
向野田古墳石棺内出土状態



三角縁四神四獣鏡

城ノ越古墳

直徑21.7cm



内行花文鏡

向野田古墳

銘文「長皇子孫」

直径17.0cm



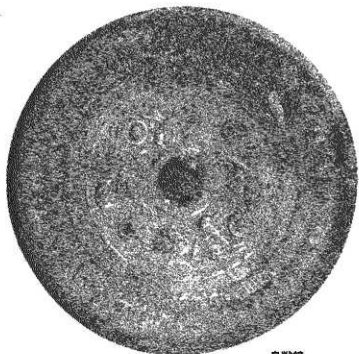
方格規矩鏡

向野田古墳

銘文「青岡作及明大野真生宜子孫」

「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」

直徑18.4cm



鳥獸鏡
向野田古墳
直径11.2cm



鳥獸鏡
チャン山古墳
直径10.5cm

序

宇土半島基部の古墳群についての分布調査・確認調査をはじめから既に6年が経ち、その間に数多くの成果を挙げることができました。宇土市を中心として、不知火町・松橋町にかけて広がるこれらの古墳群の重要性については、ここで改めて説明するまでもありませんが、県内はもとより、九州でも重要なものとして注目を受けております。

ところがそれらの資料については、行政的にはあまり実体をつかんでおらず、保存対策もたっていないというのが実情で、今回の事業によってその一部を明らかにすることが出来ました。

半島基部の古墳についての調査は今後も続けていかなければなりません。今年度を一応の締め括りとして、市内の古墳の分布図と台帳的な基礎資料として本報告書を作成しました。本書が文化財の保存・活用の一助になることが出来れば幸甚です。

なお、これまでの調査において指導・協力を賜りました各位、並びに文化庁・熊本県教育委員会に対し、厚くお礼申し上げる次第です。

昭和62年3月

宇土市教育委員会

教育長 船 田 至

例 言

1. 本書は、宇土市教育委員会が国・県の補助をうけて昭和56～61年度に実施した宇土半島基部古墳群の分布調査・確認調査の報告書である。
2. 宇土半島基部古墳群とは宇土市・宇土郡不知火町・下益城郡松橋町の一市二町に広がる古墳群を一般的にはさすが、古墳群をどのように捉えるかは見方によって色々異なる。その意味では宇土市内の古墳が全て半島基部古墳群として良いかどうか問題ではあるが、その判断は各位によることとして、ここでは現段階で分かっている宇土市内所在の古墳を網羅した。
3. 調査は、宇土市教育委員会が別記（第1章第2節）したような調査の組織によって実施したものであるが、昭和56年度以前の調査については市が実施した以外の調査成果を多く含む。調査の実施にあたっては、多くの方々の指導・協力があり、これによって調査を円滑に進めることができた。
4. 遺構の実測図・写真は今回の調査で新たに作成したものや宇土市教育委員会が保管しているものから作成し、これまで公表されているものを再録のかたちで転載したものもあり、それについては主に各古墳の参考文献による。
5. 本書の執筆は、富樫卯三郎氏をはじめとする各古墳調査者の助言・指導を得て高木恭二・木下洋介が行なったが、図表の作成には主に元松茂樹・田中啓三・山田英裕があたった。

本文目次

I 序 章

1. はじめに	1
2. 調査の組織	2
3. 調査の経過	2
4. 位置と環境	4

II 古墳分布図	13
----------------	----

III 古墳解説

1. 梅崎古墳	69	21. 城2号墳	91
2. 梅崎箱式石棺群	72	22. 古墳参考地(字田平)	96
3. 小松古墳	72	23. 古墳参考地(字際崎)	96
4. 小松2号墳	74	24. 高丸古墳群	97
5. 長浜箱式石棺群	75	25. ヤンボシ塚古墳	97
6. 小池平1号墳	76	26. 仮又古墳	102
7. 小池平2号墳	77	27. 仮又2号墳	108
8. 小部田横穴墓群	77	28. 東畑古墳	108
9. 御殿山古墳	78	29. 東畑2号墳	111
10. 小部田箱式石棺	79	30. 金嶽山古墳	112
11. 古墳参考地(字堤上)	79	31. 椿原石蓋土壇墓	112
12. 古墳参考地(字局畑)	79	32. 西岡台箱式石棺	113
13. 城塚古墳	80	33. 山王平古墳	116
14. 尾ノ上横穴墓群	80	34. 神合古墳	117
15. 神ノ木山古墳群	81	35. 猫ノ城古墳	118
16. 天神山古墳	82	36. 城ノ越古墳	118
17. 古墳参考地(字経塚)	83	37. 古城古墳参考地	121
18. マブシ古墳群	84	38. 境目箱式石棺群	123
19. 城古墳群	87	39. 古保里箱式石棺群	124
20. 城1号墳	88	40. 神ノ山1号墳	125

41. 神ノ山2号墳 ……………	126	56. 久保2号墳 ……………	149
42. 神ノ山3号墳 ……………	127	57. 大平横穴墓 ……………	150
43. 上松山箱式石棺 ……………	127	58. 桶底古墳 ……………	151
44. 檜崎古墳 ……………	128	59. チャン山古墳 ……………	151
45. 女夫塚古墳(女塚) ……………	136	60. 南山内石蓋土壇墓 ……………	155
46. 古墳参考地(字東潤野) ……	138	61. 南山内古墳 ……………	155
47. 晚免古墳 ……………	139	62. 南山内箱式石棺群 ……………	155
48. 古墳参考地(字四度橋) ……	141	63. 御手水古墳 ……………	159
49. 潤野古墳 ……………	142	64. 御手水2号墳 ……………	160
50. 古墳参考地(字四度橋) ……	145	65. 古墳参考地(字南山内) ……	160
51. 三日鬼ノ窟古墳 ……………	145	66. 向野田古墳 ……………	161
52. スリバチ山古墳 ……………	146	67. 向野田石蓋土壇墓 ……………	177
53. 迫ノ上古墳 ……………	147	68. 古墳参考地(字向野田) ……	178
54. 古墳参考地(字北請) ……	148	69. 西潤野古墳 ……………	178
55. 久保1号墳 ……………	149		

IV 付 章

1. 宇城地方古墳発掘調査年譜一覧表 ……………	181
2. 宇城地方古墳時代関係文献一覧表 ……………	184
3. 宇城地方古墳・石棺出土人骨一覧表 ……………	191

V 総 括 ……………	193
-------------	-----

挿 図 目 次

第1図	宇土半島古墳時代主要遺跡分布図	7	第34図	東畑古墳表採土器実測図	109
第2図	地図範囲図	16	第35図	東畑古墳周溝出土土器実測図	110
第3図	空中写真範囲図	17	第36図	椿原石室土槨墓実測図	113
第4図	梅崎古墳地形測量図	69	第37図	西岡台遺跡千疊敷V字溝出土版形鏡	114
第5図	梅崎古墳石室実測図	70	第38図	西岡台遺跡千疊敷V字溝・深重複状況図	115
第6図	梅崎古墳東側壁装飾文実測図	71	第39図	山王平古墳表採土器実測図	116
第7図	小松2号墳石室実測図	74	第40図	城ノ越古墳墳丘測量図	119
第8図	長浜箱式石棺群地形測量図	76	第41図	城ノ越古墳出土三角縁四神四獣鏡	120
第9図	長浜箱式石棺群1号石棺実測図	76	第42図	古城古墳参考地石材線刻実測図Ⅰ	121
第10図	長浜箱式石棺群2号石棺実測図	76	第43図	古城古墳参考地石材線刻実測図Ⅱ	121
第11図	天神山古墳墳丘測量図	83	第44図	古城古墳参考地石材線刻実測図Ⅲ	122
第12図	マブシ古墳群地形測量図	84	第45図	古城古墳参考地石材線刻実測図Ⅳ	122
第13図	マブシ古墳群2号出土遺物実測図	85	第46図	古俣里箱式石棺群2号棺出土珠 文鏡	124
第14図	マブシ古墳群2号実測図	86	第47図	神ノ山1号墳家形石棺実測図	126
第15図	マブシ古墳群3号実測図	86	第48図	檜崎古墳墳丘測量図	128
第16図	城1号墳墳丘測量図	88	第49図	檜崎古墳石棺・土槨配置図	129
第17図	城1号墳石室平面図	89	第50図	檜崎古墳1号棺実測図	130
第18図	城2号墳墳丘測量図	91	第51図	檜崎古墳2号棺実測図	131
第19図	城2号墳石室実測図	92	第52図	檜崎古墳3号棺実測図	132
第20図	城2号墳出土土製品実測図	94	第53図	檜崎古墳4号棺実測図	133
第21図	城2号墳出土鉄製品実測図	94	第54図	檜崎古墳5号棺実測図	133
第22図	ヤンボシ塚古墳墳丘測量図	98	第55図	檜崎古墳1号棺出土鉄鍔実測図	135
第23図	ヤンボシ塚古墳周溝断面図	98	第56図	女夫塚古墳(女塚)地形測量図	136
第24図	ヤンボシ塚古墳石室実測図	99	第57図	女夫塚古墳(女塚)出土遺物実測図	137
第25図	ヤンボシ塚古墳石室復原図	101	第58図	女夫塚古墳(男塚)墳丘測量図	138
第26図	ヤンボシ塚古墳線刻実測図	102	第59図	古墳参考地(宇東瀧野)表採須恵器 実測図	139
第27図	ヤンボシ塚古墳石階拓影	102	第60図	晩免古墳地形測量図	140
第28図	ヤンボシ塚古墳出土鉄製品実測図	102	第61図	晩免古墳家形石棺見取図	140
第29図	仮又古墳墳丘測量図	103	第62図	古墳参考地(宇四度橋)周辺字図	142
第30図	仮又古墳列石状況図	104	第63図	瀧野古墳周辺地形測量図	143
第31図	仮又古墳石室実測図	105	第64図	瀧野古墳家形石棺見取図	144
第32図	仮又古墳側壁装飾文実測図	106			
第33図	仮又古墳出土遺物実測図	107			

第65図	スリパチ山古墳墳丘測量図	146
第66図	迫ノ上古墳墳丘測量図	147
第67図	古墳参考地(字北請)表採須恵器 実測図	148
第68図	大平横穴墓実測図	150
第69図	大平横穴墓出土土器実測図	150
第70図	チャン山古墳墳丘測量図	152
第71図	チャン山古墳出土鳥獸鏡	152
第72図	チャン山古墳石室実測図	153
第73図	南山内箱式石棺群地形測量図	156
第74図	南山内1号石棺実測図	156
第75図	南山内2号石棺実測図	157
第76図	南山内3号石棺実測図	157
第77図	南山内箱式石棺群出土鉄器実測図	158

第78図	向野田古墳墳丘測量図	161
第79図	向野田古墳竪穴式石室実測図(I)	164
第80図	向野田古墳竪穴式石室実測図(II)	165
第81図	向野田古墳竪穴式石室実測図(III)	166
第82図	向野田古墳舟形石棺実測図	167
第83図	向野田古墳遺物配置図	168
第84図	向野田古墳出土内行花文鏡	169
第85図	向野田古墳出土方格規矩鏡	170
第86図	向野田古墳出土鳥獸鏡	171
第87図	向野田古墳出土装身具実測図	172
第88図	向野田古墳出土鉄剣・鉄刀実測図	173
第89図	向野田石蓋土墳墓実測図	177
第90図	西潤野古墳石蓋土墳・箱式石棺 実測図	179

図 版 目 次

口絵	向野田古墳石棺内出土状態	
口絵	三角縁四神四獣鏡(城ノ越古墳)	
口絵	内行花文鏡(向野田古墳)	
口絵	方格規矩鏡(向野田古墳)	
口絵	鳥獸鏡(向野田古墳)	
口絵	鳥獸鏡(チャン山古墳)	
空中写真	網田地区	63
空中写真	住吉地区	64
空中写真	緑川地区	65
空中写真	轟地区	66
空中写真	松山地区	67
空中写真	花園地区	68
図版1	小松古墳石室1	73
図版2	小松古墳石室2	73
図版3	小松古墳石室3	73
図版4	小松2号墳石室	75
図版5	小池平1号墳石室	77
図版6	小郡田横穴墓群	78
図版7	御殿山古墳石室	78

図版8	城塚古墳石室	80
図版9	尾ノ上横穴墓群	81
図版10	神ノ木山古墳群出土須恵器	81
図版11	天神山古墳透景	82
図版12	マブシ古墳群1号	85
図版13	マブシ古墳群2号出土遺物	85
図版14	城1号墳玄門部	90
図版15	城1号墳玄室内	90
図版16	城2号墳羨道部	93
図版17	城2号墳石室横口部	93
図版18	城2号墳石室奥壁	93
図版19	城2号墳出土石製品	95
図版20	城2号墳出土鉄製品	95
図版21	ヤンボシ塚古墳墳丘	97
図版22	ヤンボシ塚古墳玄門部	100
図版23	ヤンボシ塚古墳羨道部	100
図版24	ヤンボシ塚古墳石室左側壁	100
図版25	ヤンボシ塚古墳出土鉄製品	102
図版26	ヤンボシ塚古墳出土土器	102

図版27	飯又古墳墳丘	104
図版28	飯又古墳石室	106
図版29	飯又古墳出土鉄鏝	106
図版30	飯又2号墳墳丘	108
図版31	東畑古墳石室	109
図版32	東畑2号墳石室	111
図版33	金嶽山古墳石室	112
図版34	椿原石蓋土墳墓	113
図版35	椿原石蓋土墳墓蓋石	113
図版36	西岡台箱式石棺	114
図版37	西岡台遺跡のV字溝	114
図版38	獣形鏡(西岡台遺跡)	114
図版39	山王平古墳石室	116
図版40	猫ノ城古墳墳丘	118
図版41	境目箱式石棺	123
図版42	神ノ山1号墳	125
図版43	檜崎古墳前方部より後門部を望む	129
図版44	檜崎古墳1～4号棺	129
図版45	檜崎古墳1号棺	130
図版46	檜崎古墳2号棺	131
図版47	檜崎古墳3号棺	132

図版48	檜崎古墳4号棺	133
図版49	檜崎古墳5号棺	134
図版50	檜崎古墳1号棺鉄鏝出土状態	134
図版51	檜崎古墳1号棺出土鉄鏝	135
図版52	三日鬼ノ窟古墳石室	145
図版53	久保2号墳	149
図版54	チャン山古墳墳丘	154
図版55	チャン山古墳石室	154
図版56	南山内1号石棺	158
図版57	南山内2号石棺	158
図版58	南山内3号石棺	158
図版59	南山内箱式石棺群出土刀子	158
図版60	御手水古墳遺蹟	159
図版61	向野田古墳整穴式石室1	162
図版62	向野田古墳整穴式石室2	162
図版63	向野田古墳整穴式石室3	163
図版64	向野田古墳石棺内状態	163
図版65	向野田古墳出土装身具	175
図版66	向野田古墳出土鉄器	176
図版67	西潤野古墳石蓋土墳	178

目 次

第1表	宇土半島古墳時代主要遺跡一覧表	9
第2表	宇土半島基部古墳一覧表	14
第3表	東畑古墳出土土器観察表	111
第4表	山王平古墳表採土器観察表	117
第5表	境目石棺群一覧表	124
第6表	古墳参考地(宇東潤野)表採須恵器 観察表	139

第7表	古墳参考地(宇北請)表採須恵器 観察表	149
第8表	宇城地方古墳発掘調査年譜一覧表	181
第9表	宇城地方古墳時代関係文献一覧表	184
第10表	宇城地方古墳・石棺出土土人骨 一覧表	191

I 序 章

1. はじめに

昭和30年代の半ばまでは、宇土半島基部の地域にはあまり古墳の存在は知られておらず、数える程しかなかった。ところが、昭和30年代後半に始まったみかん園造成によって、従来閉塞されることがなかった丘陵や山間部にまで開発が及ぶようになり、前方後円墳をはじめとして多くの古墳が発見されるようになった。そのきっかけとなったのは宇土郡不知火町亀崎にある弁天山古墳（前方後円墳）・国越古墳（前方後円墳）などであり、これに続く形で宇土市からも前方後円墳が発見されるようになった。参考までに半島基部における前方後円墳発見の年次を示せば次のとおりであり、昭和40年前後以降のものが圧倒的に多いことがわかる。

昭和20（1945）年以前	下益城郡松橋町女夫塚古墳（男塚）
〃	宇土市女夫塚古墳（女塚）
〃	宇土市檜崎古墳
昭和38（1963）年12月	宇土郡不知火町弁天山古墳
昭和38（1963）年12月	宇土郡不知火町国越古墳
昭和40（1965）年8月	宇土市スリバチ山古墳
昭和40（1965）年8月	宇土市追ノ上古墳
昭和40（1965）年12月	宇土市天神山古墳
昭和41（1966）年4月	宇土市城ノ越古墳
昭和42（1967）年6月	宇土市向野田古墳
昭和43（1968）年12月	宇土郡不知火町仁王塚古墳
昭和53（1978）年1月	宇土市御手水古墳

もちろんこれ以外にも多くの円墳や石棺が発見されており、昭和37年以前と今日の古墳の数を比較すれば10倍以上の違いがある。その意味ではこの25年間の発見・調査・研究の歩みはそれ以前とは隔世の感があり、それを推進された富樫卯三郎氏を始めとする宇土高校社会部や同OBの功績は絶大なものがある。

連の古墳発見が基数を増したという点で重要であることはいうまでもないが、それにもまして重要なことは、これらの古墳の幾つかに古式古墳や大規模古墳が含まれるという点にもある。各古墳の詳細な内容とその意義については第三章及び第五章で触れることにするが、調査が行われて内容の一部が明らかになっている弁天山古墳・追ノ上古墳・スリバチ山古墳・城ノ越古墳・向野田古墳・チャン山古墳などが前期に属すると考えられるし、このうちのスリバチ

山古墳が全長96mの前方後円墳であり、5世紀前半代に位置づけられる天神山古墳が110mの県下最大規模の前方後円墳である。

九州においていち早く古墳が築かれるのは瀬戸内海に面した豊前地方であろうと考えられるが、これに続く形で玄界灘沿岸においても造られるようになるし、引き続いて西九州肥後地方の宇土半島基部で他の地域に先がけて前期古墳が築かれる。

その意味でも当該地方の古墳は特に重要な意味をもっており、調査研究を進めるのはもちろんのこと、古墳の保存に努めるのが我々の義務である。

(高木・木下)

2. 調査の組織 (昭和61年度分)

調査主体	宇土市教育委員会		
	教育長	船田	至
調査総括	社会教育課長	本郷	裕幸
	文化振興係長	一	宗雄
調査庶務	参事	中野	照子
調査担当	主事	高木	恭二
	主事	木下	洋介
調査補助	元松茂樹・吉田幸誠・今村 到・田中啓三・山田英裕		
調査指導	富樫卯三郎 (前肥後考古学会会長)		
	三島 格 (肥後考古学会会長)		
	北條 暉幸 (産業医科大学教授)		

3. 調査の経過

宇城地方の古墳や宇土半島基部の古墳について語るには、その調査・研究の歴史をふり返っておく必要がある。その詳細を述べる余裕はないが、第IV章1調査年譜や同じく第IV章2文献一覧によってその流れを参照していただきたい。

江戸時代や明治時代には偶然の機会に発見されたおりの記録がいくつかあるが、科学的な考古学研究の始まりは大正時代になってからであった。京都大学の浜田耕作・梅原末治・島田貞彦氏等による『肥後における装飾ある古墳』と『九州における装飾ある古墳及横穴』に代表される一連の装飾古墳調査がその端緒であり、それに影響されるかたちで県史跡調査会が組織されて、さらには小林久雄・坂本経典・富樫卯三郎・松本聖明・乙益重隆・三島格氏などの県内

の研究者による調査活動が活発化してくる。なかでも宇土市を中心とする半島基部とその周辺の遺跡調査を精力的に実施したのは富樫卯三郎氏である。それを支えてきた宇土高校社会部や岡OBの存在も忘れてはならないが、これによって県内でもあまり知られていなかった宇土半島基部古墳群の存在が大きく浮かびあがることになった。なかでも前期に属する数基の前方後円墳の発見とその調査は、九州の古墳文化総体を考える上でも極めて重要なものとなっている。

その多くは高度経済成長期の諸開発行為によって発見され、幾つかは無残にも旧状を大きく変えてしまっている。ところがその後が始まった宅地開発は地方の小都市であるがゆえにそれほど大規模ではなく、しかも開発される場所が主に沖積平野に近い低地に集中して行われたために、直接的な破壊を受けることは大都市ほどではない。とはいえ、開発の波も次第にそれらの地域にまで及ぶようになったし、行政的にそれらの開発に対応できる古墳群全体の分布状況や基本的事項も殆ど不明である。まして、各古墳の詳細な内容やその実態は殆ど分かっていないのが実状である。

そこで市教育委員会では昭和56年度から毎年、国・県の補助金を受けて「宇土半島基部古墳群分布調査事業」として継続して分布調査・確認調査を実施し、今後の開発や保存対策にそなえる為の基礎調査を実施することになった。この調査も今年度で6年目となり、本報告ではこれまでの分布調査・確認調査と従来の小調査の成果をまとめる分布図・各古墳解説を作成して中間的総括を行うこととした。

今年度調査の経過を記せば次のようである。

- 12月8日 宇土半島山塊の東端部に位置する大平横穴墓の周辺から踏査を開始する。大平横穴墓からスリバチ山古墳・追ノ上古墳の間には谷部に延びる幾つかの突出した丘陵があり、それらの尾根づたいに調査を行なう。午後、伊無田天満宮境内に箱式石棺を発見、墳丘が円墳であることを確認する(古墳名、久保2号墳)。その東側の久保1号墳の墳丘規模を計測する。その後、久保2号墳の北西の雑木林で須恵器数点を採集する(古墳参考地字北請)。猫ノ城古墳・神合古墳については、墳丘規模の計測を行なう。
- 12月9日 神合古墳の西側丘陵を中心に行なう。この周辺は、ミカン園開墾により旧状を留めていないようである。次に、僅かに突出した丘陵端に日吉神社があり、その境内に横穴式石室を発見。墳丘が円墳であることを確認し、前庭部から須恵器を採集する(古墳名、山王平古墳)。さらに西側へ移動し、仮又古墳の東方までの一帯を行なう。
- 12月10日 前日に引き続き仮又古墳の東側丘陵から踏査を始める。仮又古墳の眼下に位置する仮又2号墳の墳丘規模の計測を行ない、西方から北方にかけ突出した丘陵の調査を主に行なう。仮又古墳の真北に対峙する丘陵末端から土師器を採集し、東畑古墳に向かう。東畑2号墳に変化は無かったが、東畑古墳は採土によって墳丘の一部が破壊され

ており、その両側周溝底から多量の須恵器を採集する。

- 12月11日 この日は、金嶽山古墳から西方へ調査を行なう。特に新しい発見はなく、果下最大級を誇る天神山古墳も近年は大きな変化がないようである。次に、伊津野遺跡一帯と梅崎箱式石棺群周辺を踏査する。
- 12月15日 昨日未確認に終わった金嶽山古墳を確認するため、その一帯を再調査する。それから、神ノ木山古墳群・尾ノ上横穴墓群にかけて進み、尾ノ上横穴墓群では、半環のものを含め約20基を確認した。さらに、梅崎古墳に使用されていたと思われる玄門部石材？確認のため丘陵西方一帯を踏査するが、発見出来なかった。
- 12月16日 これまでに、古墳の存在が確認されていない網津川流域の丘陵一帯を行ない、その中流域西側の丘陵に円墳状の地形を1箇所確認した(古墳参考地字局畑)。その後、御殿山古墳の石室の計測を行ない、西方の御殿山箱式石棺を探す。また、東方に突出した丘陵端に笹で覆われた円墳状の地形を確認した(古墳参考地字堤上)。
- 12月17日 この日は、海に面する丘陵を中心に調査を行なう。まず初めに、小池平1号・2号墳の計測を行ない、小松古墳へ向かう。しかし、小松2号墳に変化は無かったものの、昭和38年に調査が行なわれた小松古墳は確認出来なかった。その後、城古墳群の北側丘陵一帯を踏査し、赤色顔料の塗られた石材を数点発見した。一帯は、ミカン園となっているが、古墳等が存在していたことはまちがいないようである(古墳参考地字藤崎)。また、城2号墳の東に円墳らしき地形(古墳参考地字田平)を確認し、その計測を行なう。次に、西方のマブシ古墳群一帯を踏査し、1号石棺の計測を行なった。最後に、小部田横穴墓群の現状を見たが、横穴墓に再利用の痕跡があり、さらに詳しい調査が必要と思われた。
- 12月18日以降 過年度の調査と合わせて、宇土半島基部古墳群分布調査の成果報告のため、それらの整理や関連資料収集及び報告書の作成を行なった。

(木下)

4. 位置と環境

西九州に大きく湾入する有明海は、宇土半島によって南北に分断された形をなす。一般的には北側を有明海又は島原湾と呼び、南側を八代海ないしは不知火海と呼ぶことが多い。この宇土半島は、大岳(標高478m)を主峰とし、そこから丘陵が海に向かって延び、数多くの派生丘陵をつくっている。なだらかに延びたそれらの丘陵が海に迫る先端部付近の標高20~40m付近の多くには小古墳がいくつか築かれており、宇土半島の古墳の性格の一端を示している。

宇土半島の全域は大岳・三角岳の火砕流堆積物である凝灰角礫岩や安山岩がかなり広く覆っ

ているが、場所によっては古第三紀の砂岩や阿蘇山の火砕流堆積物である阿蘇溶結凝灰岩の見られるところもある。これらの安山岩・砂岩・凝灰岩は、古墳の石材として利用されており、石室・石棺用材として、時代や使用する場所によって巧みに使い分けられる。

宇土半島の各丘陵先端部や宇土半島基部には数多くの古墳があり、熊本県下でも特異な古墳群として位置づけできる。特に、半島基部の古墳は前期に属するものや大型の前方後円墳が集まっていることに特徴があり、九州でも有力な古墳集中地帯の一つに挙げられる。

しかし、宇土半島と宇土半島基部の古墳には性格が微妙に異なるところがあり、これを一様にとらえることには問題がある。つまり、宇土半島基部には前方後円墳が13基ほど見られ、その周辺には比較的大きな円墳があるのに対して、基部を除いた宇土半島には前方後円墳は1基もなく、各丘陵先端部に小古墳ないしは石棺がある程度である。このことからみても、宇土半島基部の一群は首長とその一族の墓であり、半島部の古墳の内の大きめのものは在地性の強い小集団の長、ないしはその一族の墓であろうと推定されるのである。そのことから考えると、半島基部の範囲はどこまでかという点が問題となってくる。本書のように行政的な基準で古墳の解説を行なってしまうと、その実態はなほぼんやりとしてしまうことにもなりかねない。本章においてこのことを詳しく述べることはやや問題があるが、古墳を理解する上では重要なことである。

宇土半島の先端部は宇土郡三角町であり、半島の真ん中付近から東を宇土市と宇土郡不知火町がある。半島基部の北を宇土市が占め、南を不知火町、南東部は下益城郡松橋町となっている。

(高木)



第1圖 宇土半島古墳時代主要遺跡分布圖 (1:100000)

第1表 宇土半島古墳時代主要遺跡一覧表

No	遺跡名	概要	文献	No	遺跡名	概要	文献
1	ヤンボシ塚古墳	円墳・横穴式石室 (装飾)	①	31	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	⑬
2	城1号墳	横穴式石室	②	32	柏原古墳	円墳	⑬
3	城2号墳	竖穴系横口式石室	③	33	御領東原古墳群	横穴式石室3基	⑬
4	マブシ古墳群	箱式石棺	④	34	宇賀岳古墳	横穴式石室(装飾)	⑭
5	小松古墳群		⑤	35	向野田古墳	前方後円墳・横穴式石室 (埴輪)	⑭
6	長浜箱式石棺群			36	向野田石蓋土墳墓	石蓋土墳	⑭
7	小池平古墳	横穴式石室		37	御手水2号墳	円墳	
8	小部田横穴墓群	11基	⑥	38	御手水古墳	前方後円墳	
9	御殿山古墳	横穴式石室		39	南山内箱式石棺群	3基	⑮
10	梅崎古墳	横穴式石室(装飾)	⑦	40	南山内古墳	円墳	
11	梅崎箱式石棺群			41	チャン山(茶臼山)古墳	円墳・横穴式石室	⑮
12	城塚古墳	横穴式石室		42	樋巻古墳	横穴式石室	
13	尾ノ上横穴墓群		⑧	43	畑中遺跡	包蔵地	
14	神ノ木山古墳群	4基・横穴式石室	⑨	44	境目遺跡	包蔵地	⑯
15	天神山古墳	前方後円墳	⑩	45	上松山石棺	箱式石棺	
16	古墳参考地(経塚)			46	神ノ山古墳群	円墳3基・家形石棺	⑯
17	東畑古墳	横穴式石室(装飾)	⑪	47	古保里石棺群	箱式石棺5基	⑯
18	金嶺山古墳	横穴式石室		48	西瀬野古墳	石蓋土墳(家形)	⑰
19	椿原石蓋土墳墓	石蓋土墳	⑫	49	潤野古墳	円墳・家形石棺	⑰
20	仮又古墳	横穴式石室(装飾)	⑬	50	晚免古墳	円墳・家形石棺	⑰
21	西岡台遺跡	V字溝・箱式石棺	⑭	51	山下古墳	円墳(埴輪)	⑱
22	宇土城遺跡	包蔵地		52	檜崎古墳	前方後円墳?・舟形石棺・家形石棺他	⑱
23	箱ノ城古墳	円墳		53	女夫塚古墳(男塚)	前方後円墳	⑲
24	城ノ蔵古墳	前方後円墳	⑮	54	女夫塚古墳(女塚)	前方後円墳?	⑲
25	神合古墳	円墳(埴輪)		55	三日鬼ノ岩屋古墳	横穴式石室	
26	スリバチ山古墳	前方後円墳(埴輪)	⑯	56	神ノ上古墳	円墳・横穴式石室	
27	迫ノ上古墳	前方後円墳・横穴式石室	⑰	57	池尾古墳		⑲
28	久保1号墳	円墳		58	畑中古墳		
29	大平横穴墓		⑰	59	琵琶田遺跡	須恵器遺跡	⑲
30	仁玉塚古墳	前方後円墳	⑲	60	当尾小学校東遺跡	須恵器遺跡	⑲

No	遺跡名	概要	文献	No	遺跡名	概要	文献
61	グローバル古墳	円墳		92	大串古墳	横穴式石室	㊶
62	上ノ原遺跡	包蔵地		93	要古墳群	箱式石棺5基	㊶
63	松橋大塚古墳	前方後円墳(埴輪)		94	手搦古墳群	3基	㊶
64	前田遺跡	朝顔形埴輪	㊶	95	志江崎古墳		㊶
65	狐塚古墳		㊶	96	御船横穴群	横穴6基	㊶
66	豊福古墳	横穴式石室		97	御船石棺群	2基	㊶
67	十五社石棺群	箱式石棺3基		98	児島崎古墳(首塚)	横穴式石室	㊶
68	塚原平古墳	円墳(埴輪)		99	打越中原遺跡		
69	大迫2号墳	横穴式石室	㊶	100	竹和田古墳	円墳	㊶
70	大迫1号墳	横穴式石室	㊶	101	西木の浦古墳群	10基	㊶
71	塚原栗崎2号墳	横穴式石室	㊶	102	西木の浦横穴群	4基	
72	塚原栗崎1号墳	横穴式石室(装飾)	㊶	103	小鹿里古墳(御塚)	横穴式石室	㊶
73	鴨籠2号墳	横穴式石室(埴輪)	㊶	104	大鹿里古墳(鬼塚)	円墳	㊶
74	鴨籠古墳	円墳・家形石棺 (高孤文)	㊶	105	金桁古墳群	円墳・箱式石棺	㊶
75	朱斗堂跡	須恵器窯跡	㊶	106	平松古墳群	円墳4基・箱式石棺 10数基	㊶
76	元米の山窯跡	須恵器窯跡	㊶	107	塚屋浦製塩遺跡	製塩土器包蔵地	㊶
77	八久保古墳	円墳・箱式石棺	㊶	108	重盛山(神内)古墳群	円墳・横穴式石室他	㊶
78	園越古墳	前方後円墳・横穴式 石室(埴輪)	㊶	109	越路古墳群	箱式石棺他	㊶
79	道免古墳	円墳(埴輪)	㊶	110	藤崎古墳群	横穴式石室他	㊶
80	東塚屋浦古墳	箱式石棺	㊶	111	磯山(清水)古墳群	箱式石棺数基	㊶
81	弁天山石棺群	箱式石棺2基	㊶	112	山の神(大田尾)横穴群	横穴7基	㊶
82	弁天山古墳	前方後円墳・横穴式 石室(埴輪)	㊶	113	大田尾製塩遺跡	製塩土器包蔵地	㊶
83	塩屋浦鬼の岩屋2号墳			114	小田良古墳	横穴式石室・装飾	㊶
84	塩屋浦鬼の岩屋1号墳	横穴式石室		115	田井ノ浦古墳	横穴式石室	㊶
85	桂原2号墳	横穴式石室(装飾)		116	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	㊶
86	桂原古墳	円墳・横穴式石室 (装飾)	㊶	117	辺田古墳群	円墳・横穴式石室他	㊶
87	黒田製塩遺跡	製塩炉	㊶	118	大崎石棺群	箱式石棺数基	㊶
88	水原於呂口古墳	箱式石棺	㊶	119	丸子島古墳	石棺系石室1基・横 穴式石室2基	㊶
89	狐塚古墳	箱式石棺	㊶	120	犬槍遺跡	包蔵地	
90	河添鬼の岩屋古墳	円墳・横穴式石室	㊶	121	寺島石棺群	箱式石棺5基	㊶
91	大見観音崎石棺群	箱式石棺	㊶				

<文献>

- ① 高木恭二・木下洋介・元松茂樹・他「ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集、1986年、宇土。
- ② 富樫卯三郎「網田古墳群」『宇土市の文化財』第3集 P11、1977年、宇土。
- ③ 三島 格・他「城二号墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、1981年、宇土。
- ④ 富樫・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島・自然と文化』P107~118、1975年、宇土。
- ⑤ 富樫「小松古墳」『宇土市の文化財』第3集 P10、1977年、宇土。
- ⑥ 富樫「小部田横穴古墳群」『宇土市の文化財』第1集 P11、1972年、宇土。
- ⑦ 富樫「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』20号 1969年、東京。
- ⑧ 富樫「城塚尾上横穴古墳群」『宇土市の文化財』第3集 P14、1977年、宇土。
- ⑨ 富樫「神ノ木山遺跡」『宇土市の文化財』第3集 P13、1977年、宇土。
- ⑩ 富樫「天神山古墳」『宇土市の文化財』第3集 P10、1977年、宇土。
- ⑪ 的場義夫「裝飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発見のいきさつ」『宇土とところどころ』P26、1978年、宇土。
- ⑫ 三島「宇土市轟橋原における石蓋土壇の一例」『熊本史学』15・16号、1959年、熊本。
- ⑬ 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大学文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。
- ⑭ 富樫・他「宇土城跡（西岡台）」宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977年、宇土。
- ⑮ 富樫「熊本県宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神歌鏡」『熊本史学』33号 1970年、熊本。
- ⑯ 富樫「淵鉢山古墳」『宇土市の文化財』第3集 P6、1977年、宇土。
- ⑰ 富樫「追ノ上古墳」『宇土市の文化財』第3集 P6、1977年、宇土。
- ⑱ 平山修一「大平横穴古墳」『宇土市の文化財』第3集 P14、1977年、宇土。
- ⑲ 坂本経堯「古墳時代」『不知火町史』1972年、不知火。
- ⑳ 濱田・島田・梅原「肥後国下益城郡松橋町の古墳」『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大学文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。
- ㉑ 富樫「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年、宇土。
- ㉒ 北條幸幸・平山・木下洋介「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究』創刊号 1980年、宇土。
- ㉓ 富樫「茶白山古墳出土の鳥獣鏡」『石人』No106 1968年、熊本。
- ㉔ 富樫「境目西原遺跡」宇土市教育委員会、1969年、宇土。
- ㉕ 宇土高校社会部「神ノ山1号墳」『宇土高校社会部部報』第2号 1968年、宇土。
- ㉖ 富樫「古保里石棺群」『宇土市の文化財』第3集 P4、1977年、宇土。
- ㉗ 富樫「宇土市大字立岡西洞野古墳」『ともしび』第5号 1960年、宇土。
- ㉘ 濱田・島田・梅原「肥後国宇土郡花園村の古墳」『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大学

文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。

- ㉔ 三島「肥後における古墳研究—戦後の成果と問題点—」『古代文化』第17巻第3号 1966年、京都。
- ㉕ 高木恭二・木下・古城史雄『女夫塚古墳（女塚）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第11集、1985年、宇土。
- ㉖ 林田志義「記念物」『松橋町史』1979年、松橋。
- ㉗ 宇土高校社会部「古城」宇土高校社会部部報第8号、1978年、宇土。
- ㉘ 佐藤伸二「中部九州における前期古墳発生の一側面」『法文論叢』第26号 1970年、熊本。
- ㉙ 三島「熊本県宇土郡塚原古墳群」『日本考古学年報』14 1966年、東京。
- ㉚ 濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村古墳」『肥後における装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊、1917年、京都。
- ㉛ 坂本「古代の生産」『不知火町史』1972年、不知火。
- ㉜ 宇土高校社会部「宇土高校社会部部報第1号」1967年、宇土。
- ㉝ 乙益重隆「不知火町岡越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』1967年、熊本。
- ㉞ 富樫「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴式石室墳」『熊本史学』第30号 1965年、熊本。
- ㉟ 三島「桂原古墳」『不知火町史』P72、1972年、不知火。
- ㊱ 村井真輝・浦田信智・他「大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」熊本県文化財調査報告第57集、1982年、熊本。
- ㊲ 甲元眞之・他「宇土半島古墳群分布調査報告（郡浦・大岳・三角・戸馳地区）」三角町文化財調査報告第6集、1986年、三角。
- ㊳ 甲元・松本健郎・他「宇土半島古墳群分布調査報告（郡浦・戸馳西地区）」三角町文化財調査報告第4集、1985年、三角。
- ㊴ 清野謙次「肥後国宇土郡郡浦村大字中村小字前田、金桁古墳」『日本人の研究』1943年、東京。
- ㊵ 坂本「平松箱式石棺群」1957年、三角。
- ㊶ 松本「生産遺跡調査報告書Ⅰ」熊本県文化財調査報告第38集、1979年、熊本。
- ㊷ 角田政治「三角町の古墳」『熊本県史蹟調査報告第一回』1918年、熊本。
- ㊸ 松本雅明・江本 直「小田良古墳」三角町文化財調査報告第1集、1979年、三角。
- ㊹ 富樫「三角町辺田古墳発掘調査概報」1968年、三角。

II 古墳分布図

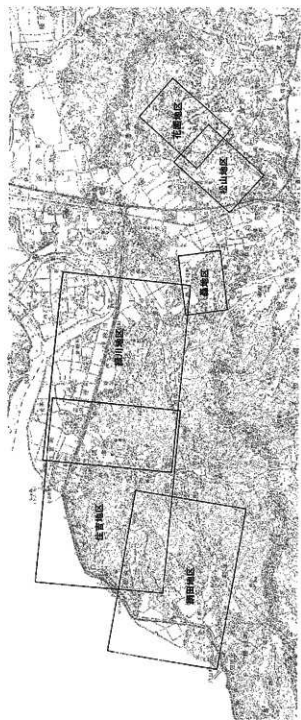
第2表 中土半島高部古墳一覧表

No	古墳名	所在地	墳丘	内部主体	遺物	その他	発掘番号
1	梅崎古墳	臣原町字庭坪		横穴式石室	耳環、須恵器	船の模型	3
2	梅崎簡式石棺群	"		簡式石棺			3
3	小松古墳	長浜町字小松		横穴式石室?			7
4	小松2号墳	"		石棺系石室2基並列			7
5	長浜簡式石棺群	" 井崎		簡式石棺2基並列			8
6	小池平1号墳	" 小池平	円墳	横穴式石室			8
7	小池平2号墳	"	円墳				8
8	小部田簡式石室群	往吉町字堤上		横穴墓11基	須恵器土師		9
9	小部田古墳	"	円墳?	横穴式石室			9
10	小部田簡式石棺	"		簡式石棺			9
11	古墳参考地(字堤上)	"					9
12	古墳参考地(字高畑)	網掛町字高畑		横穴式石室		銅鑄?	10
13	高塚古墳	高塚町字高塚		横穴墓		横穴墓群20基	11
14	尾ノ上横穴墓群	" 尾ノ上					11
15	神ノ木山古墳群	野池町字権堂・神ノ木		1号は横穴式石室?	耳環、玉環、須恵器他		12
16	天神山古墳	" 権堂	前方後円墳			寶石	12
17	占墳参考地(字庭坪)	豊原町字庭坪					12
18	オウシ古墳群	下網田町字坂原		石棺系石室・簡式石棺群群	鉄鏃、刀子		19
19	城古墳群	上網田町字城	円墳	肥後系横穴式石室	人骨片		19
20	城1号墳	"	円墳	肥後系横穴式石室	埴形形石製品、鉄器他		19
21	城2号墳	"	円墳	肥後系横穴式石室			19
22	古墳参考地(字津平)	" 田平					19
23	古墳参考地(字隈崎)	" 隈崎					19
24	高丸古墳群	" 小浜					19
25	ヤンギン塚古墳	志保町字坂又	円墳	肥後系横穴式石室	横矢、刀子、土師器他	船の模型、円文	19
26	坂又古墳	" 坂又2号墳	円墳	横穴式石室	鉄鏃、鉄鏃、須恵器他	船の模型、須恵器土師	24
27	東畑古墳	" 東畑	円墳	横穴式石室		鉄鏃?	24
28	東畑2号墳	"	円墳	"	須恵器他		24
29	東畑3号墳	"					24
30	安徳山古墳	" 金嶺		石蓋土塚墓			24
31	椿原石蓋土塚墓	椿原町字西園			人骨片		24
32	西園台簡式石棺	神尾町字千手堂		簡式石棺	人骨1体		25
33	山玉平古墳	神合町字山玉平	円墳	横穴式石室	須恵器		25
34	神合古墳	" 山ノ前	円墳		埴輪片		25

地	古墳名	所在地	墳丘	内部主体	遺物	その他	埋没 番号
35	鎌ノ尾古墳	重晴町字西平	円墳				25
36	城ノ越古墳	城ノ越	前方後円墳		三角縁四神四獣鏡		25
37	古城古墳(参考地)	神馬町字古城				鉄剣	25
38	現白箱式石棺群	境目町字西原		箱式石棺		得式石棺10数基	27
39	古塚里箱式石棺群	古塚里町字高屋敷・南五器田		"		"	4基
40	神ノ山1号墳	松山町字東原	円墳	彫形石棺	珠文鏡、玉環、鉄剣他		27
41	神ノ山2号墳	"	円墳	横穴式石室	鉄剣、鉄鍬他		27
42	神ノ山3号墳	"	円墳	横穴式石室	ガラス玉、鉄鍬他		27
43	上松山横式石棺	"		箱式石棺	珠		27
44	柳崎古墳	花籠町字楊崎	前方後円墳	石蓋石棺、蓋、雲雲石棺?蓋、角形石蓋1基、箱式石棺1基	刀剣、鉄鍬他	果指定史跡	28
45	友大塚古墳(牧原)	"	前方後円墳		須恵器他		28
46	古墳参考地(字東野野)	立岡町字東野野	円墳	東部石棺	須恵器、土師器		28
47	晚免古墳	"	円墳			円文	28
48	古城参考地(字四座橋)	古塚早町字四座橋	円墳	彫形石棺		円文、彫簡文	28
49	鶴野古墳	立原町字鶴野	円墳				28
50	志埴参考地(字四座橋)	古保里町字四座橋	円墳				28
51	三日鬼ノ瀬古墳	花籠町字大宮	円墳	横穴式石室			29
52	スリバチ山古墳	神会町字水谷	前方後円墳		彫形象牙土師器		40
53	迫ノ上古墳	"	前方後円墳	彫穴式石室、木棺	鉄剣、鉄刀他		40
54	志埴参考地(字北瀬)	伊熊田町字北瀬	円墳		須恵器		41
55	久保1号墳	"	円墳				41
56	久保2号墳	"	円墳	横式石棺			41
57	大平橋穴墓	栗崎町字大平		横穴墓	附付長頸笠・佩		42
58	福崎古墳	山町字福崎					42
59	チャン古墳	南山内	円墳?	彫穴式石室、粘土灰	鳥獣鏡、鉄刀他		42
60	南山内石蓋土塚墓	"	円墳	石蓋土塚墓			42
61	南山内志埴	"	円墳				42
62	南山内箱式石棺群	"	円墳	箱式石棺	人骨、刀子他	箱式石棺3基	42
63	御手水古墳	"	前方後円墳			墓石	42
64	御手水2号墳	"	円墳				42
65	志埴参考地(字南山内)	南山内					42
66	向野田古墳	"	前方後円墳	彫穴式石室、角形石棺	内行花文鏡、鳥獣鏡、刀形漆胡瓶、鳥槍石皿	出土品は西村定重源文、花厨	42
67	向野田石蓋土塚墓	向野田		石蓋土塚墓			42
68	古墳参考地(字柳野田)	"	円墳				42
69	西野野古墳	立岡町字西野野	円墳	石蓋土塚、箱式石棺			43

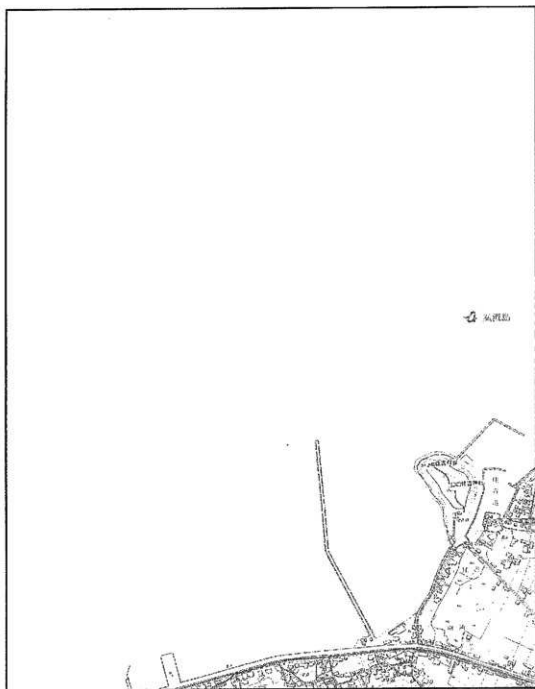


第 2 区 地区範圍區



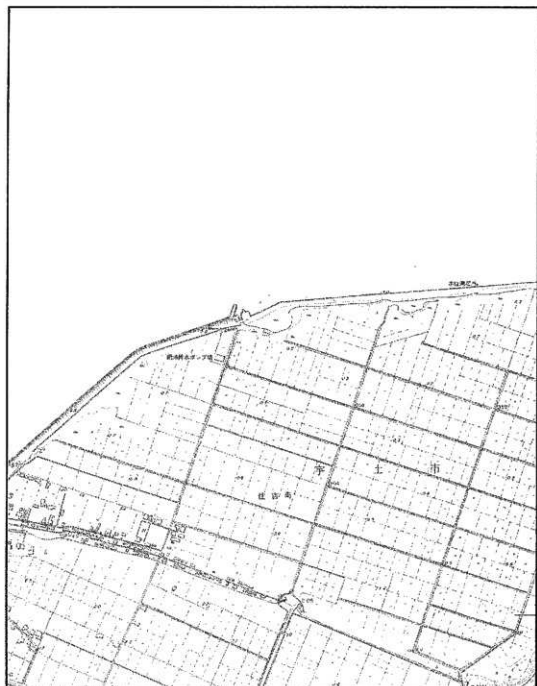
第3图 空中写真範圍区

地図-1



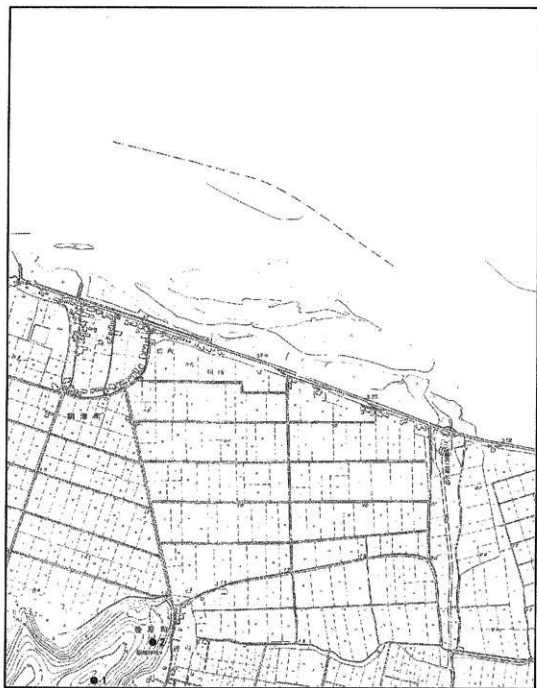
	1	2
8	9	10

0 500m



1	2	3
9	10	11

地図-3

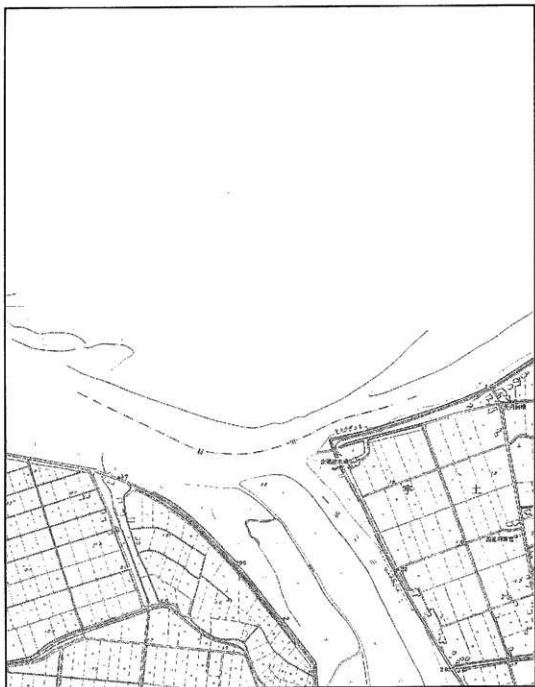


2	3	4
10	11	12



①梅崎古墳

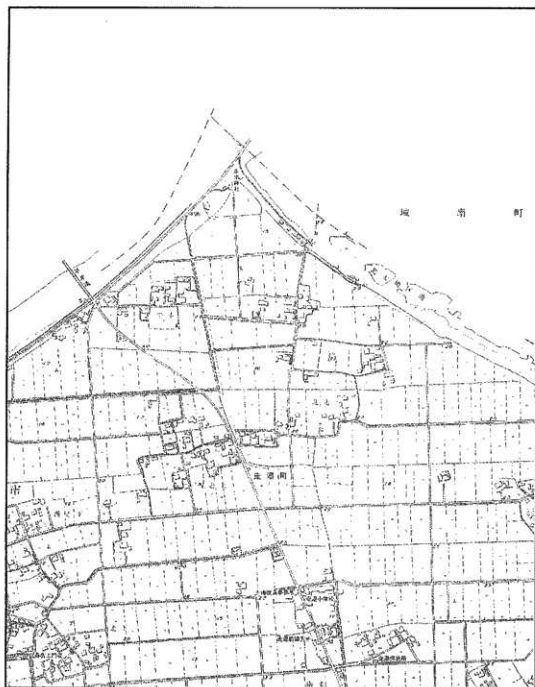
②梅崎箱式石棺群



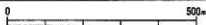
0 500m

3	4	5
11	12	13

地図-5

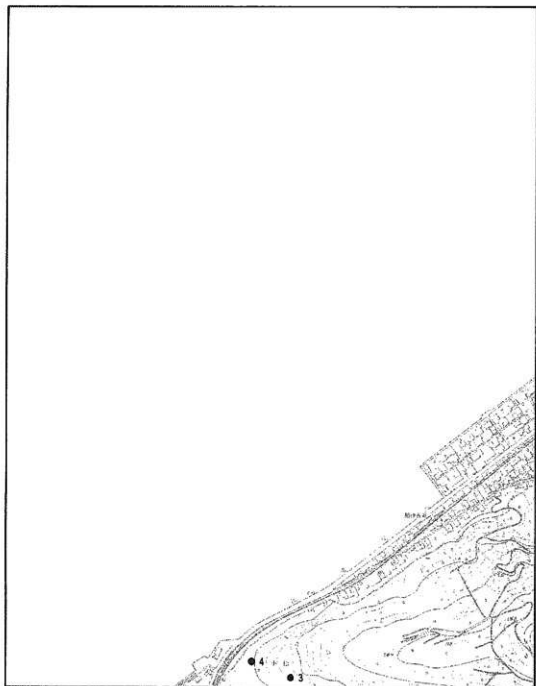


4	5	6
12	13	14



5	6	
13	14	15

地图-7



	7	8
18	19	20



③小松古墳

④小松2号墳



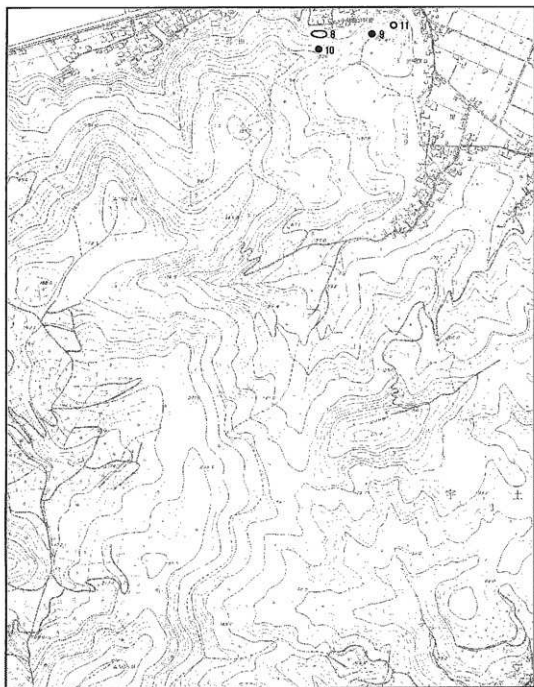
⑤此式石棺群

⑥小池平1号墳

⑦小池平2号墳

		1
7	8	9
19	20	21

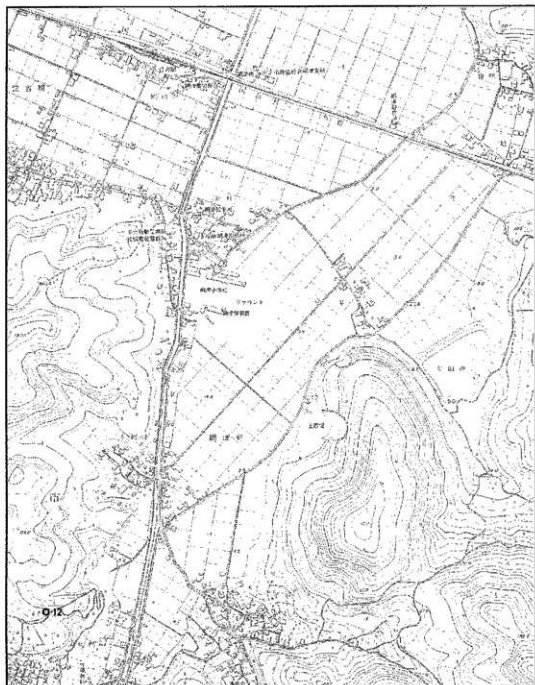
地図-9



	1	2
8	9	10
20	21	22

0 500m

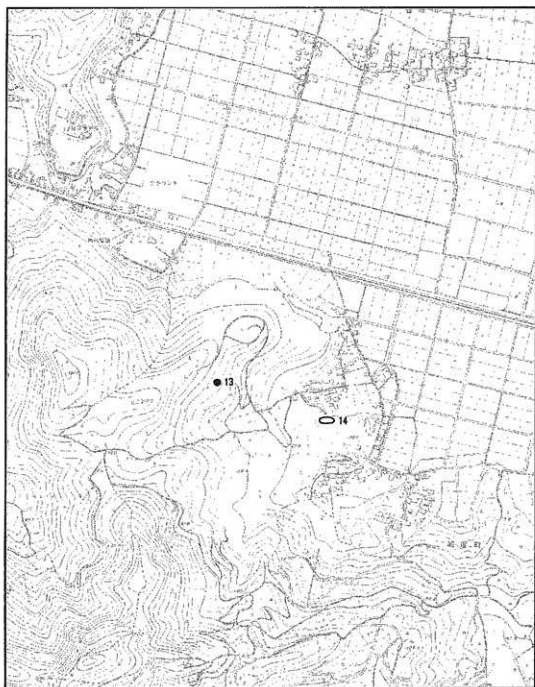
⑧ 小部田横穴墓群 ⑨ 銅殿山古墳 ⑩ 小部山箱式石棺
 ⑪ 古墳参考地 (字境上)



⑫古墳参考地（字尾畑）

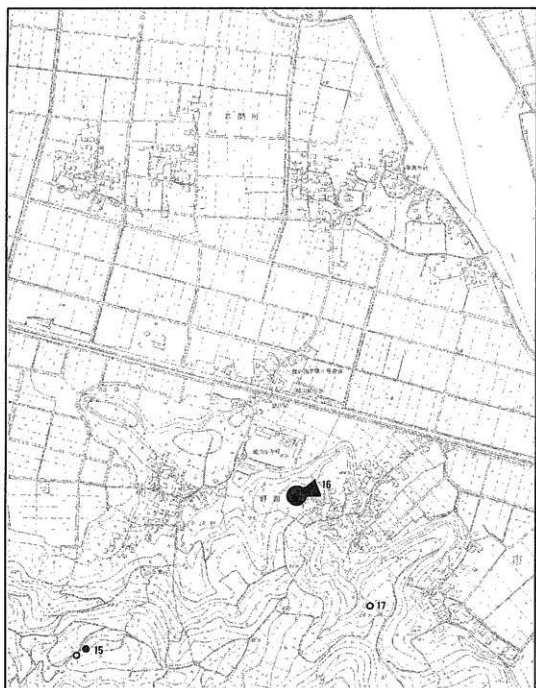
1	2	3
9	10	11
21	22	23

地図-11



2	3	4
10	11	12
22	23	24

0 500m
 ⑬城塚古墳 ⑭尾ノ上積穴墓群



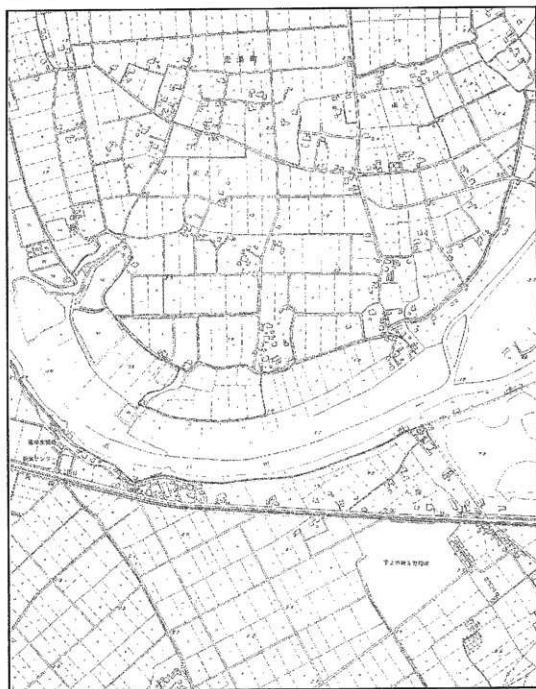
⑤神ノ木山古墳群

④大神山古墳

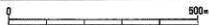
③古墳群考地(宇都塚)

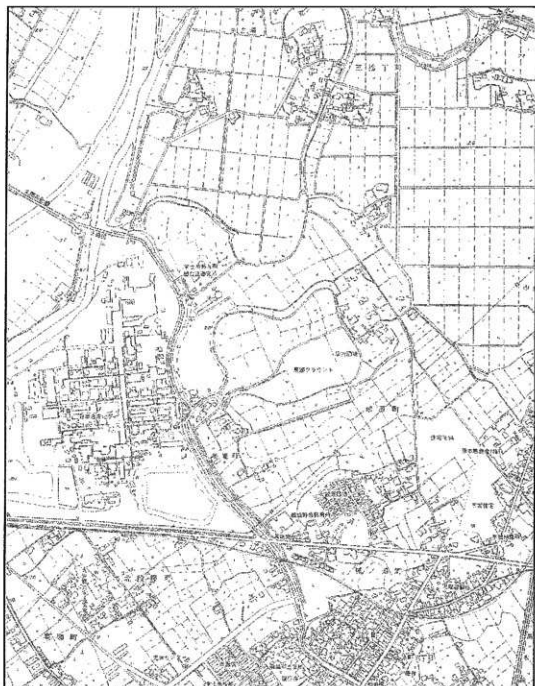
3	4	5
11	12	13
23	24	25

地図-13



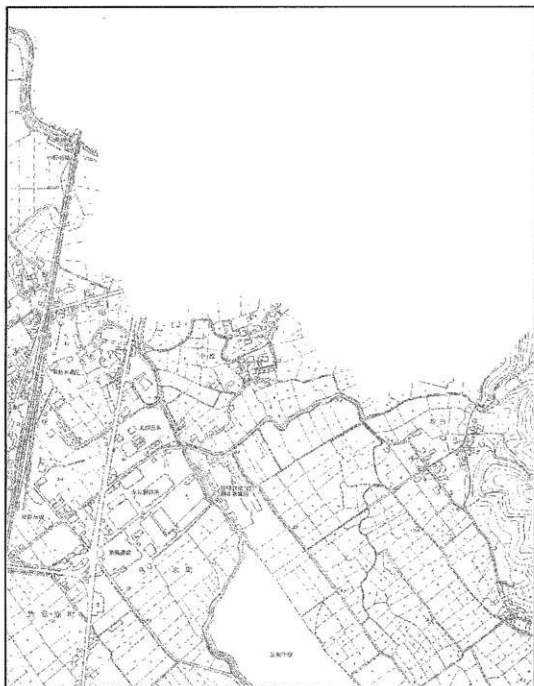
4	5	6
12	13	14
24	25	26





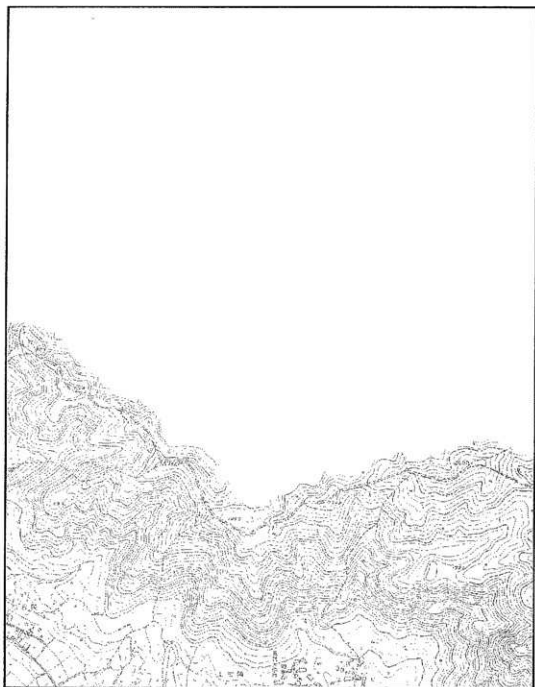
5	6	
13	14	15
25	26	27

地図-15



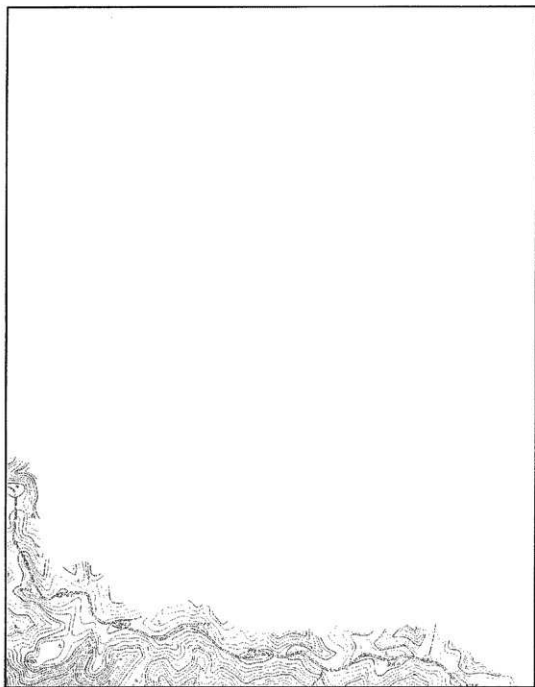
6		
14	15	16
26	27	28



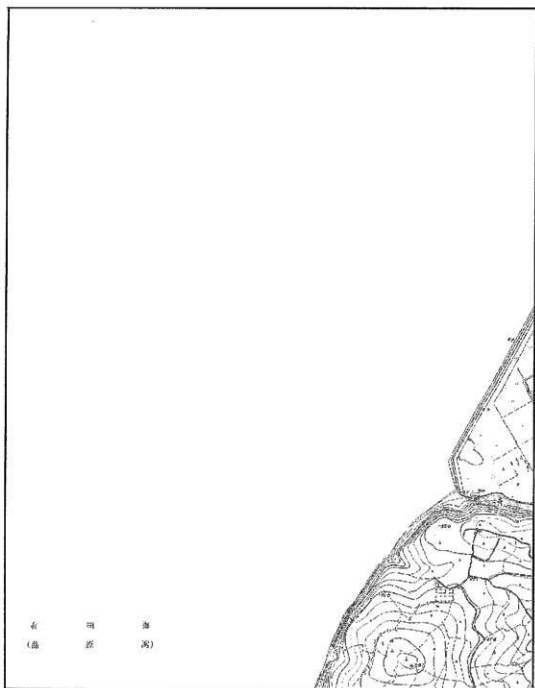


15	16	17
27	28	29

地图-17

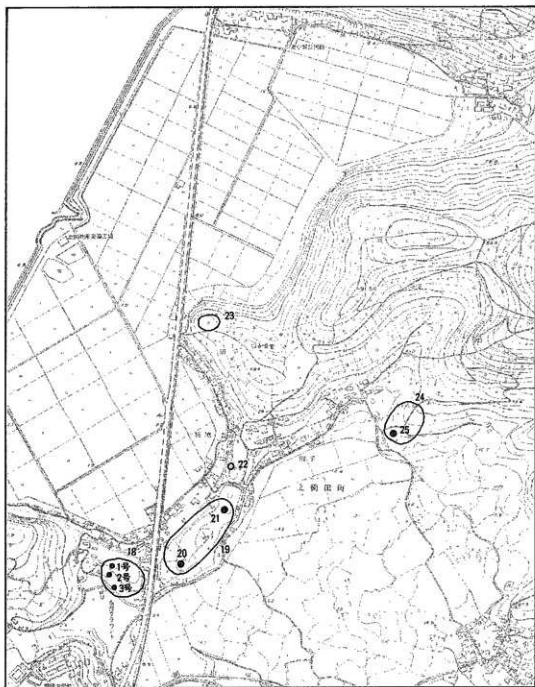


16	17	
28	29	30



		7
	18	19
32	33	34

地図-19



	7	8
18	19	20
33	34	35

⑱ マブシ古墳群

⑳ 城2号墳

㉑ 高丸古墳群

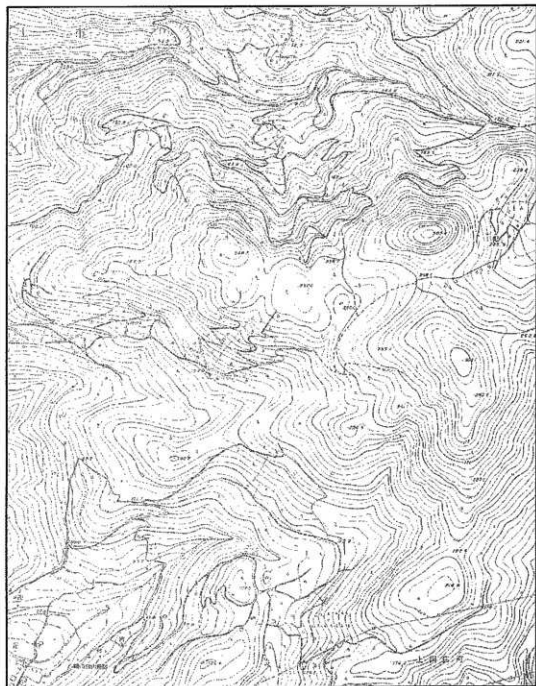
㉒ 城古墳群

㉓ 古墳参考地 (字田平)

㉔ ヤンボン塚古墳

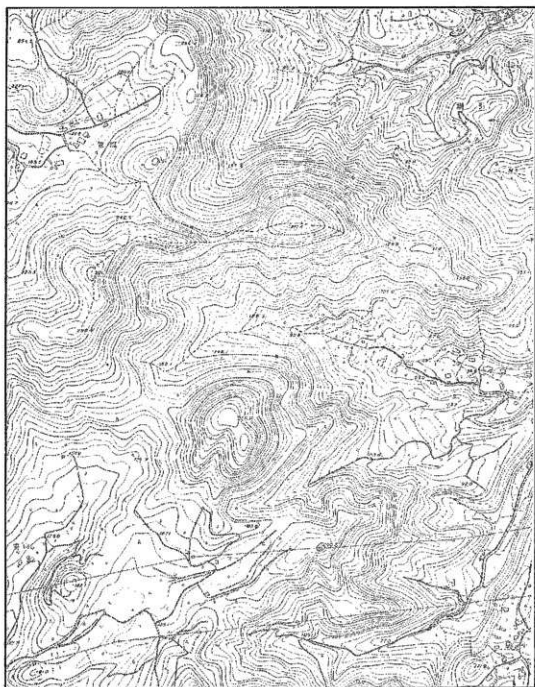
㉕ 城1号墳

㉖ 古墳参考地 (字野崎)



7	8	9
19	20	21
34	35	36

地图-21



8	9	10
20	21	22
35	36	37

0 500m



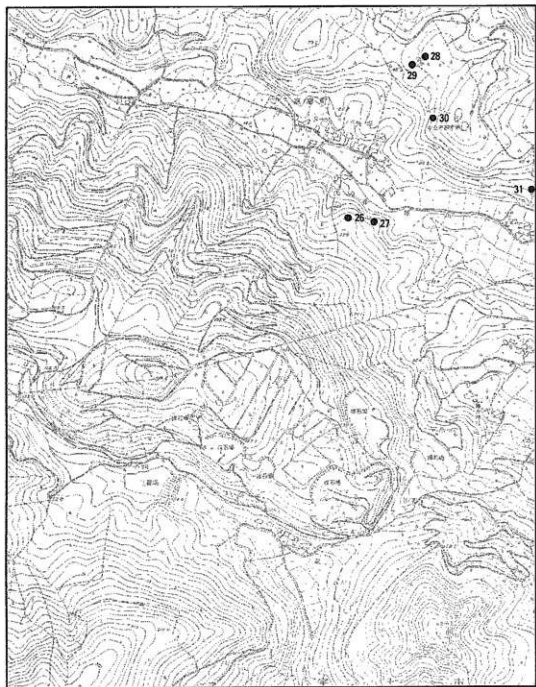
9	10	11
21	22	23
36	37	38

地图-23



10	11	12
22	23	24
37	38	39





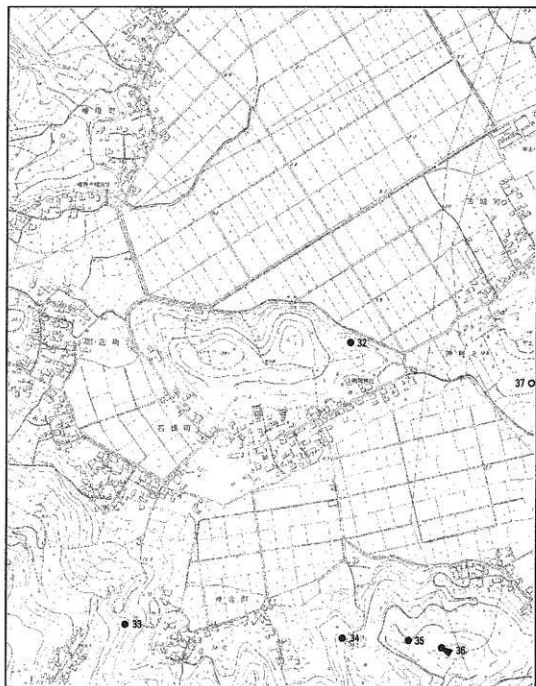
⑤ 倪叉古墳
⑥ 東堀2号墳

⑦ 倪叉2号墳
⑧ 金嶺山古墳

⑨ 東堀古墳
⑩ 神原石室土塚墓

11	12	13
23	24	25
38	39	40

地図-25

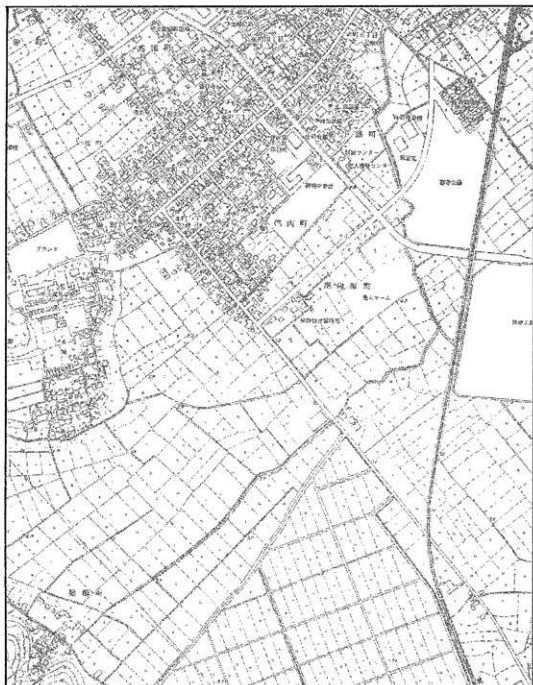


12	13	14
24	25	26
39	40	41

⑫西園台箱式石棺
⑬箱ノ坂古墳

⑭山王平古墳
⑮城ノ越古墳

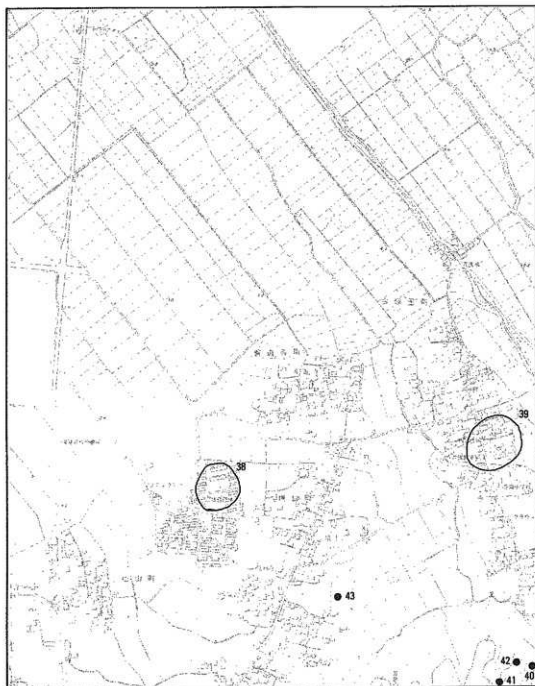
⑯神倉古墳
⑰古城古墳參考地



0 500m

13	14	15
25	26	27
40	41	42

地图-27



14	15	16
26	27	28
41	42	43

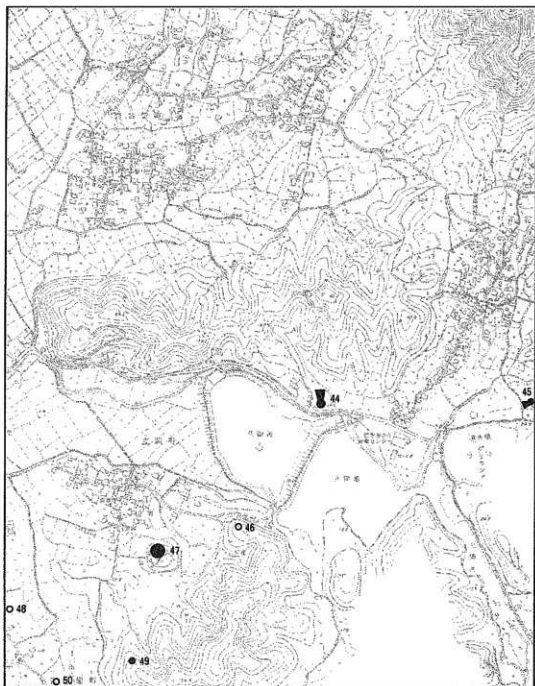
0 500m

- ⊙ 埡口石棺群

④ 神ノ山 2 号墳
- ⊙ 古保里石棺群

④ 神ノ山 3 号墳
- ⊙ 神ノ山 1 号墳

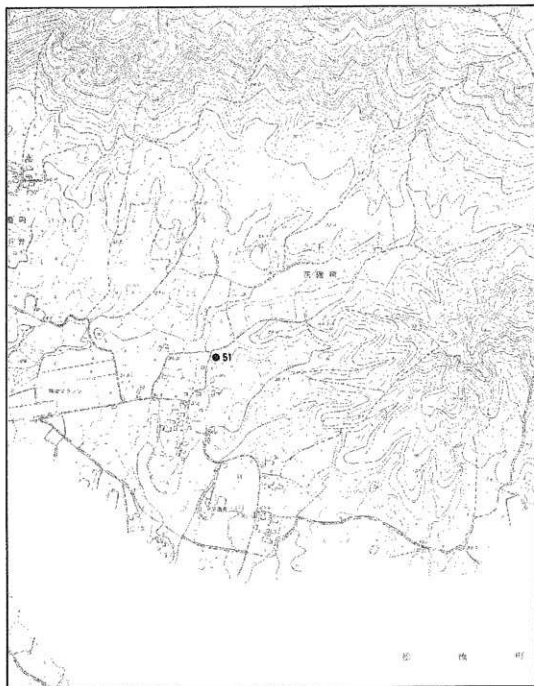
⊙ 上松山槨式石棺



- ④ 德崎古墳
 ④ 野見古墳
 ④ 古墳參考地 (字四度橋)
- ④ 女大塚古墳 (女塚)
 ④ 古墳參考地 (字四度橋)
- ④ 古墳參考地 (字東灘野)
 ④ 野野古墳

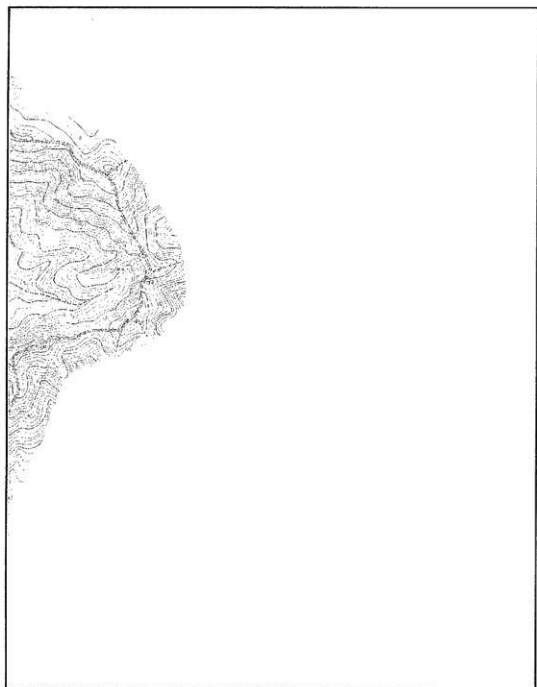
15	16	17
27	28	29
42	43	

地図-29



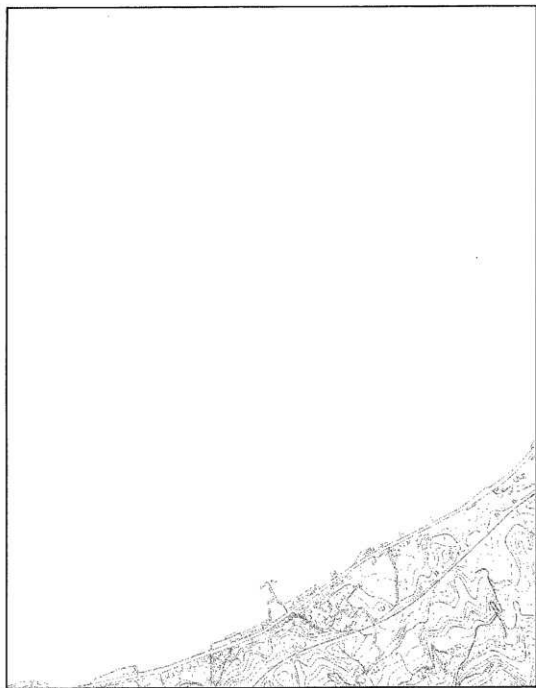
16	17	
28	29	30
43		

0 500m
 御三日鬼ノ窟古墳



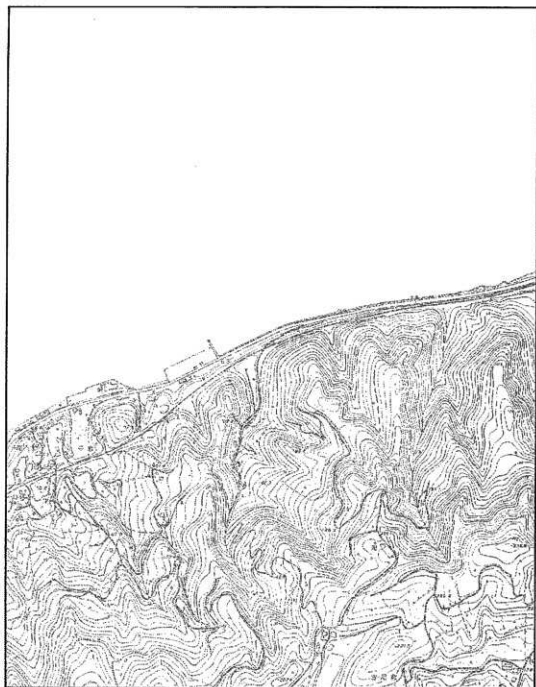
17		
29	30	

地区-31



	31	32
44	45	46



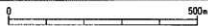


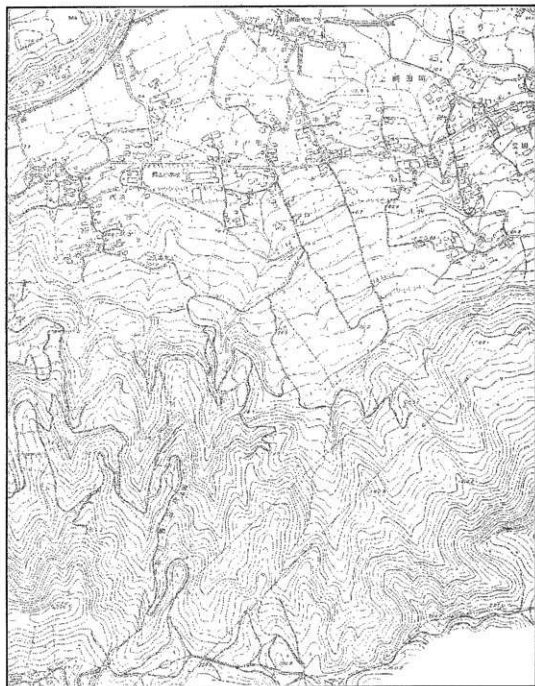
		18
31	32	33
45	46	47

地図-33



	18	19
32	33	34
46	47	

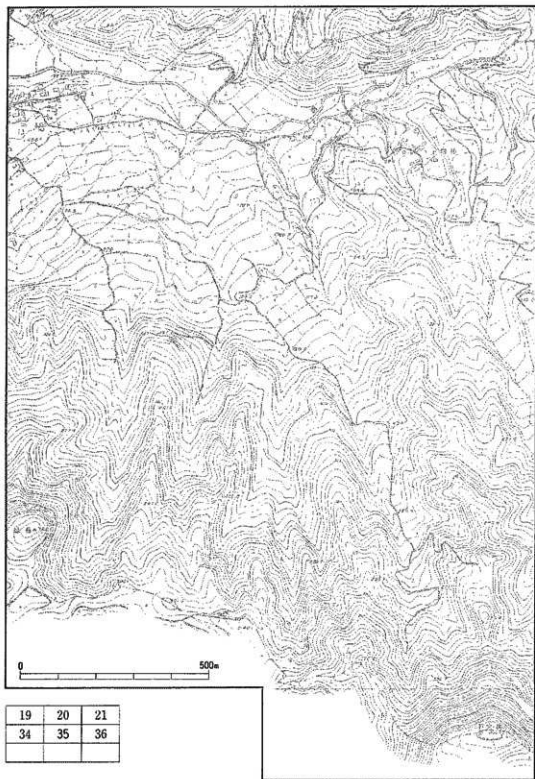


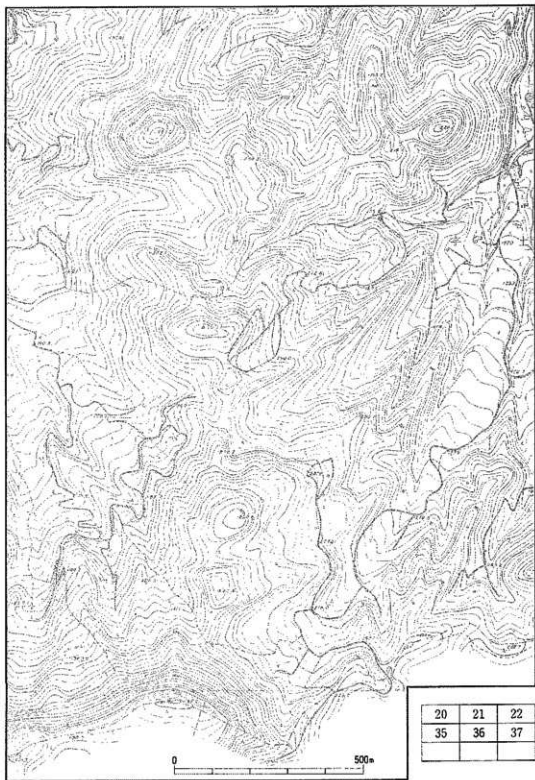


0 500m

18	19	20
33	34	35
47		

地图-35



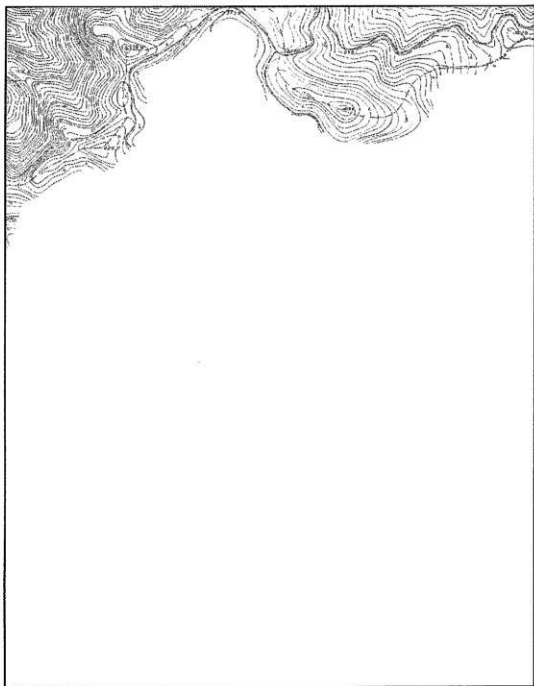


地圖-37



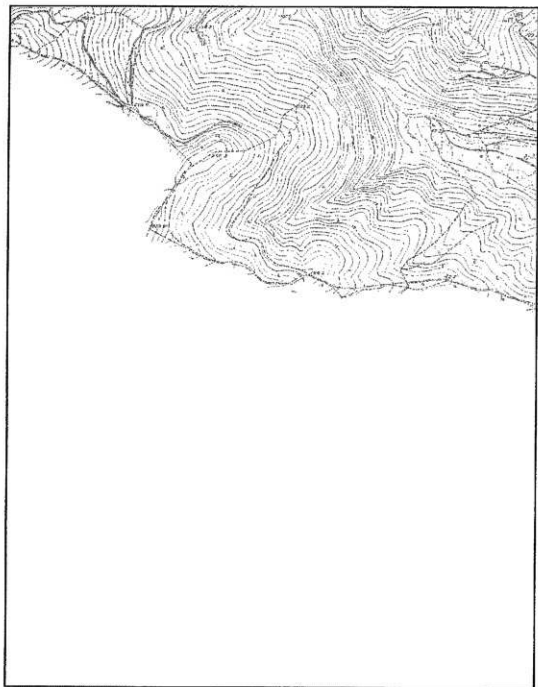
21	22	23
36	37	38





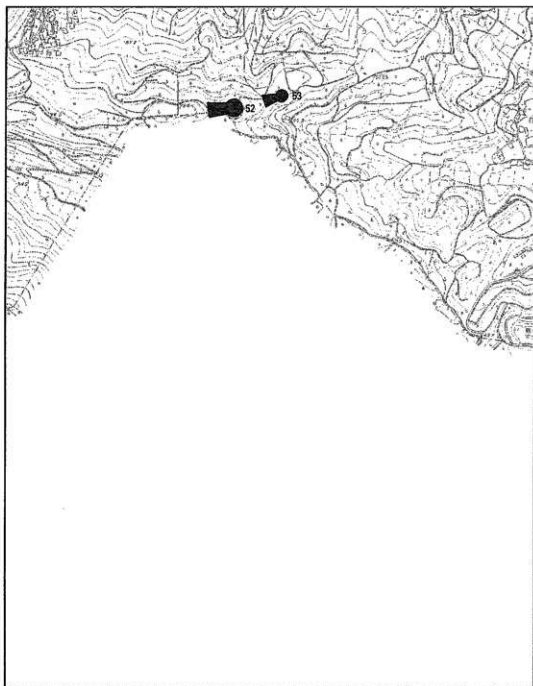
22	23	24
37	38	39

地圖-39



23	24	25
38	39	40



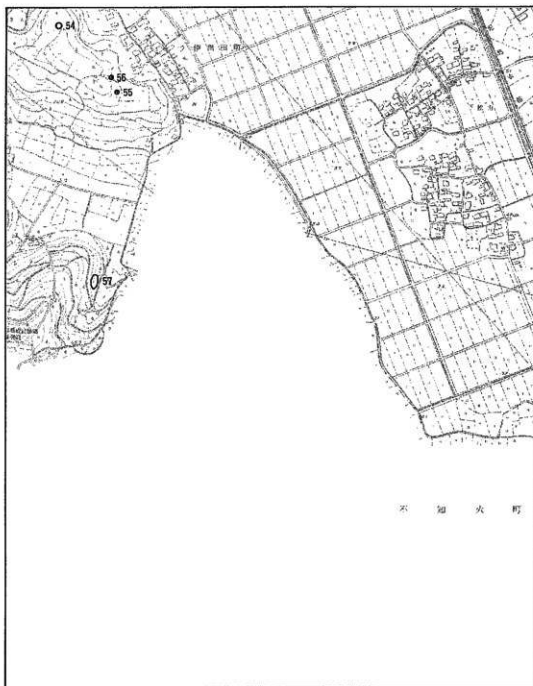


◎スリバナ山古墳

◎道ノ上古墳

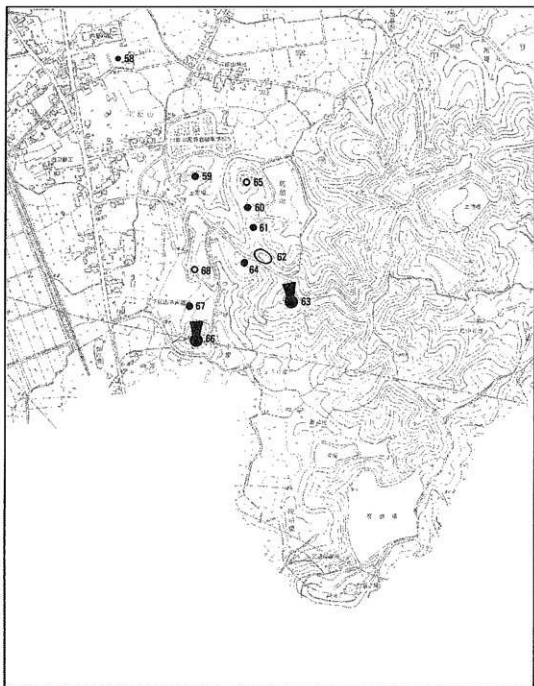
24	25	26
39	40	41

地図-41



25	26	27
40	41	42

- 0 500m
- ④古墳参考地(字北副) ⑤久保1号墳 ⑥久保2号墳
 ⑦人字横穴墓

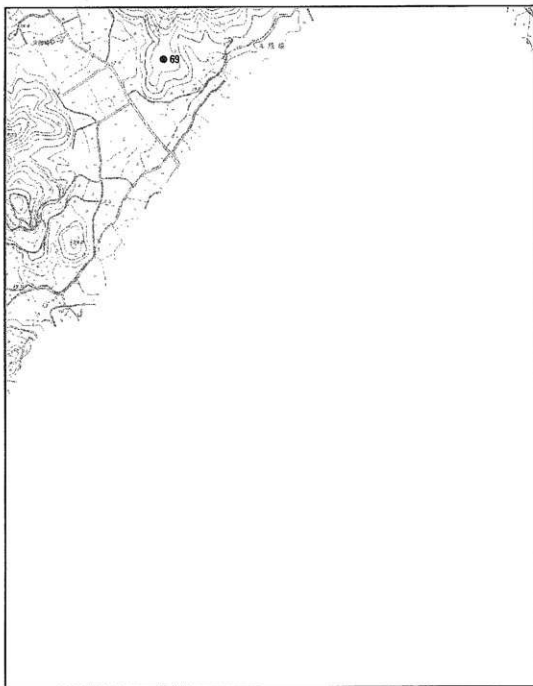


- ◎桶底古墳
- ◎南山内古墳
- ◎砂手水2号墳
- ◎向野田石蓋土塚墓

- ◎チャン山古墳
- ◎南山内箱式石棺群
- ◎古墳参考地(字南山内)
- ◎古墳参考地(字向野田)
- ◎南山内石蓋土塚墓
- ◎砂手水古墳
- ◎向野田古墳

26	27	28
41	42	43

地図-43

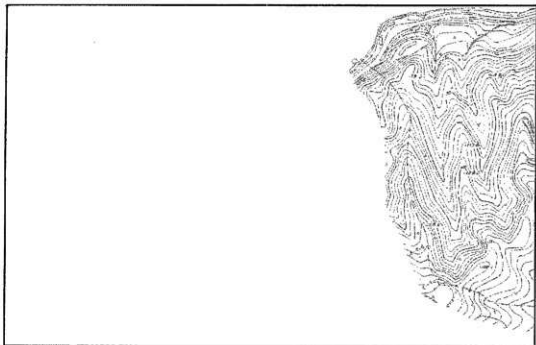


27	28	29
42	43	

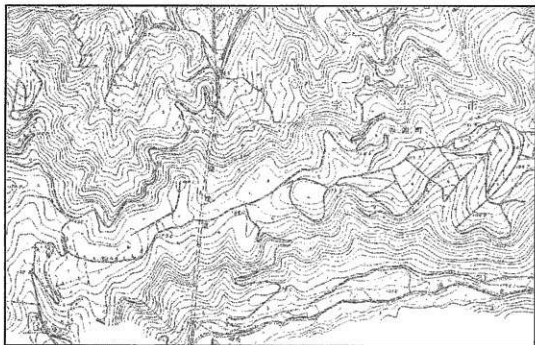


◎西森野古墳

地圖-44

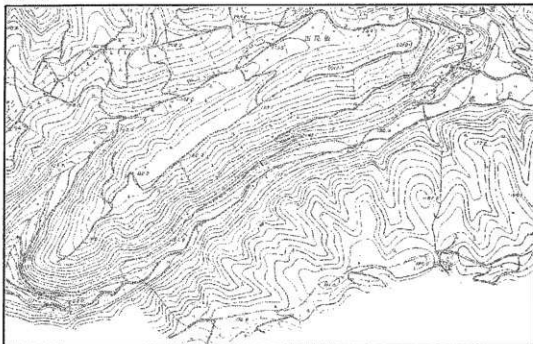


地圖-45

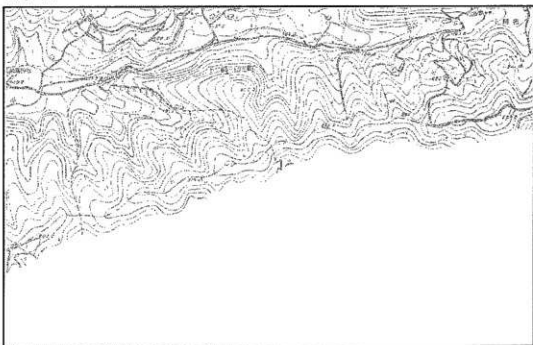


		31	32
	44	45	46

地图-46

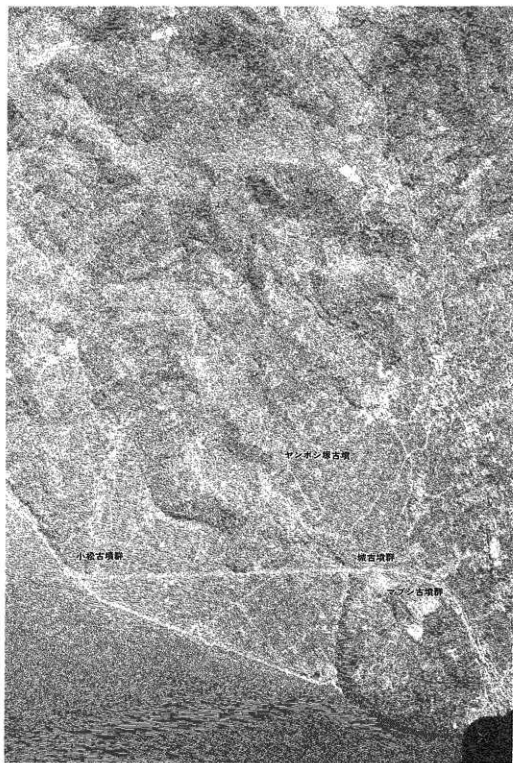


地图-47



31	32	33	34
45	46	47	





網田地区



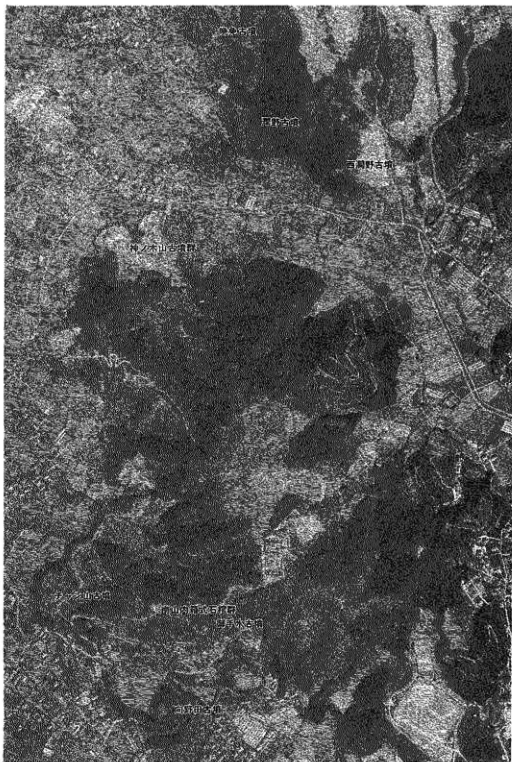
佐吉地区



緑川地区



蕪地区



松山地区



花园地区

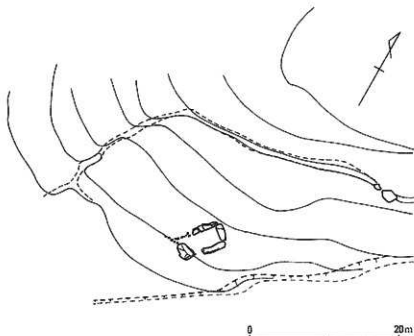
III 古墳解説

1. 梅崎古墳^{うめざき}

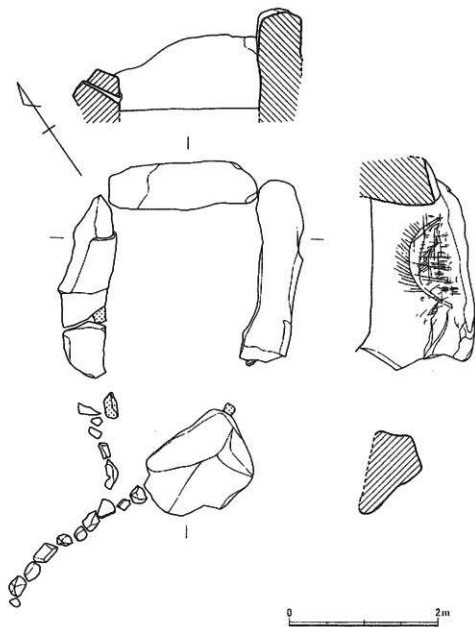
所在地 宇土市笹原町字梅崎

立地 宇土半島からの丘陵が北側の有明海に向けて延びており、その先端部に独立ぎみに小高い丘があり、その頂部からやや南東に下りた付近に古墳は位置する。標高は約50mくらいであり、眼下の水田(干拓地)との比高差は約45mを測る。この古墳の北東約200mには梅崎箱式石棺群がある。また、北西には緑川が有明海に注ぐ河口がひろがっており、この河口付近の地名である網津(あみつ)をおおつの転訛と考え、律令期の肥後の港津に比定する木下良氏の所見は重要であり、この梅崎古墳に描かれた船の装飾文様と考え併せると、その意義が一層明確になってくる。

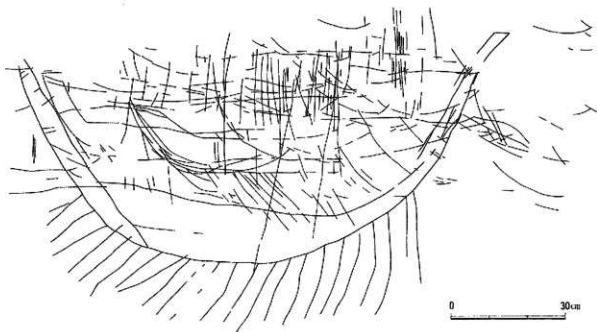
墳丘 丘陵頂部の南東付近に古墳は位置するが、本来あったはずの墳丘は長年月の時の経過と共に殆ど流失してしまっている。しかし、残存する石室の規模からみても古墳の直径は20



第4図 梅崎古墳地形測量図(1:500)



第5图 梅崎古墳石室実測図 (1:50)



第6図 梅崎古墳東側壁装飾文実測図(1:10)

m近くあったものと思われる。

内部主体 南西方向に開口する横穴式石室であり、玄室上部に積まれていた周壁と天井石はなくなり、奥壁と両側壁の腰石を残すのみである。三行に囲まれた部分の広さは長さ2.3m・幅1.9mで、船の装飾がある右側壁の長さは2.3m・高さ1m・厚さ0.6mある。茨道部にあたる部分には残りが悪く、側壁か天井の一部であったと思われる石が一個と人頭大の石の列石が3mほど見られただけである。玄門部にあたる部分の石は残っていなかったが、後世に抜き取られたものと思われる。あるいは、この古墳から西側約200m付近に放置されていた削り抜き式玄門の阿蘇凝灰岩製切石がそれにあたるものかもしれない。

装飾文様 奥壁に向かって右側の側壁の内面に船の線刻がある。船は、長さ2.3m・高さ1mのゴンドラ型をなす大きな船を主体とし、その上方にも2・3艘の船が見える。最も大きな船は、船首から船尾までは1.29m、高さ54cm、鰭が23本位描かれ、正確にはどの船に属するか不明であるが帆も表現されている。船の数から、モデルとなった船は相当大きな規模であったことがわかる。

出土遺物 破壊によってかなりの部分が荒らされていたため、副葬遺物は殆ど残っていなかったが、耳環・須恵器片が検出されている。

時期 6世紀～7世紀。

備 考 昭和42年4月～5月に発掘調査を実施し、調査後石室は埋め戻した。

文 献 ①富樫卯三郎・清見末喜「梅崎古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』20、1968年。

②木下 良「西海道——肥後国」『古代日本の交通路』IV、大明堂、1979年。

(富樫卯三郎・高木)

2. 梅崎箱式石棺群

所在地 宇土市笹原町字梅崎

立 地 宇土半島のほぼ中央付近で北側の有明海に向けて延びた丘陵先端付近に位置し、梅崎古墳からは約200mを測る。丘陵先端から15mほど下がったところにあり、標高は約35m、東側眼下の水田（干拓地）との比高差は約32mを測る。

墳 丘 不明。

内部主体 安山岩の板石を組み合わせた箱式石棺であるが、現存するのは1基のみ。付近のミカン園の石垣に、赤色顔料がついた大量の安山岩板石が積まれており、かなりの数の箱式石棺があったことがわかる。

出土遺物 なし。

時 期 不明。

文 献 富樫卯三郎・清見末喜「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』第20号、1969年。

(富樫・高木)

3. 小松古墳

所在地 宇土市長浜町字小松

立 地 宇土半島から延びた小松丘陵上に位置し、眼下の比高25m位に有明海が広がっている。丘陵先端部は国鉄三角線と国道57号線によってカットされ、周辺はミカン園として開墾されている。古墳の位置から、海を意識したことが明白である。

墳 丘 丘陵先端に近い尾根上に築かれた石室であるが、墳丘については不明。この古墳の周辺には後述の小松2号墳をはじめ、竜王神の土台に使われている板石が箱式石棺の石材であり、その下には直刀が埋められているといい、削平された丘陵先端にも2基の石棺があったし、これらの他にも石棺や石室が存する可能性が高い。

内部主体 昭和38年1月4日・7日に行われた発掘調査によって割石小口積みの石室が検出された。石室は長さ238cm、幅189～204cm、床面からの高さ80～90cmが残存し、石室天井石が内部に入り込み、石室の大半は破壊されていた。小口積みは場所によっては基底から行われている

が、原則的には最下段にやや大きめの石をおき、腰石としている。床面には礫が敷かれ、木炭が薄くあった。石室基底部の遺存は極めて良好ながら、入り口や石室上部の構造については不明。羨道部が確認出来なかったことからみれば竪穴式石室である事も考えられるが、石室プランからみれば横穴式石室である可能性が高い。城2号墳と同じく羨道部床面と玄室床面に段差があると考えれば理解できるが、このことは、初期横穴式石室の構造・類例を考える場合に重要な点でもあり、今後の類例の増加を待って改めて考える必要があろう。

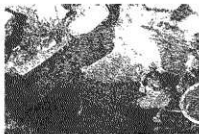
出土遺物 破壊されていた為に床面も大きく荒らされ、副葬遺物の多くは残っていなかった。僅かに、刀子と思われる鉄片と薄い鉄片があっただけである。

時期 5世紀。

備考 調査は昭和38年1月に熊本大学松本雅明教授の指導のもと、富樫が宇土高校社会部員・同OB・熊本大学生と共に行なった。小松古墳のすぐ周辺には、2号墳をはじめ幾つかの石棺が在り、小松古墳群とでもよぶべきありかたをしている。

文献 富樫卯三郎「考古ノート—宇土市長浜町井崎～同町小松—」『宇土市史研究』第5号、1984年。

(富樫・高木)



図版1 小松古墳石室1



図版2 小松古墳石室2



図版3 小松古墳石室3

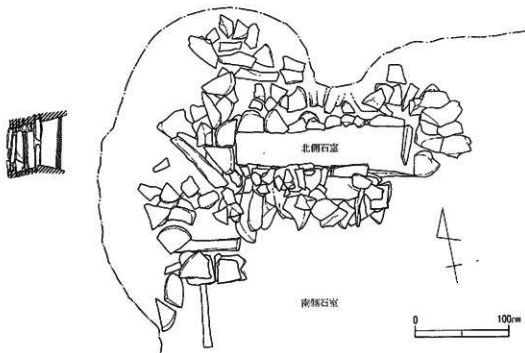
4. 小松^{こまつ}2号墳

所在地 宇土市長浜町字小松

立地 宇土半島から延びた小松丘陵上に位置し、眼下の比高25m位に有明海が広がる。丘陵先端部は国鉄三角線と国道57号線によってカットされ、古墳のすぐ近くはガケ面となっている。近くはミカン園として開墾されているが、小松古墳や箱式石棺が散在する。古墳の位置から、眼下の海を意識した立地であることがわかる。

墳丘 丘陵先端に近い尾根上に築かれたものであり、墳丘の存在は不明である。2号墳は2基の埋葬主体を持っており、周辺には前述の小松古墳をはじめ、幾つかの箱式石棺が存在する。

内部主体 昭和56年1月に行われた発掘調査によって割石小口横みの石棺系石室が2基並列して検出された。二つの石室の長側石の裏込め石の一方は共有しあっており、一体的になっている。北側の石室は内法長さ178cm・幅54~57cm・深さ約50cmあり、長側石・小口石とも最下部を立てて腰石とし、その上に7~8段を割石小口横みにする。内壁には赤色顔料を塗り、床面に



第7図 小松2号墳石室実測図(1:40)



図版4 小松2号墳石室

は跡が敷かれる。石室全体の遺存は極めて良好であった。南側石室は殆ど残っておらず、僅かに西側小口石が立っており、この石室が北側石室と似た造りであったことが分かるだけである。

出土遺物 なし。

時期 4世紀～5世紀。

備考 調査は昭和56年1月15日から同年4月11日まで断続的に実施。

文献 高橋卯三郎「考古ノート——宇土市長浜町井崎～同町小松——」『宇土市史研究』第5号、1984年。

(富樫・高木)

5. ^{ながはま}長浜箱式石棺群

所在地 宇土市長浜町字井崎

立地 宇土半島の山塊から島原湾に突出した丘陵の先端部斜面にあり、標高約40mを測る。

墳丘 不明。

内部主体 主軸方向東西の箱式石棺2基が、約90cmの間隔で並行する。2基のうち南側が1号、北側が2号である。

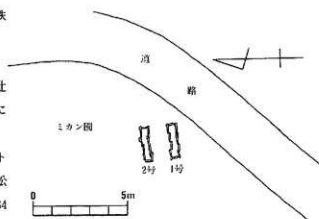
1号箱式石棺は、長さ172cm・幅40cm・深さ約20cmを測る。2号箱式石棺は、長さ170cm・幅25～34cm・深さ約23cmを測る。1・2号とも、両側壁は4石、小口は1石から成り、東側が僅かに幅広い。蓋石には、1号が4枚、2号が2枚使用している。また、棺内と蓋の裏には、赤色顔料が塗布されている。

出土遺物 1・2号から須恵器片、鉄
條の茎状の鉄片。

時 期 5世紀?

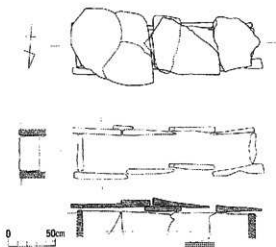
備 考 昭和50年8月22・23日、辻
誠也・西原昭明・浜口俊夫・富樫に
よって発掘調査を実施。

文 献 富樫卯三郎「考古ノート
—宇土市長浜町井崎～岡町小松—」
『宇土市史研究』第5号、1984
年。

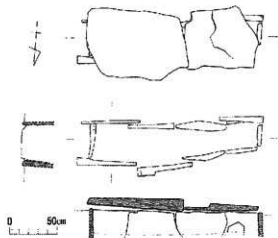


第8図 長浜箱式石棺群地形測量図 (1:200)

(富樫・木下)



第9図 長浜箱式石棺群1号石棺実測図 (1:40)



第10図 長浜箱式石棺群2号石棺実測図 (1:40)

6. 小池平^{おけびら}1号墳

所在地 宇土市長浜町字小池平

立 地 宇土半島の主峰、大岳(標高478m)から延びた丘陵が有明海に迫る尾根上に位置し、標高は約45m。北側の眼下には有明海を望むことができ、北北西約11mの至近距離に小池平2号墳が位置する。

墳 丘 丘陵尾根上に築かれた封土はかなり流失するが、石室を中心として僅かに封土が確認でき、東西20.7m・南北15.2m・高さ3.2mある。北北西約11mに位置する2号墳とは鞍部を

隔てるだけである。

内部主体 南西方向に開口する横穴式石室であり、主軸はN-60°-W。石室は側壁上部から天井部が残っておらず、腰石は残存する。羨道部付近の遺存も同様であり、玄門にあたる部分には厚さ約14cmの阿蘇凝灰岩の切石が倒れこんでおり、それが閉塞石にあたると思われる。玄室は長さ284



図版5 小池平1号墳石室

cm・幅194cm・高さ148cm（腰石の現存高）の長方形プランであり、両袖式の横穴式石室である。残存する羨道部は長さ281cm・幅147cmを測る。

出土遺物 なし。

時期 6世紀～7世紀。

（富樫・高木）

7. おいびら 小池平2号墳

所在地 宇土市長浜町字小池平

立地 大岳から派生する丘陵のひとつが小池集落の西を有明海に向けて延びており、その先端に近い尾根上の標高約43m付近に位置し、1号墳とは11m離れるのみである。

墳丘 低いマウンドが確認でき、東西14.4m・南北13.5m・高さ1.5mをはかる。南々東の1号墳との間は堀切状を呈し、明確に隔絶されている。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

（高木）

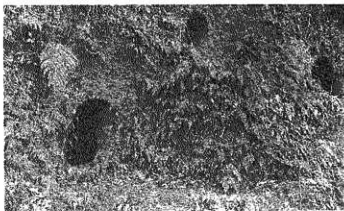
8. こべた 小部田横穴墓群

所在地 宇土市住吉町字堤上

立地 宇土半島の山塊から派生した丘陵の、北側崖面に位置する。丘陵は島原湾に面し、周辺部には凝灰岩の露頭が多い。横穴墓は東西23mの間に11墓が存在するが、防空壕として利用されているため玄室の壁が貫通しているものや、半壊しているものが多い。また、背後の丘

陵には御殿山古墳や小部田箱式石棺等が分布する。

内部主体 1号横穴墓は、最も東に位置するもので、内部はほぼ完形。玄室はアーチ形で幅140cm・高さ75cm、を測る。羨門の外にはアーチ形をした飾り縁がつく。平面プランは方形を成し、屍床は「コ」字形に配置されている。



図版6 小部田横穴墓群

その他の横穴墓も1号と規模は異なるが同一タイプと思われる。

出土遺物 須恵器提瓶

時期 6世紀～7世紀。

備考 昭和41年1月、宇土高校社会部・富樫らによる発掘調査が行われている。

文献 富樫卯三郎「小部田横穴古墳群」『宇土市の文化財』第1集、宇土市教育委員会、1972年。

(富樫・木下)

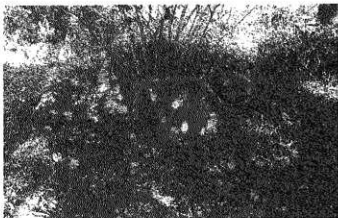
9. 御殿山古墳

所在地 宇土市住吉町字堤上

立地 宇土半島の山塊から派生した丘陵の鞍部に位置する。丘陵端（標高47.7m）が円墳らしい地形をなし、丘陵からは島原湾が一望できる。また、西側40mのところの小部田箱式石棺、北側崖面に小部田横穴墓群が分布する。

墳丘 円墳？

内部主体 主軸方向N-65°-Eで南西方向に開口する横穴式石室である。玄室の長さ260cm・幅174cmを測り、玄門には凝灰岩の切石を窓



図版7 御殿山古墳石室

棒状に加工したものを使用している。

時期 6世紀～7世紀。

(木下)

10. 小部田箱式石棺

所在地 宇土市住吉町字堤上

立地 宇土半島のほぼ中央付近北側の有明海沿岸に面し、半島から延びた丘陵上に位置する。崖面に近い傾斜変化点付近に築かれ、付近には100m離れて東側に御殿山古墳が、北側の崖下には小部田横穴墓群がある。石棺の標高は約40mであり、北側平野部からの比高差は約33mを測る。

墳丘 不明。

内部主体 阿蘇溶結凝灰岩の板石（厚さ6～9cm）を組み合わせた箱式石棺であり、内法長さ144cm・幅31～43cm、蓋石は現存しない。

出土遺物 なし。

時期 不明。

文献 高木恭二「肥後南部の石棺資料(1)」『宇土市史研究』第2号、1981年。

(高木)

11. 古墳参考地 (字堤上)

所在地 宇土市住吉町字堤上

立地 宇土半島の山塊から島原湾に突出した丘陵の先端（標高47.7m）に位置する。また、西側に御殿山古墳、西側崖面に小部田横穴墓群が分布する。

墳丘 笹竹が繁茂しているがその地形は僅かに盛り上がり、径10m程の円墳状をなす。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

(木下)

12. 古墳参考地 (字局畑)

所在地 宇土市網津町字局畑

立地 宇土半島から延びた丘陵先端部にあり、小さな高まりをなす。直径約17m・高さ約1m。標高は約55mを測る。

墳丘 詳細な調査は実施しておらず明確ではないが、古墳の可能性がある。

内部主体 不明。

時期 不明。

(高木)

13. 城塚古墳

所在地 宇土市城塚町字馬通

立地 宇土半島から延びた丘陵の側縁部に古墳は位置し、標高は約60mを測る。眼下の沖積平野との比高差は約57m。

墳丘 丘陵側縁部の斜面を利用して墳丘は築かれており、封土はあまり残っていない。残存する石室の規模からみて、直径15m以上はあったものと思われる。



図版8 城塚古墳石室

内部主体 東南方向に開口する

横穴式石室であり、玄室上部の周壁と天井石は崩れ、石室内にかなり落ち込んでいる。奥壁と両側壁の腰石は残っているが羨道部にあたる部分の石は元位置を外れる。石室に用いられているのは大半が安山岩であるが、左側壁は阿蘇凝灰岩製の切石を用いる。装飾古墳？

出土遺物 なし。

時期 不明。

(高木)

14. 尾ノ上横穴墓群

所在地 宇土市城塚町字尾ノ上

立地 宇土半島の山塊から派生した丘陵の、北側崖面に位置する。周辺部には凝灰岩の露頭が多く、やや軟質である。横穴墓と認められるもの4基、その他防空壕として利用されているため半壊しているものや不明なものも含め約20基が存在する。

内部主体 1号横穴墓は、4基中最も東に位置するもので、ほぼ完全な形で残っている。閉塞には凝灰岩の切石を立て、その根元には1個の安山岩を置き固定している。玄室は、平面プランは方形を成し、屍床の仕切りはない。

2号横穴墓に使用された閉塞石は高さ118cm・幅74cm・厚さ12cmを測る凝灰岩製である。また、すぐ西側に3号横穴墓が位置するが閉塞石の存在は確認されていない。

この横穴墓群は基本的には1号タイプのもので構成されていたものと思われる。

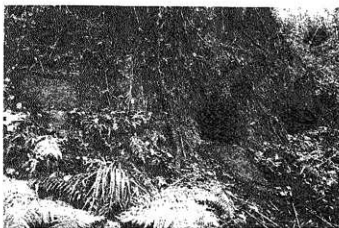
出土遺物 なし

時期 6世紀～7世紀

備考 昭和48年2月、宇

土高校社会部・富樫卯三郎による発掘調査が行われている。

文献 富樫卯三郎「城塚尾上横穴古墳群」『宇土市の文化財』第3集、宇土市教育委員会、1977年



図版9 尾ノ上横穴墓群

(富樫・木下)

15. ^{かみ}^き神ノ木山古墳群

所在地 宇土市野鶴町字神ノ木・榎堂

立地 宇土半島から延びた一丘陵の頂部付近にあり、標高は約70mを測る。みかん園閉塞によって昭和42年頃に発見されたものであるが、その折には既に古墳(1号墳)は壊されており残骸が残るのみであった。

2号墳は1号墳の南西約30mのところにあるが、古墳としてはやや決め手を欠く。

墳丘 詳細な調査が実施されないままに破壊されたため、墳丘規模や主体部の構造は不明であるが、昭和42年8月に実施した発掘調査によってこの1号墳の周溝と思われる溝を検出し、中から大量の須恵器やその他の遺物が検出



図版10 神ノ木山古墳群出土須恵器

されている。2号墳は古墳であるかどうか明確でないが、その可能性はある。

内部主体 横穴式石室（1号墳）？

出土遺物 1号墳の周溝ないしは前庭と思われる部分から大量の須恵器と耳環・切子玉・小玉・丸玉・鉄鏝などが検出された。

時期 6世紀中頃

備考 神の木山一帯では、この1・2号墳のほかにも数箇所須恵器が数多く出土するところがあり、破壊された古墳が外にもある可能性が高い。

文献 富樫卯三郎「神の木山遺跡」『宇土市の文化財』第3集、1977年。

（富樫・高木）

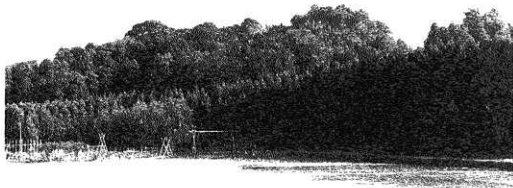
16. 天神山古墳

てんじんやま

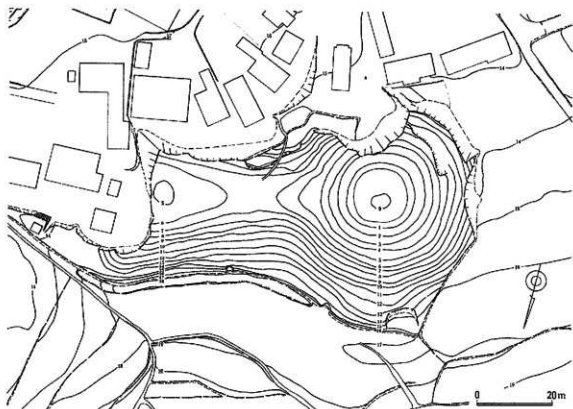
所在地 宇土市野鶴町字桜畑

立地 宇土半島から派生する神の木山丘陵が更に北東に延びて緩やかなスロープをなし、丘陵先端の頂部に古墳は位置する。丘陵の流れに沿って古墳は築かれており、標高約39mを測り、眼下の沖積平野との比高は約35m。

墳丘 墳丘や主体部の調査が実施されていないことや、墳丘の一部が削平されているためにその詳細は不明であるが、昭和41年8月に実施された地形測量によって規模を知ることが出来る。墳形は前方後円墳であり、その全長は約110m・後円部径約66m・後円部の高さ約14m・前方部先端幅約42m・前方部高さ約9mを測る。後円部頂部と前方部頂部の比高差は5mである。後円部墳頂平坦面は直径約15mの広さを持ち、その中央付近には小さくぼみがみられる。



図版11 天神山古墳遠景



第11図 天神山古墳墳丘測量図 (1:1000)

墳丘上には人頭大の石を用いた葺石が幾つかみられ、墳丘は3段築成であることが観察できる。墳輪は未検出であり、周溝の存在も不明。熊本県下で最大の墳丘規模を誇る。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 5世紀前半?

文献 富樫卯三郎「天神山古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年。

(富樫・高木)

17. 古墳参考地 (字経塚)

きょうづか

所在地 宇土市恵塚町字経塚

立地 宇土半島から延びた丘陵上にある古墳(?)であり、標高は約45mを測る。

墳丘 詳細な調査は実施しておらず明証ではないが、巨石があり古墳である可能性もある。

内部主体 不明。

時 期 ?

(高木)

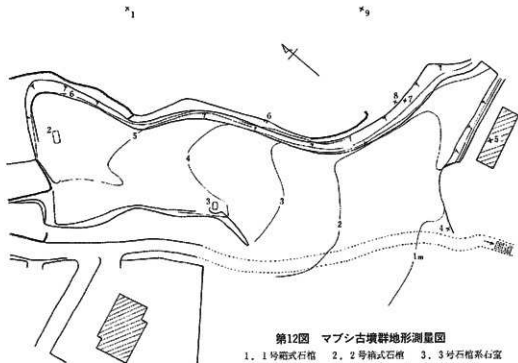
18. マブシ古墳群

所在地 宇土市下網山町字墳屋

立 地 宇土半島の山塊から島原湾に突出した通称“シマヤマ”丘陵の南側斜面に位置する。古墳群は箱式石棺・石棺系石室等から成り、標高約10m~20mに分布する。また、丘陵は城古墳群に連なる。

墳 丘 不明。

内部主体 1号(箱式石棺)は、主軸方向N-10°-Eで西側の側石が法面に露出している。棺は内法で長さ188cm・幅68cm・深さ33cmを測る。蓋と側石は2枚、小口に1枚の砂岩を使用し、その大きさは西側石で長さ132cm・厚さ11cmと長さ90cm・厚さ8cmを測り、小口との接合部分は浅



第12図 マブシ古墳群地形測量図

1. 1号箱式石棺
 2. 2号梯式石棺
 3. 3号石棺系石室
 4. 4号箱式石棺
 5. 5号道跡
 6. 6号箱式石棺
 7. 7号道跡
 8. 8号道跡
 9. 9号道跡
- 国道57号線路面を0mとする。×印および……道跡は見取り

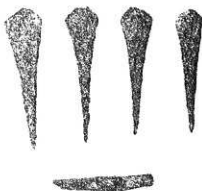
く溝を掘っている。蓋は長さ115cmと84cm、厚さは共に10cmで、蓋の幅は棺身の幅とほぼ同じで約90cmを測り、棺身との接合部分は平坦に調整を加えている。床面には、粘土に泥じて赤色顔料を塗った礫が敷かれ、北側部分に頭骨の一部を確認した。

2号（箱式石棺）は、主軸方向N-40°-E、棺の内法は床面で長さ193cm・幅78cm・深さ約84cmを測る。両側石と蓋には2枚、小口には1枚の砂岩を使用し、四壁は内斜して、側石には小口を合わせるための浅い溝を掘る。また棺の中央の側石継ぎ目には幅を保つための板石を置く。床面には、内面同様に赤色顔料を塗った礫を敷き、北側に歯の一部を確認した。墓壇は長方形で、その大きさは、2.7m×1.5mを測る。

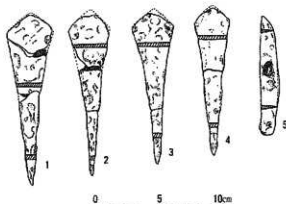
3号（石棺系石室）は、主軸方向N-62°-E、内法床面で長さ126cm・幅48cm・深さ46cmを測る。側



図版12 マフシ古墳群1号

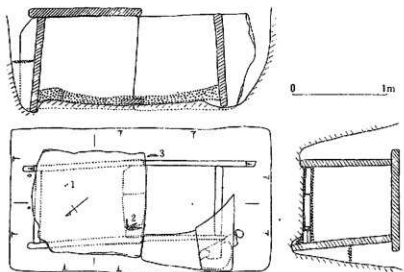


図版13 マフシ古墳群2号出土遺物



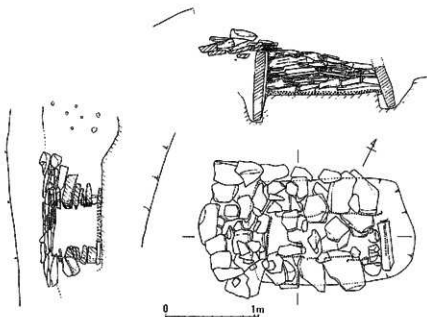
第13図 2号出土遺物実測図(1:3)

1~4. 鉄鏃 5. 刀子



第14図 マフシ古墳群2号実測図 (1:40)

1. 陶片 2. 石板 3. 刀子



第15図 3号実測図 (1:40)

壁は割り石を数段積み、小口には板石を立て、さらに上部に2～3段にわたって割り石を50～70cmの幅で積む。棺内床面には罫を敷く。赤色顔料を塗り、東側床面は特に赤い。蓋石は破壊されており不明。

4号(箱式石棺?)は、「トノサンの墓」と呼ばれ昔から祀られていたが、工事により消滅した。聞き取りにより主軸方向東西の箱式石棺であったらしい。

6号は、箱式石棺らしい。

5・7・8・9号は、赤色顔料を塗った跡が確認されているが、すでに消滅したものもあり詳細は不明。

出土遺物 2号箱式石棺内から鉄鍔4、棺外(墓壇)から刀子1が出土。

時期 5世紀代。

備考 昭和47年1月8日～15日、富樫卯三郎・宇土高校社会部・宇土市教育委員会による発掘調査が行われている。2号は鶴城中学校、3号は網田中学校に移転して保存。

文献 富樫卯三郎、卯野木盈二「宇土市下網田マブシ出土の石棺」『宇土半島 自然と文化』宇土半島研究会、1975年。

(富樫・木下)

19. 城^{じょう}古墳群

所在地 宇土市上綱田町字城

立地 宇土半島から延びた田平丘陵上にある古墳群であり、標高は約20mを測る。丘陵全体が中世における網田城(田平城)に利用されたり、近年のみかん園開発によって地形の変化は著しい。1・2号墳を除けば偶然の機会に見えられたものばかりである。

墳丘 1号墳(20)・2号墳(21)、それに古墳参考地(字田平)(22)の3基を除く総てが墳丘を持たず、しかも何れも詳細な調査は未実施であるため断定はできないが、石棺系石室・箱式石棺ばかりである。

内部主体 昭和36年の調査によって確認された長方形プランで内部に仕切りを施した石室を始めとして、更にはその南の箱式石棺、城1号墳北側20mの石棺系石室、1号墳墳丘にある石棺など、1号墳周辺のものだけでも7基の埋葬施設がある。また、2号墳の周りには南南東の崖面に箱式石棺が露出しているし、西南西にも箱式石棺があるという。

時期 5世紀代?

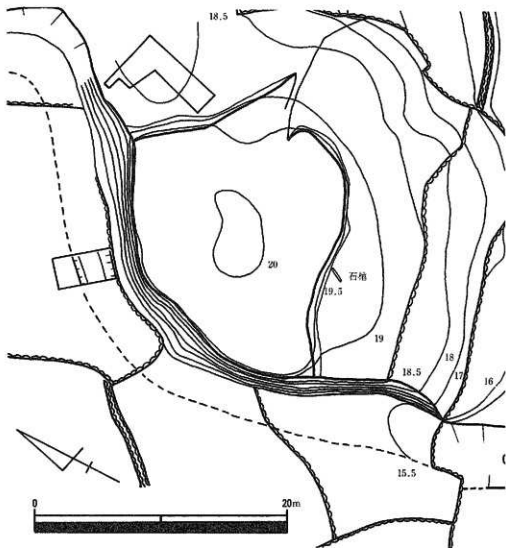
(高木)

20. 城^{じょう}1号墳

所在地 宇上市上綱田町字城

立地 宇土半島から延びた丘陵上に位置し、標高は約20mを測る。眼下の水田との比高差は約10mで、城2号墳との距離は約200mある。丘陵全体が中世における綱田城(田平城)に利用されたり、みかん園とされた為に、周辺部を含めて地形の変化が著しい。

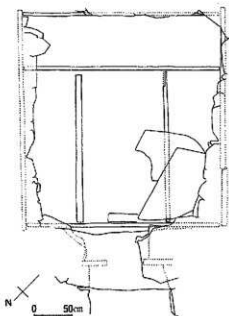
墳丘 丘陵尾根の傾斜変化点付近に築かれており、現状での墳丘計測値は、東西約20m・



第16図 城1号墳丘陵測量図(1:300)

南北約25mの楕円形を呈する。高さは東側で約5m、西側で約0.5mであるが、本来は直径20m前後の円墳であったものと考えられる。古墳や中世城跡を含めた発掘調査においては、城郭に伴う逆台形状の箱堀が検出されたのみであり、古墳に伴う周溝や葺石は検出できなかった。

内部主体 昭和35年3月に行われた緊急発掘に於いて北西方向に開口する横穴式石室である事が明らかになった。玄室内部の周壁に石障を巡らしたいわゆる石障系横穴式石室（肥後型横穴式石室）と呼ばれるものであり、石室の上部は大きく破壊されていたが、玄門部の遺存は良好である。羨道部は未調査であるため不明であるが恐らく城2号墳やヤンボシ塚古墳と似たラッパ状に広がる形状で割石小口積み製の壁体をなすものと思われる。玄室から観察出来る玄門部は



第17図 城1号墳石室平面図 (1:50)

極めて狭く、玄門部床面と玄室床面には段差があり、閉塞石は残っていないようである。玄門から玄室へ入る部分には前障が立っているが、この前障にはU字形のくりこみが施されており、玄室に入るのを容易にしようとしている。袖にあたる部分は割石小口積みのままで、これに掛けわたして前壁が載り、玄門部の天井となす。

玄室は、周壁に砂岩を用いた石障を4枚巡らしたものであり、石室内法は、幅約250cm・長さ270cmの方形に近いプランであり、石障の高さは95cm・厚さ5～8cm。石障背後の石室の壁体は石室床面と同じレベルから積み上げ、その石積みは割石を小口積みにしたものであり、前壁と同じ高さ付近で内傾してドーム状の天井部をつくる。

石室内床面には奥壁に沿う屍床と、中央の通路を挟んで両側にそれぞれ屍床をつくるいわゆるコ字形の屍床をなす。奥床は、長さ2.62m・幅69～68cm、左屍床は長さ2.30m・幅67～70cm、右屍床は長さ2.30m・幅64～70cmであり、中央の通路で長さ2.30m・幅1.9～1.7mを測る。

出土遺物 床面もかなり荒らされていたために副葬遺物は残っておらず、僅かに左屍床から、人骨細片が検出されたのみで、その他に古墳時代に属すると思われる遺物はみあたらなかった。

時期 5世紀後半。

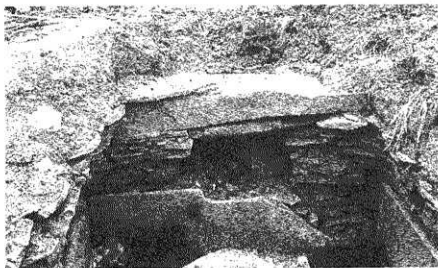
備考 昭和35年3月発掘調査。城1号墳のすぐ周辺には、石棺や、石棺系石室が幾つかみられる。

文献 ①高橋卯三郎「城1号墳の発掘概要——旧垣屋古墳第2号の調査」『土宇市埋蔵文化

財調査報告書」第3集、1981年。

②平山修・木下洋介「田平城跡」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第8集、1983年。

(高樫・高木)



図版14 城1号墳玄門部



図版15 城1号墳玄室内

21. 城 2 号墳 じょう

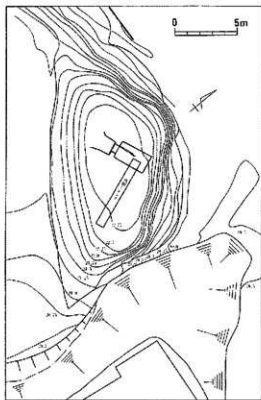
所在地 宇土市上網田町字城

立地 宇土半島から延びた田平丘陵上に位置し、前述の城1号墳は、東側約200mに位置する。標高約22mで、水田面の沖積平野との比高差は約12m。丘陵全体が中世割田域に利用されたり、みかん園となっている為に、周辺部を含めた地形の変化は著しい。

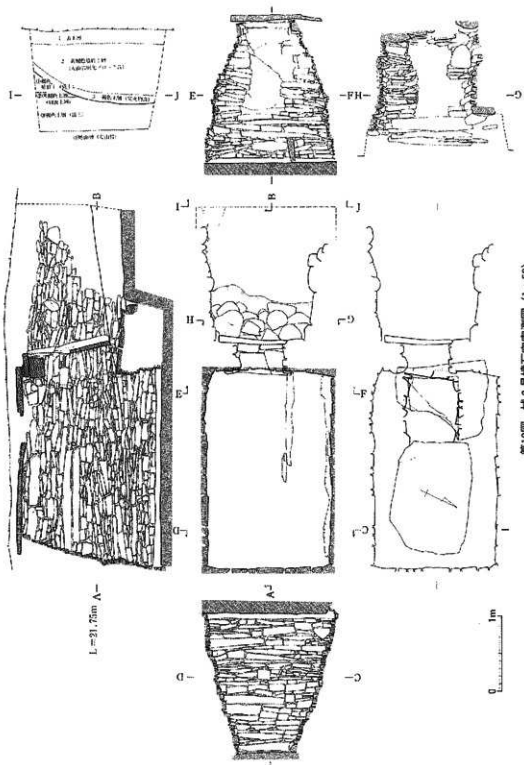
墳丘 丘陵尾根の鞍部に築かれ、城郭に伴う縄張りによって墳丘はカットされており、墳丘計測値は、現況で東西約10.5m・南北約18mの長楕円形を呈する。高さは北東側で約3.2m、南西側で約1.5mであるが、本来は直径20～25m、高さも3m位の円墳であったと考えられる。古墳墳丘主軸に近い南北に幅約50cmのトレンチを入れたところ、石室裏込石の他に2基の中世土墳墓が発見され、内部から人骨が検出された。

内部主体 昭和53年12月から昭和54年12月にかけて断続的に行われた学術調査に於いて、西方に開口する竪穴系横口式石室（初期横穴式石室）である事が明らかとなった。石室天井石の一部と横口部閉塞石の一部は破壊されていたが、その他の遺存は極めて良好である。羨道部はヤンボシ塚古墳とよく似たラップ状に広がる形状で、割石小口積みの壁体と次第に下降する前庭部床面から前壁を持った横口部に至る。横口は極めて狭く、高さ93cm・幅54～44cm・奥行40cmを測るのみであり、横口部床面から玄室床面には約60cmの段差がある。横口に設けられた閉塞石は幅90cm・高さ110cm・厚さ5～8cmの安山岩板石が用いられていたが、盗掘時に破壊を受けている。横口前面側壁の石積みは、右壁で155cm、左壁で125cm、高さは横口部側で110cm、先端部で25cm。横口前面での幅は1.18m、先端部での幅は1.6mのラップ状で、横口部は割石小口積みの上に前壁が載る。

石室は四壁とも安山岩割石を丁寧に小口積みしたものであり、長さ261cm・奥壁幅161cm・前壁幅155cmで、その比は1:1.6の長方形プランとなる。石室天井石は2枚の板石が用いられているが、横口前面には当初から天井石は



第18図 城2号墳墳丘測量図 (1:300)



L=31.75m



第19圖 城2号填石建築測圖 (1:50)



图版16 城2号墳通道部



图版17 城2号墳石室横口部



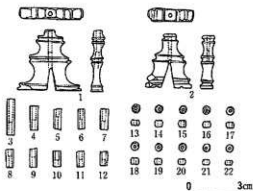
图版18 城2号墳石室奥壁

なかったようである。横口は玄室中央部からやや右壁で床面から60cmの高さにつく。周壁の石積みは30〜35段であり、詳細にみると水平方向に走る目路が観察でき、石室構築作業の順序を明らかにすることができる。四壁の隅角はほぼ直角にとりつくが、所々には両壁にかけ渡したいわゆる力石がほどこされる。床面には仕切りがあり3つの区画に分けられ、奥壁に沿った奥屍床（第1屍床）と左壁沿いの左屍床（第2屍床）の2屍床、右壁沿いで横口直下の通路に分けることができる。床面は地山登形の後、約10cmの厚さに砂礫を敷くが、奥屍床と左屍床の隙

には石灰藁を混ぜえる。屍床仕切りの一部は抜き取られていた為に明確ではないが、奥床は長さ約1.58m・幅50cm、左屍床は長さ2.05m・幅50cm、通路の長さ2.10m・幅1.0mを測る。

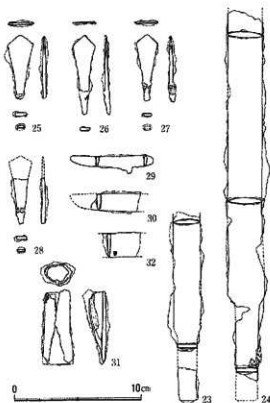
出土遺物 早くから開口していた為に床面もかなり荒らされており、副葬遺物の多くは持ち出されているようである。昭和23年の頃、この古墳から頭蓋骨2個が持ち出され、その他にも「カタナ」が出土したと伝えられている。発掘によって検出された遺物は、奥屍床から滑石製琴柱形石製品2個・滑石製管玉10個・滑石製小玉10個・鉄剣1本・鉄鏃4本、左屍床から鉄剣1本・刀子1本・鉄斧1本・鉄鏃1本があり、他に刀子1本がある。

荒らされていた床面には人骨片もかなり散乱していたが、出土地によって推測される遺体は2体であり、最初、奥屍床に成年女性？1体を葬り、原埋葬位置は不明ながら後で成年男性を追葬している。



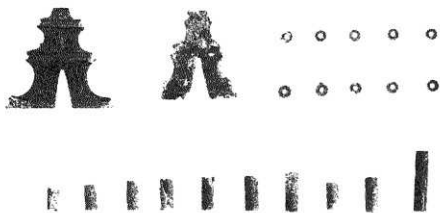
第20図 城2号墳出土石製品実測図(1:2)

- 1,2 琴柱形石製品(滑石製)
3~12 管玉(滑石製)
13~22 小玉(滑石製)



第21図 城2号墳出土鉄製品実測図(1:3)

- 23,24 鉄斧 25~28 鉄鏃 29,30 刀子
31 鉄斧 32 鉄鏃



图版19 城2号出土石制品



图版20 城2号出土铁制品

なお骨の残存状態から、男性人骨のカルバリウム（下顎を除外した頭骨）や四肢骨の多くが持ち出された可能性が強いという人類学的所見が出されている。

時期 5世紀前半。

備考 昭和53年12月～昭和54年12月までの間で断続的に発掘調査を実施。城2号墳のすぐ周辺から城1号墳にかけての丘陵上には箱式石棺や、石棺系石室が幾つかみられる（19. 城古墳群）。

文献 ①三島格・松本健郎・野田拓治・平山修一・高木恭二・木下洋介ほか「城2号墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集、1981年。

②永井昌文「城2号墳人骨について」『宇土市史研究』第3号、1982年。

(三島格・高木)

22. 古墳参考他（字田平^{たびら}）

所在地 宇土市上綱田町字田平

立地 宇土半島の山塊から島原湾に突出した通称“シマヤマ”の丘陵に続く帯状丘陵に位置する。この丘陵には城古墳群などもあり、この古墳参考地も同一古墳群を形成していたものであろう。また、この丘陵は中世に城郭（綱田城・田平城）に利用されている。

墳丘 円墳？

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

備考 周辺部には赤色顔料を塗った石材がある。昭和61年度分布調査によって発見。

(木下)

23. 古墳参考地（字際崎^{きわさき}）

所在地 宇土市上綱田町字際崎

立地 宇土半島の山塊から島原湾に突出し、小松古墳群と城古墳群の間の丘陵で、標高約35mを測る。

墳丘 不明。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

備考 みかん園の石垣に赤色顔料を塗った石材が数個確認できる。これは、開墾により破壊された古墳あるいは石棺材の一部と思われる。昭和61年度分布調査によって発見。

(木下)

24. ^{たかまる}高丸古墳群

所在地 宇土市上綱田町字小宗

立地 宇土半島から延びた丘陵斜面にある古墳群であり、丘陵先端部にヤンボシ塚古墳があり、この古墳群では唯一の調査済みの古墳である。標高は約25～15mの範囲にわたっているが、近年のみかん園開発による地形の変化が著しい。

墳丘 ヤンボシ塚古墳の外はあまり詳細は分かっておらず、この古墳の北東側約30mに古墳の壊されたあとがあるのみでその他は墳丘を有するかどうかさえわからない。

内部主体 ヤンボシ塚古墳は肥後型横穴式石室であり、北側の古墳の残骸は大石が積まれており、石室であった可能性が強い。又、このほかに箱式石棺ないしは石棺系石室が1・2基あったようである。

時期 5世紀代？

文献 高木恭二・木下洋介・元松茂樹「ヤンボシ塚古墳・横崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集、1986年。

(高木)

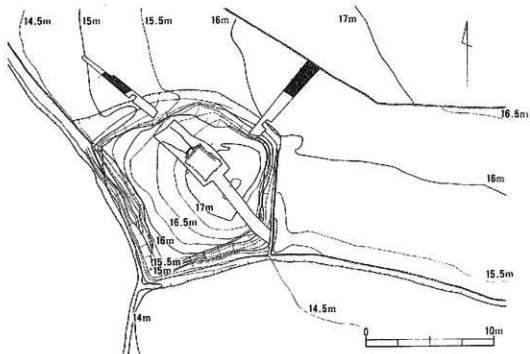
25. ヤンボシ塚^{つか}古墳

所在地 宇土市上綱田町字小宗

立地 宇土半島の主峰、大岳（標高478m）からの丘陵が沖積平野に向かって延びており、その丘陵先端部の傾斜変化点のやや上部付近に古墳は位置する。標高は約15mくらいであり、



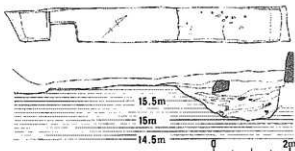
図版21 ヤンボシ塚古墳墳丘



第22図 ヤンボシ塚古墳墳丘測量図 (1:300)

眼下の水田との比高差は約10m。東西約1km・南北約1.2kmの広さを持つ網田平野の周辺部の低丘陵上には幾つかの古墳が位置している。

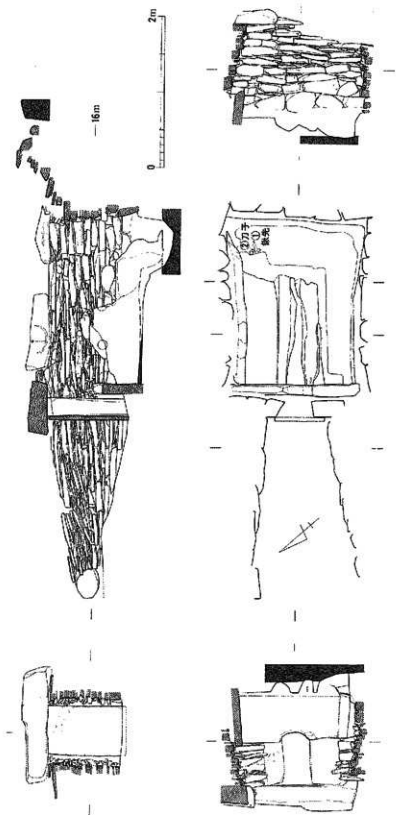
墳丘 丘陵尾根上に築かれた墳丘は、東西・南北とも約14.5mの不整五角形を呈し、高さは北東側で約1m・南西側で約2.5mであり、地形の大幅な改変を受けている。墳丘上の各所に大



第23図 ヤンボシ塚古墳周溝断面図 (1:100)

小の石が見られたが、その多くは石室に用いられていたものと思われ、墳丘に設定したトレンチにおいても明確な形での基石は確認出来なかった。墳丘を横断し、周溝確認の為に設けたトレンチでは石室開口方向と主軸に直交した2箇所において緩いU字形の断面を持つ周溝を確認した。この周溝によって本来の古墳の規模を推定すれば、直径20mを測り、周溝を含めた径は25m。石室復元後の推定墳頂部と周溝底との比高差は2.25mである。

内部主体 北西方向に開口する横穴式石室であり、玄室内部の周壁に石階を巡らしたいわゆる

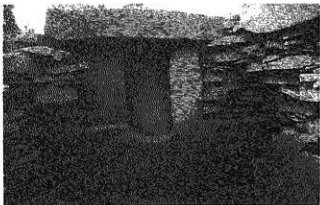


第24図 ヤンボンポン古墳石室平面図 (1:50)

石障系横穴式石室（肥後型横穴式石室）と呼ばれる。石室内部は側壁上部から天井部にかけて大きく破壊され石室床面も荒らされていたが、羨道部から玄門部にかけての遺存は極めて良好であった。特に、羨道部の閉塞に用いられた封鎖石・閉塞石は最終埋葬時と思われる状態を残していた。

羨道部は玄門部からラッパ状に広がる平面形をなし、羨道先端部から玄門部にかけて次第に下降し、閉塞石を外して玄室に入るといふ形をなす。側壁の石積みは、安山岩の板状石を小口積みにしており、内壁に赤色顔料を塗る。羨道先端部から玄門部袖石までの長さは左壁で2.4m、右壁で2.1mを測る。封鎖には人頭大の安山岩栗石を充填しており、この封鎖石を除けば幅64cm・高さ104cm・厚さ5.5cmの砂岩製の板状石を閉塞石としている。閉塞石を除けば幅34cm・高さ106cmの空間があり、玄室への入口となる。玄門は共に一石を立てて袖石としている。

玄室は周壁に沿って石障を巡らしたものであるが、前障と左障の半分を除いた大半が後世に抜き取られて床面は荒らされ、かなり破壊を受けていたが本来



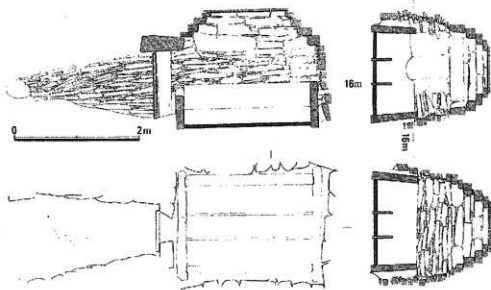
図版22 ヤンボシ塚古墳玄門部



図版23 ヤンボシ塚古墳羨道部



図版24 ヤンボシ塚古墳石室左側壁



第25図 ヤンボシ塚古墳石室復原図(1:60)

は石室床面に主軸と平行する3区画が造られていた。石室内法は、幅130cm・長さ200cmの長方形プランであり、見掛け上の石障の高さは65cm、石障の厚さ12~15cm。石障背後の石室の壁体は石室床面とほぼ同レベルから積み上げているが、石障によって隠れる部分の石積みは自然石に近い大きめの安山岩栗石であり、石障より上部の壁体は整然とした割石小口積みであり、天井に近い部分で内傾してドーム状の天井部をつくる。石室内面にも赤色顔料が塗られている。

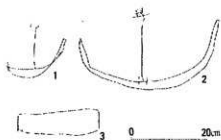
装飾文様 残存する石障のうち、左障の内面に円文が二つ彫りくぼめられており、本来は両側の石障にそれぞれ3個ずつの円文があったものと推定される。円文の直径は、12.7cmであり、円文の中を深さ0.35cmで均等に彫りくぼめている。この円文の他に、玄門の石室側内壁と石室壁体のやや上部の2箇所には、線刻による船が描かれる。船はともに帆柱を持ったゴンドラ型であり、玄門部のは長さ17cm・高さ14.2cm、左壁上部のは長さ36.8cm・高さ21.6cmを測る。

出土遺物 盗掘によって床面のかなりの部分が荒らされていたために副葬遺物は殆ど残っていなかったが、僅かに石障の抜き取り穴から、鉄鍬先1個・刀子と鉄鍬の茎片がそれぞれ1個ずつ発見されたのみで、周溝内からは、少量の上飾器(高杯・壺片)も検出された。

時期 5世紀後半。

備考 昭和60年2月~3月発掘調査。ヤンボシ塚古墳の周辺には、破壊された小古墳や石棺が幾つかみられる。

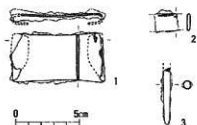
文献 高木恭二・木下洋介・元松茂樹・他「ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集、1986年。(高木・木下)



第26図 ヤンボシ塚古墳線刻実測図 (1:10)

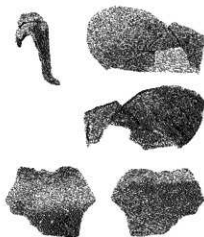


第27図 ヤンボシ塚古墳石室拓影 (1:10)



第28図 ヤンボシ塚古墳出土鉄製品実測図 (1:3)

1 鉄剣 2 刀子 3 鉄鏃



図版26 ヤンボシ塚古墳出土土器



図版25 ヤンボシ塚古墳出土鉄製品

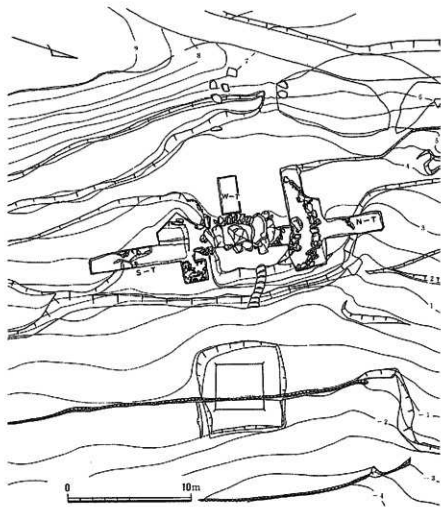
26. 仮又古墳

所在地 宇土市惠塚町字仮又

立地 宇土半島の主峰大岳から東に派生する丘陵斜面の中腹、標高約45mを測る地点に位置する。また、本墳の眼下には東に流れる飯塚川によって開折された谷が入り込む。この谷を挟んで対峙する丘陵には本墳同様、内部主体が横穴式石室の東畑古墳・東畑2号墳、金嶺山古墳、それに椿原石蓋土墳墓が所在する。

墳丘 東西12m、南北14mの不整円形をなす。封土の大部分は流出し、石室の石材が露呈している。墳丘の東側及び北側に3段の列石を巡らしている。

内部主体 南東に開口する単室無袖の横穴式石室で、右側壁で全長5.96m、玄室中央の幅1.77

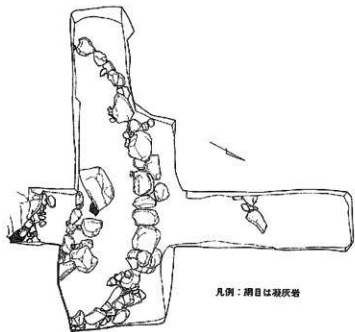


第29図 仮又古墳墳丘測量図 (1:300)

m、高さ1.66m（現況）を測り、主軸方向はN-29°-Wである。玄室内の腰石は東西両壁に3石、奥壁に1石の安山岩を用い、直接地山に据え付けている。しかし、その上の側石は、玄室内に落ち込んでいる。また、天井石も安山岩を3石用いているが、いずれも旧状を保っていない。床面は古くから開口していたこともあり、ひどく擾乱されており、仕切石などの存在は不明である。

羨道は石室が無袖のため、玄室とほぼ同じ幅で1.74mを測る。前庭部には上端幅約3.5m、下端幅2.6mの墓道と思われる掘り込みが確認されている。

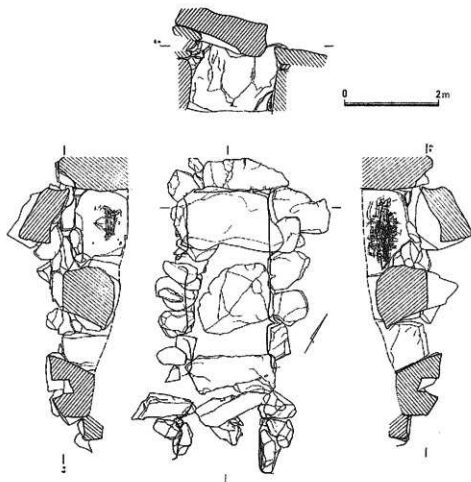
裝飾文様 玄室の両壁で最も奥壁によった腰石に線刻で描かれている。東側の裝飾文様は幅



第30图 饭又古墳列石状况图 (1:100)



图版27 饭又古墳墳丘



第31図 飯又古墳石室実測図 (1:80)

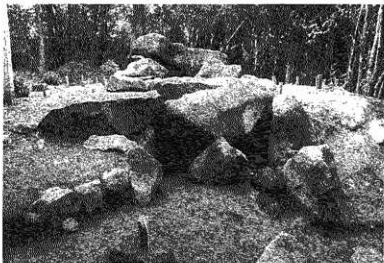
1.62m、高さ0.76mにわたり約10隻の船と木の葉状の文様を描いている。舟はゴンドラ形のもの、帆をかけたものなどがみられる。また、西側の裝飾も船であるが、東側のものに比べ写実的で長さ75cm、高さ55cmの帆かけ船1隻である。

出土遺物 玄室内から、円頭広根斧箭式鉄鏃1、刀子片2、鉄滓数点。羨道及び墓道からは、須恵器や土師器、鉄滓数点。

時期 7世紀前半。

備考 大正年間に京都帝国大学、昭和56年8月から12月まで宇土市教育委員会による発掘調査が行われている。

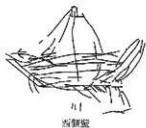
文献 ① 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後國宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける装



図版28 飯又古墳石室



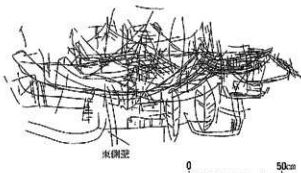
図版29 飯又古墳出土鉄鏃



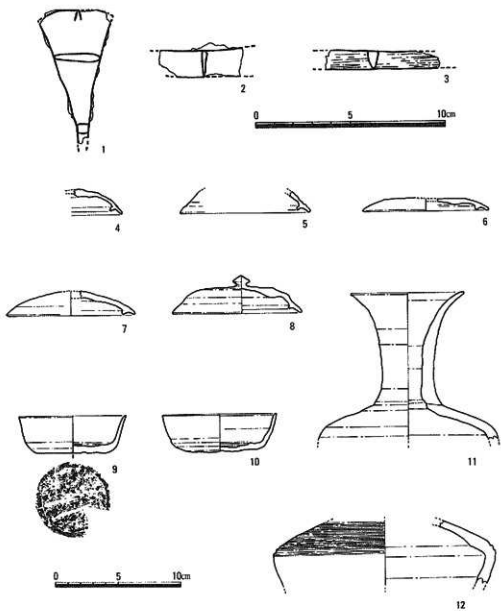
飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊、1919年。

② 平山修「飯又古墳」『宇土市埋藏文化財調査報告書』第6集、1982年。

(平山修・木下)



第32図 飯又古墳側壁裝飾文実測図 (1:20)



第33图 倭又古墳出土遺物実測図 (1~3は1:2 4~12は1:3)

1 鉄劍 2. 3 刀子 4~8 环蓋 9. 10 环身 11. 12 兵鐙

27. 仮又^{かりまた}2号墳

所在地 宇土市恵塚町字仮又

立地 宇土半島の山塊から派生した丘陵の北側斜面のやや微妙に張り出した地点に位置する。標高30mを測り斜面上方の仮又古墳との比高差10m。水田との比高差20mを測る。また、眼下に飯塚川が西から東に流下し、対峙する丘陵には、東畑古墳、東畑2号墳、金嶽山古墳等が位置する。

墳丘 円墳。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。



(木下)

図版30 仮又2号墳墳丘

28. 東畑^{ひがしはた}古墳

所在地 宇土市恵塚町字東畑

立地 宇土半島の主峰、大岳（標高478m）から延びた一丘陵上に位置し、標高は約55m。東畑2号墳は約20m離れて位置し、付近には、金嶽山古墳・古墳参考地（字経塚）・神ノ木山古墳などがあり、南南西には谷を挟んで仮又古墳・仮又2号墳など、周辺には幾つかの古墳が点在する。

墳丘 丘陵上に築かれた封土はかなり流失し、石室天井石はない。分布調査によって今回改めて踏査を行なったところ、最近、封土の一部が削られていることがわかった。この削平によって古墳の周溝の一部が現れ、そこに多くの須恵器が埋もれていた。周溝の検出によってこの古墳の墳丘規模を推測すると、直径約26mを測り、高さは4m以上あったものと思われる。確認された周溝は墳丘の南西側に約10mの範囲で検出されたもので、残っていたのが周溝底に近い部分であった為に幅90cm・深さ30cm程度であった。周溝から出土した須恵器は第35図のとおり。

内部主体 南方向に開口する横穴式石室であり、主軸はほぼ南北に近い。石室は側壁上部から

天井部にかけてはあまり残っておらず、羨道部から玄門部にかけての遺存もよくない。

玄門部は厚さ33cmの阿蘇凝灰岩の切石が用いられており、袖石にかみ合うようにして上石が載せられ、丁寧な造りであるが、石室の大半は安山岩の大石が用いられている。玄室は腰石とその上部に1・2石がのり、内法は長さ290cm・幅180cmの長方形プランで両



図版31 東畑古墳石室

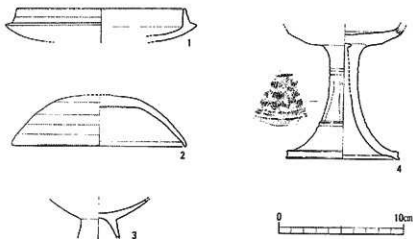
袖式である。羨道部は約2.6mを確認できる。

装飾文様 古墳が壊されたのがいつのころであるか不明であり、石室内や羨道部には多くの土砂が堆積しているが、奥壁に向かって右側の壁面には線刻が施されている。下部の大半が埋もれているため文様が何を表しているかは不明。

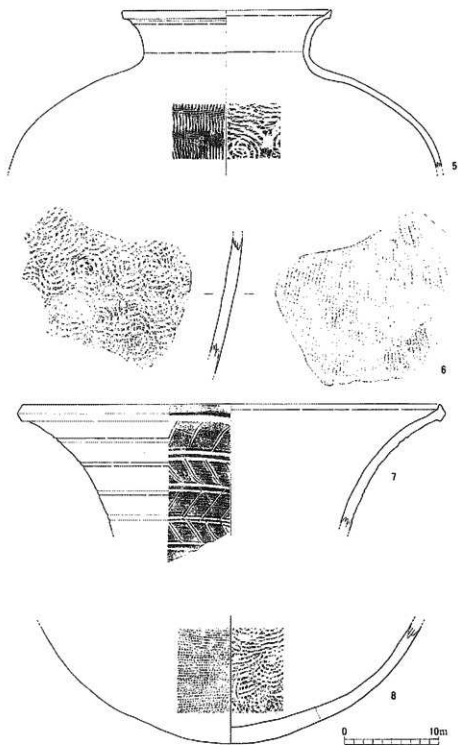
出土遺物 周溝内から検出された須恵器がある。

時期 6世紀後半。

備考 昭和53年1月、的場義夫氏発見。



第34図 東畑古墳表採土器実測図 (1:3)



第35图 东畑古墳周清出土土器实测图 (1:4)

第3表 東畑古墳出土土器観察表

No	種別	器種	法 量	技法の特徴	胎土	焼成	色 調	備 考
1	須恵器	坏(身)	口径 推定13.5cm	横方向のナデ調整	緻密	不良	灰白色	前庭部出土。 蓋のかぶった状 態で出土したが 焼成が悪く蓋は 復元不可能
2	須恵器	坏(蓋)	口径 推定14cm	胴部だけにヘラ削りを施し、胴部はすべて横方向のナデ調整	緻密	良	灰白色	横丘表採
3	土師器	高坏			密	やや甘い	にぶい橙褐色	横丘表採
4	須恵器	高坏	口径 推定9cm	横方向のナデ調整 3本のヘラ記号あり	密	良	にぶい黄褐色	横丘表採
5	須恵器	甕	口径 推定22cm	外面：平行叩き 内面：青銅波叩き	密	良	外面：灰黄色 内面：灰色	周溝底より出土
6	須恵器	大甕		外面：格子目叩き 内面：青銅波叩き	密	良	外面：黒色 内面：黄灰色	周溝底より出土
7	須恵器	大甕	口径 推定35cm	外面：沈線により4区に 仕切りヘラ線文を 施す 内面：横方向のナデ調整	緻密	良好	外面：灰オリーブ色 内面：淡灰色	周溝底より出土
8	須恵器	大甕		外面：格子目叩き 内面：青銅波叩き	密	良	外面：青灰色 内面：灰白色	周溝底より出土

ひがしはた
29. 東畑2号墳

所在地 宇土市恵塚町宇東畑

立地 宇土半島から延びた一丘陵上に位置し、標高は約53m。東畑古墳の西北西約20m離れたところに位置する。

墳丘 天神社の境内にある古墳であり、社殿入り口の階段の脇に石室の一部が残存する。そのため、封土の存在は不明。

内部主体 両側壁を残すのみで奥壁と羨道部がどちらであるかはっきりした事はいえないが、立地からみて、1号墳と同じく南方向に開口する横穴式石室と思われる。主軸はN-20°-E。石室



図版32 東畑2号墳石室

は安山岩の大石が用いられ、現存する玄室は内法長210cmまでは確認でき、幅は150cmであり、長方形のプランをなすと思われる。

出土遺物 なし。

時 期 6世紀～7世紀。

(高木)

30. かんだけやま 金嶽山古墳

所在地 宇土市恵塚町字金嶽

立 地 宇土半島山塊の東へ派生した丘陵の谷間を西から東へ飯塚川が流れる。川の南側丘陵に仮又古墳と仮又2号墳が、また、北側丘陵には東畑古墳・東畑2号墳と本墳がある。地形は丘陵頂部から僅かに西側へ下った斜面にあり、標高約70mを測る。東畑古墳は北北西150mの距離にある。

墳 丘 円墳？

内部主体 南西方向に開口する横穴式石室で、石材には安山岩を使用している。玄室の長さは2m、幅は1.6mを測り、天井石は玄室内に落ち込んでいる。また狭道部分は不明である。

出土遺物 なし。

時 期 石室の構造から東畑古墳と同じ時期の6世紀後半と推察できる。



図版33 金嶽山古墳石室

(木下)

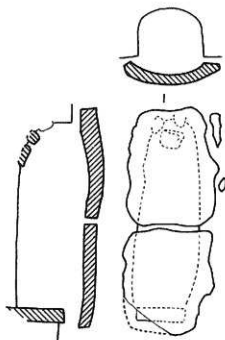
31. つばわら 椿原石蓋土壙墓

所在地 宇土市椿原町字西園

立 地 宇土半島側から延びた丘陵斜面部（標高約25m）に位置し、眼下の水田との比高差は約10mである。

墳 丘 丘陵尾根先端部付近に土壙が掘られたものであり、墳丘や周溝の存在は不明。

内部主体 地表下約30cmで石蓋上面に達し、主軸は北西-南東をとる。石蓋には断面がカマボコ形を呈する2枚の阿蘇溶結凝灰岩が用いられており、蓋の全長は2.1m・幅1m・厚さ11～15cm・深さ45cmで、南東側の小口には凝灰岩切石をたてている。また、北西側小口の内底には3



第36図 榊原石蓋土墳墓実測図 (1:40)



図版34 榊原石蓋土墳墓 (三島撮影)



図版35 榊原石蓋土墳墓蓋石 (三島撮影)

個の石が置かれる。

出土遺物 遺物はなく、人骨の小破片が検出されたのみ。

時期 不明。

備考 昭和33年1月調査。

文献 三島格「宇土市轟榊原における石蓋土墳の一例」熊本史学第15・16号、1959年。

(三島・高木)

32. ^{にしおかだい}西岡台箱式石棺

所在地 宇土市神馬町字千畳敷

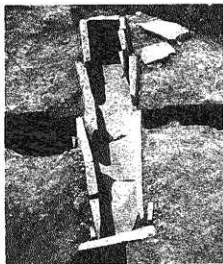
立地 宇土半島側に接近した独立丘陵(西岡台)上に位置し、崖面に近い傾斜変化点付近に築かれている。標高約15mであり、北側の沖積平野との比高差は約10mを測る。

墳丘 なし。

内部主体 安山岩板石を組み合わせた箱式石棺であり、内壁に赤色顔料を塗る。長さ187cm、幅20~35cmを測る。

出土遺物 遺物はなかったが、仰臥伸展葬の人骨1体が発見された。

時 期 出土遺物がなく不明であるが、石組みから見て古墳時代の前半頃に比定しておきたい。
(平山・高木)



図版36 西岡台箱式石棺



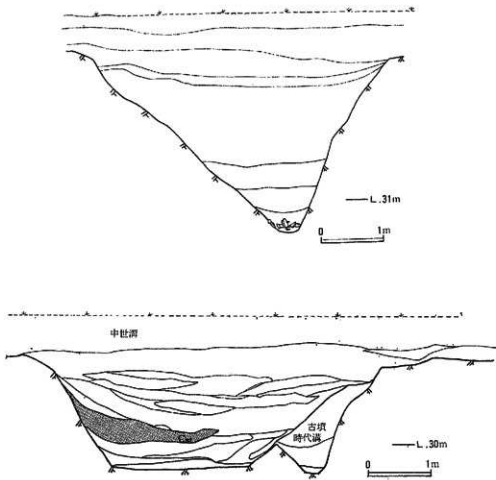
図版37 西岡台遺跡のV字溝



図版38 獣形鏡(西岡台遺跡)



第37図 西岡台遺跡千量敷V字溝出土獣形鏡(2:3)



第38圖 西岡台遺跡千疊敷V字溝・濫重複狀況圖 (1:60)

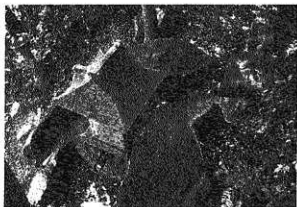
33. 山王平古墳 さんのうびら

所在地 宇土市神合町字山王平

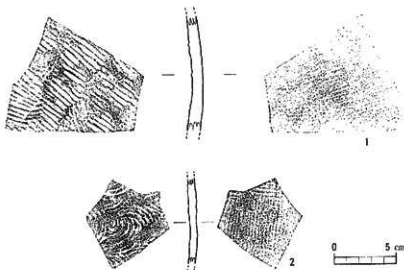
立地 宇土半島側の東端に位置する陽白山（標高218.2m）の東側斜面丘陵上に立地し、標高は約35m。付近には、スリバチ山古墳・迫ノ上古墳・神合古墳などがある。

墳丘 丘陵斜面を利用して築かれた封土はかなり流失するが、石室を中心としたわずかな墳丘の残存が観察できる。東南側の斜面部に葺石のようなものがあり、それから古墳の墳丘規模を推測すると直径約15mを測る。石室開口方向の斜面には須恵器が検出でき、この古墳の時期推定の参考にすることができた。

内部主体 南西方向に開口する横穴式石室であり、主軸はN-32°-E。石室は側壁と奥壁の腰石を残し、玄室内部に天井石と思われる大石が入り込んでいる。玄室と羨道部の境をなす袖石が見えないため、玄室と羨道部の規模は分からない。奥壁から羨道部先端までの長さは4.84mあり、玄室の幅は1.7m、確認できる深さは88cmまで。



図版39 山王平古墳石室



第39図 山王平古墳表探土器実測図 (1:3)

第4表 山王平古墳表土器観察表

No	種別	器種	法 址	技法の特徴	胎土	洗 戒	色 調	備 考
1	須恵器	壺(?)		外面：横方向の平行叩きの上に斜方向のハケ目 内面：平行叩き	緻密	良好	外面：黒褐色 内面：灰白色	前庭部表採
2	須恵器	甗(?)		外面：平行叩きの上に薄いハケ目 内面：首飾取叩きの上からナデ調整	密	良	外面：オリーブ黒色 内面：灰白色	前庭部表採

出土遺物 石室開口方向の前庭から検出された須恵器（第39図）がある。

時 期 6世紀後半。

備 考 昭和61年度分布調査によって発見。

(高木)

34. 神合古墳

所 在 地 宇土市神合町字追ノ前

立 地 宇土半島側の東端に位置する陽白山（標高218.2m）から延びた一丘陵の先端頂部に位置し、標高は約35mある。東南約150mには谷（現在は溜め池）を挟んで箱ノ城古墳が位置する。そのほか、付近にはスリバチ山古墳・追ノ上古墳・城ノ越古墳・山王平古墳などがあり、宇土半島基部でも有力な地域の一つとなっている。

墳 丘 丘陵尾根の先端部を巧みに利用して築かれた円墳であり、墳丘の残りはよい。現状での墳丘規模は、東西22.4m・南北21.6m・高さ3mであり、推定径約22mくらいの円墳と思われる。墳丘規模の割には墳頂部の径（11.5m）が広いように思われる。

内部主体 不明。

出土遺物 昭和42年にこの古墳が発見された折、円筒埴輪の破片と思われる小片が採集されている。

時 期 不明。

(高木)

35. 猫ノ城古墳

所在地 宇土市栗崎町字西平

立地 宇土半島の山塊の東側に派生した丘陵の頂部に位置し、標高約50mを測る。北側は宇土から熊本の市街地が一望できる。また、東には城ノ越古墳、西側には神合古墳がある。

墳丘 墳丘裾部は、削り取られ旧状を留めないが、現状で径15~16m、高さ約2mの円墳と思われる。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

備考 墳頂部に城ノ越古墳から移された稲荷神社が建てられている。昭和41年4月、宇土高校社会部・富樫卯三郎氏らによる測量が行われている。



図版40 猫ノ城古墳墳丘

(木下)

36. 城ノ越古墳

所在地 宇土市栗崎町字城ノ越

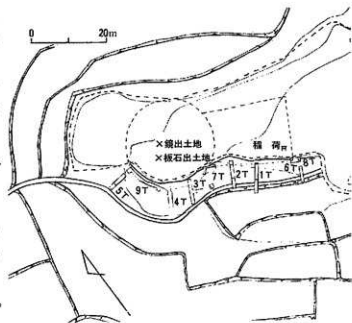
立地 宇土半島基部の、平野が最も狭くなった所の丘陵上に位置し、標高は約60mを測る。眼下の沖積平野との比高差は約55mである。古墳の位置する丘陵には近世において障が置かれた事があり、その折にかなりの地形の改変が行われたようである。

墳丘 地形の改変によって古墳の旧状も大きく損なわれたようで、更に周辺を含めたミカン園開墾の際に墳丘もカットされてしまった。この開墾時に古鏡が発見されたためにこの地が古墳であることが明らかとなったものである。発見時の墳丘の残存状況は、細長い墳丘裾部が小高くあり、単なる円墳ではなく前方後円墳であることを予測させた。開墾後の墳丘裾に設けたトレンチによって、推定全長は約43.5m、後円部推定径約23mの主軸をほぼ東西にとった前方後円墳であると考えられる。

内部主体 開墾時に発見された古鏡の出土地からは他に何の遺物もなく、土質にも顕著な変化はなかったといい、石材も出ていない。ただ、鏡出土地点から5m位離れたところには2枚の板状石の側壁が検出され、そこに箱式石棺があったことを予想させる。

出土遺物 出土した鏡は、いわゆる三角縁四神四獣鏡であり、面径21.7cm・鏡面の反り0.5cm。

鏡背面は高く作り出された三角縁から、鋸歯文帯・複線波文帯・鋸歯文帯の外区から、櫛歯文帯・珠文帯の文様帯がある。そして内区は鋸歯文帯から二神と二獣がそれぞれ2ヶ所ずつに鈕を挟んで配され、各区は四つの素乳によって区画される。四神像は殆ど似た表現であり、そのうちの三神には傍らに笠松形文様が置かれる。鈕は有節重弧文圈座に囲まれ、鈕孔は鉤放しに近い。この鏡との同型鏡が、鳥取県西伯郡会見町の普段寺2号墳



第40図 城ノ越古墳墳丘測量図 (1:1000)

から出土している。この2面を比較すれば、城ノ越鏡の外区と文様帯の境をなす斜面部が素文のみままであるのに、普段寺鏡ではそこが鋸歯文帯となって、乳も城ノ越鏡はなにもない素乳のみままであるが、普段寺鏡ではそこが模文圈座となっている。

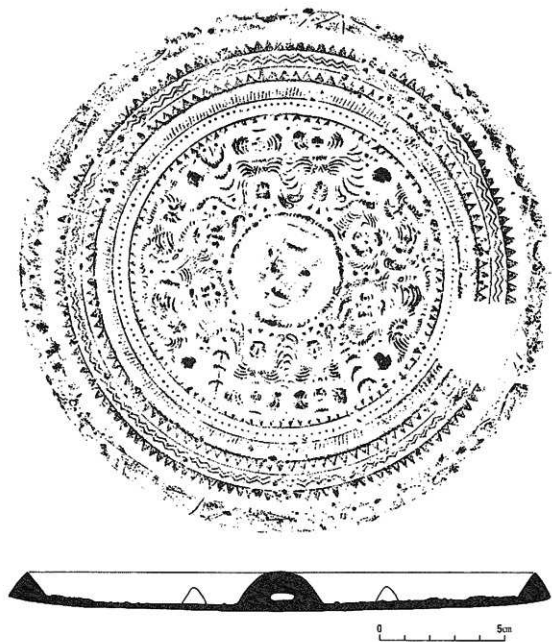
時 期 4世紀後半。

備 考 昭和41年4月に鏡は発見され、同月24日から5月28日までの間に断続的に発掘調査を実施。西側約100mに猫ノ城古墳(円墳)がある。

文 献 ①富樫卯三郎「宇土市城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡」『熊本史学』第33号、1967年。

②富樫卯三郎・高木恭二「熊本県城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡について——鳥取県普段寺2号墳出土鏡との比較——」『考古学雑誌』第67巻第3号、1982年。

(富樫・高木)

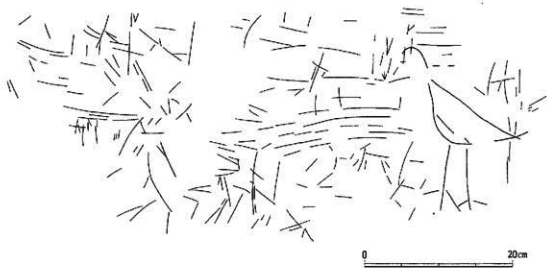


第41圖 城ノ越古墳出土三角縁四神四獣鏡 (2:3)

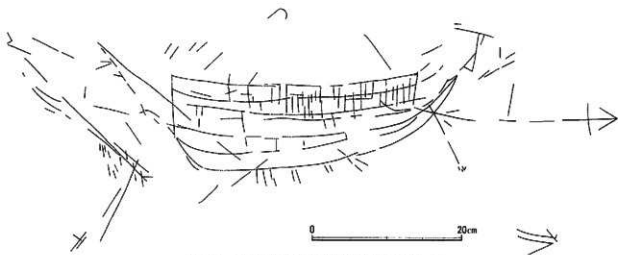
37. ^{こじょう}古城 古墳参考地

所在地 宇土市神馬町宇古城

立地 宇土城は天正17年に小西行長が築いた城郭で、本丸跡の標高は16mを測る。石材が出土した位置は本丸の南側にある三ノ丸跡の石垣からである。この丘陵からは、弥生時代から古墳時代前期の遺物が出土し、当時の集落があったことは明らかである。



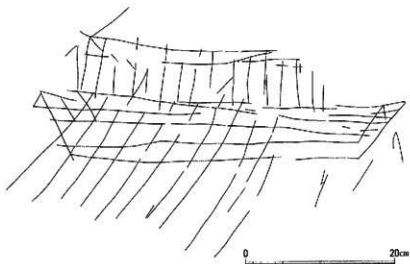
第42図 古城古墳参考地石材線刻実測図(1) (1:5)



第43図 古城古墳参考地石材線刻実測図(II) (1:5)



第44图 古城古墳参考地石材線刻実測図(0) (1:5)



第45图 古城古墳参考地石材線刻実測図(V) (1:5)

内部主体 本来は横穴式石室に用いられたものであろう。

装飾 装飾は安山岩の巨石に練刻で描かれている。その文様には、鳥・木の葉・船などがある。

備考 昭和44年5月、富樫・宇土高校社会部による宇土城（三ノ丸跡）石垣の発掘調査並びにその後の再調査によって発見された。

文献 富樫卯三郎「宇土城の石垣」『宇土市の文化財』第1集、宇土市教育委員会、1972年。

(富樫・木下)

38. ^{さかいめ}境目箱式石棺群

所在地 宇土市境目町字西原

立地 宇土半島基部の東側にある雁回山から延びた丘陵が、沖積平野に変わる台地の先端部に位置し、石棺群を含む付近一帯は弥生時代中期から古墳時代・古代・中世にかけての一大集落・墓地遺跡である。標高約10mの洪積台地であり、水田との比高差は約5mを測る。

墳丘 不明。住宅団地造成工事に伴って箱式石棺8基、割竹形木棺のスタンプと思われる粘土床2～3基、それに破壊されてその実体が明らかでない埋葬施設4基が発見された。工事中の発見であったために墳丘や周溝の有無は明らかでない。

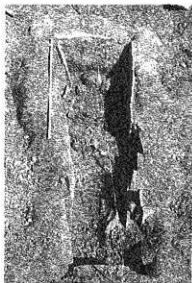
内部主体 箱式石棺には床面に敷石や枕石を置くものがあり、側石の石組みには2種が有る。割竹形をなす床面のカーブから、木棺があったと考えられる粘土床も2～3基があり、石棺や粘土床から赤色顔料も検出されている。各石棺の詳細は第5表の通り。

出土遺物 殆ど発見されていないが、1号石棺から垂頭斧箭式鉄鏃2本、5号棺・6号石棺からガラス小玉がそれぞれ1個ずつ検出されている。また、1・2・6・7・8・14号棺からは人骨も発見された。

時期 検出された遺物が少なく時期を示すものは殆どないが、1号石棺の鉄鏃は古墳時代に属することは明らかで、5世紀前半代に比定できようか。

備考 昭和41年9月に発見され、工事と平行して緊急調査を実施。

文献 宇土高校社会部『宇土高校社会部報』第1号、1967年。



図版41 境目箱式石棺

(富樫・高木)

第5表 境目石棺群一覧表 (埋葬遺構16基のうち、欠番は木棺及び不明なもの)

No	全長	幅	深さ	枕	床	人骨	副葬品
1	163	41~30	25~20		粘土床	1	鉄鏃 2
2	175	34~27	25~23		粘土床	2	
3	168	43~26	15~11		粘土床		
4	155	29~26	20~12		粘土床		
5		(32)	(21)		粘土床 敷石(一部)		小玉 1
6	177	58~32	30~23	枕石	粘土床	2	小玉片 1
8	158	34~30	14~10	枕石	粘土床 敷石(全面)	1	
14		(30)			粘土床	1(?)	

39. 古保里箱式石棺群

所在地 宇土市古保里町居屋敷・南五器田

立地 宇土半島基部の東側から延びた丘陵が、沖積平野に変わる台地の先端部付近に位置する。一帯は縄文時代後期の貝塚であり、更には弥生時代後期から古墳時代・中世にかけての集落・墓地遺跡でもある。標高約10mの洪積台地であり、水田との比高差は約3.5mを測る。

墳丘 不明。石棺は偶然の機会に見えられたものばかりであり、これまで、箱式石棺4基が確認されている。

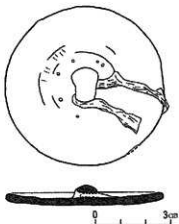
内部主体 いずれも安山岩板石を組み合わせた箱式石棺であり、2号棺には床面に粘土枕をつくる。

出土遺物 1号石棺から鹿角装刀子・竹櫛・人骨が、2号石棺からは珠文鏡1面・短剣1本・鎌1本・ガラス小玉32個・硬玉製勾玉2個・碧玉製管玉1個が、3号石棺からは短剣・鉄鏃・3体の人骨が検出されている。

時期 3石棺の微妙な前後関係は不明であるが、4世紀後半～5世紀前半頃に比定できるのではなからうか。

文献 ①富樫卯三郎「古保里石棺群」『宇土市の文化財』第3集、1977年。

②富樫卯三郎「珠文鏡——古保里2号箱式石棺」『肥



第46図 古保里箱式石棺群2号棺出土珠文鏡(2:3)

後考古」第3号、1983年。

(富樫・高木)

40. 神ノ山1号墳

所在地 宇土市松山町字東原

立地 宇土半島と、これに対峙する羅回山との間に位置する小山塊の東側丘陵尾根上にある。古墳付近の標高は約25m。北や東にある洪積台地との比高差は約15mを測る。

墳丘 小丘陵の尾根を利用して築かれたものであるが、墳丘は石棺を包む程度の小規模なものであったようである。

内部主体 昭和42年、重機による採土工事中に偶然発見されたものである。主体部は組み合わせ式の家形石棺を直葬したもので、棺蓋に2石・棺身に4石の阿蘇凝灰岩を用いている。棺蓋は蒲鉾形に近い屋根形であり、頂部に幅約9cmの不明瞭な平坦部、周縁には幅約10～15cmの平坦面を持つ。棺蓋の長側辺にそれぞれ3個ずつの半円状を呈した縄掛突起を造り出し、棺蓋の長さは213cm・幅105cm・高さ37cm。棺身の内法長さ167cm・幅84cm・深さ83cmを測り、棺底には円礫を敷く。棺身内面の小口側に1対の刀掛状突起が造り出され、そこには剣が架せられていた。この種の突起の用途を考えるうえで貴重な例である。

出土遺物 鉄剣1本、直刀1本・鉄蓋(?)1本・刀子1本・鉄鏃30本以上があった。

時期 5世紀後半。

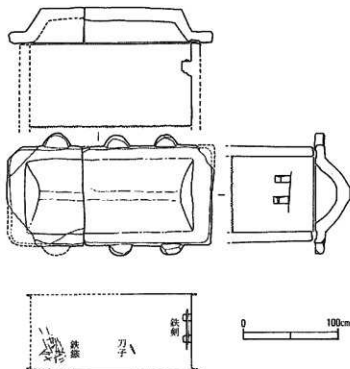
備考 昭和42年調査。

文献 宇土高校社会部「神ノ山1号墳」「宇土高校社会部報」第2号、1968年。

(富樫・高木)



図版42 神ノ山1号墳



第47図 神ノ山1号墳家形石棺実測図 (1:40)

41. 神ノ山2号墳

所在地 宇土市松山町字東原

立地 宇土半島に対峙する小山塊の東側丘陵尾根上であり、1号墳の西約30m付近の標高約30mに位置する。北や東側の洪積台地との比高差は約20m。

墳丘 丘陵尾根を利用して築かれた円墳であるが、封土の流出は甚だしい。

内部主体 昭和43年の採土工事によって完全に破壊されてしまったが、工事に追いつけられる形での緊急調査であった為とその詳細はよくつかめていない。古墳の埋葬主体は横穴式石室であるが、石室の中位以上は全く残っておらず、腰石を残すのみであった。そのため、側壁や上部の造りがどのようであったかは知ることが出来ない。確認しえたのは玄室コーナーの一部のみと羨道部の一部と思われる列石だけであるが、玄室床面には仕切りがあり、屍床を造っている。

出土遺物 玄室から鉄鍔やガラス小玉が検出され、墳丘裾の近くから須恵器の甕も発見されている。

時期 6世紀中頃～後半。

備考 昭和43年調査。

(富樫・高木)

42. 神ノ山^{かみやま}3号墳

所在地 宇土市松山町字東原

立地 宇土半島に對峙する小山塊の東側丘陵尾根上にある1号墳・2号墳の北側約50m付近にあったものであるが、採土工事によって消滅した。標高約20m付近であり、周辺洪積台地との比高差は約10mを測る。

墳丘 丘陵尾根の先端部を利用して築かれた円墳であるが、古墳発見時の記憶では直径5～6m・高さ約2m位は残っていたようである。

内部主体 採土工事によって完全に破壊され、その内容は全く不明。

出土遺物 不明。

時期 不明。

備考 この古墳を指すかどうかは明らかでないが、1・2号墳以外のこの一帯の古墳から凝灰岩製のくり抜き式石棺が出土し、内部から人骨・鏡3面などが検出されたことが有るといふ。

(高木)

43. 上松山^{かみまつやま}箱式石棺

所在地 宇土市松山町字東原

立地 宇土半島基部の東側、神ノ山古墳のある小山塊から延びた丘陵上に位置し、近くには縄文時代の押型文土器や弥生時代中期から古墳時代・古代・中世にかけての集落・墓地遺跡である南山内遺跡がある。標高約12mであり、沖積平野との比高差は約5mを測る。

墳丘 不明。偶然の機会に発見されたものであり、石棺の調査のみで周辺までは実施されていない。

内部主体 安山岩板石を組み合わせた箱式石棺であり、内壁に赤色顔料が塗られている。

出土遺物 鉈1本。

時期 出土遺物が殆どなく不明であるが、鉈は古墳時代前半代のものであろう。

(富樫・高木)

44. 檜崎古墳

所在地 宇土市花園町字檜崎

立地 宇土半島基部には、半島から延びた丘陵と、これに対峙する雁回山（標高314.4m）との間に小規模な平野を作っており、熊本平野と八代平野とを結ぶ交通の要衝となっている。そしてこの平野に面した両側の丘陵上には数多くの古墳が散在する。檜崎古墳もその一つであり、雁回山から延びた丘陵先端部の標高約30mの付近にある。眼下には近世に入って掘られた立岡池・花園池があり、古墳とこの池との比高差は約20mを測る。池を造る際の工事の帳付けを行なったのがこの古墳の場所であったと伝えられることから古墳の場所を帳付山と呼ぶ。

墳丘 丘陵尾根先端部を利用して築かれたもので、前方後円墳として県の指定史跡となっているが、長い年月の封土流出やその他の理由によって墳丘は大きく変形を受けている。今次宇土半島基部調査によって昭和60年12月から昭和61年2月にかけて行なった発掘調査でもこれが前方後円墳である事を証明するものは何も確認できなかったが、それを否定する材料も何も無い。墳丘は殆ど地山を削り出して造られており、葦石や周溝は未確認。前方後円墳とした場合の墳丘は、全長約46m・後円部径約35m・後円部高さ約5.7m・前方部幅約21.5m・前方部高さ約4m・くびれ部幅21.5mで主軸はN-19°-Wとなり、円墳とすれば径約22m・高さ約2.7mとなる。

内部主体 大正10年10月にこの古墳の頂上に堂宇を建てようとして石棺・土槨等が発見されたものであり、その際に県史蹟調査委員によって調査が行われた。埋葬主体は、後円部に家形石棺2基・舟形石棺1基・石蓋土槨1基、前方部に箱式石棺1基の計5基（南から順次1号、2号…と呼ぶ。）であるが、大正期調査の実測図の誤りから舟形石棺を家形石棺と誤認され、



第48図 檜崎古墳墳丘測量図 (1:500)

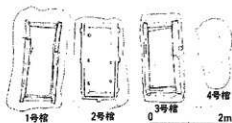
家形石棺は3基であるとされてきた。

1号石棺は組み合わせ式の家形石棺であり、棺蓋に2石・棺身に6石の阿蘇溶結凝灰岩を用いる。南端に位置し、規模は最も大きい。東西2.4m、南北1.35~1.5m、現地表から深さ60cmの墓壇に内法長さ1.88m、幅70cm、深さ85cmの石棺が組み

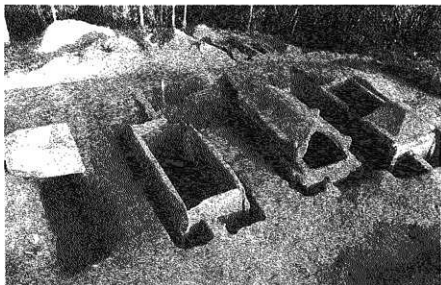
み合わせられ、床面には円礫を敷く。大正年間の調査に於いて頭蓋骨2・直刀2・鉄鏃若干が検出されており、今回の調査において新たに2本の鉄鏃が発見された。石棺の棺蓋は屋根形を呈し、周縁に平坦面を持つ。両小口に1個ずつの円柱状の縄掛突起と、一方の棺蓋の長側面に極めて退化した小突起が付けられている。



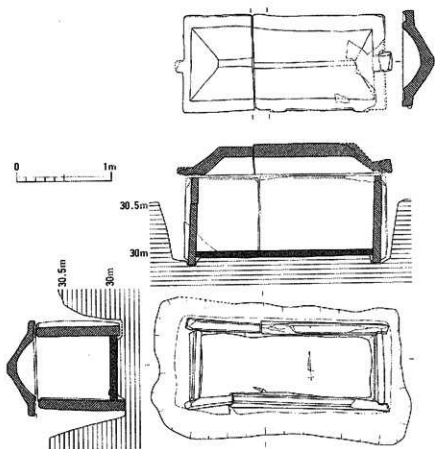
図版43 檜崎古墳前方部より後円部を望む



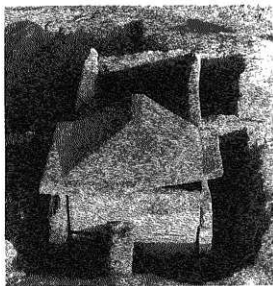
第49図 檜崎古墳石棺・土壇配置図 (1:100)



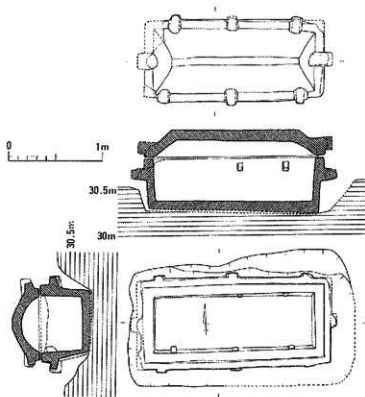
図版44 檜崎古墳1~4号棺



第50图 檜崎古墳1号棺実測図(1:40)



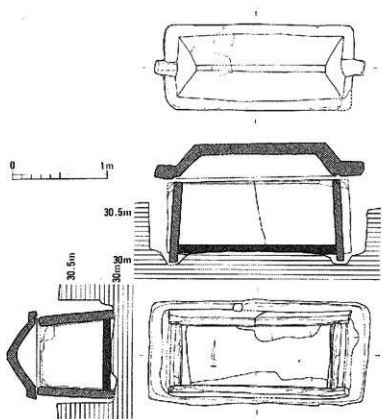
图版45 檜崎古墳1号棺



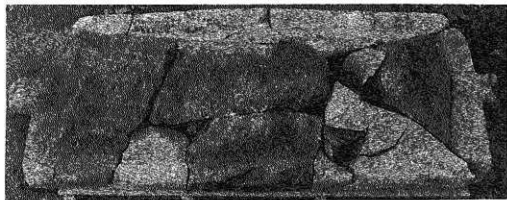
第51图 檜崎古墳2号棺実測図(1:40)



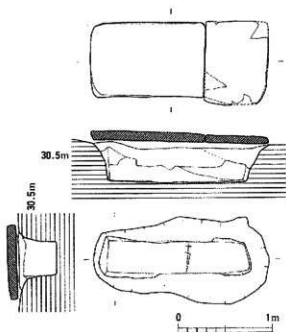
图版46 檜崎古墳2号棺



第52图 檜崎古墳3号棺実測图(1:40)



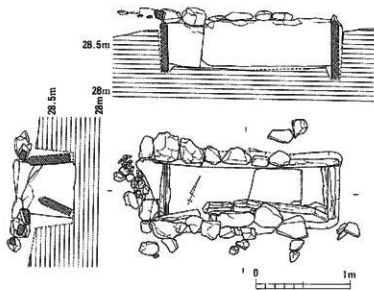
图版47 檜崎古墳3号棺



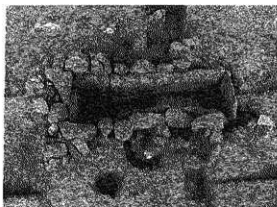
第53图 榑崎古墳4号棺実測図(1:40)



图版48 榑崎古墳4号棺



第54图 榑崎古墳5号棺実測図(1:40)



図版49 榑崎古墳 5号棺



図版50 榑崎古墳 1号棺鉄鏝出土状態

2号石棺は削り抜き式舟形石棺であり、棺蓋棺身とも一石の阿蘇溶結凝灰岩を用いる。墓壇はかなり荒らされていたが、東西2.4m・南北1.27mの石棺が入るのにせいいっぱいの大きさであり、石棺棺身の内法長1.72m、内法幅60cm、深さ45~47cmで、棺身長2.19m、幅96cm、高さ53~58cmある。箱形に近い断面の底部ながら側縁に舟べり状の突帯が付き、しかも内壁の両長側面に2個と3個ずつの刀掛状突起がつく。北側の2個には刀ないしは剣が架けられていたのであろうが、両側のものには槍か矛が架かっていたものと想像される。棺蓋は屋根形を呈し、周縁に平坦面を持つ。両小口に1個ずつの円柱状の縄掛突起と、一方の棺蓋の長側面に極めて退化した小突起が付けられている。

3号石棺も1号石棺と同じく組み合わせ式家形石棺で、これには棺蓋が1石・棺身4石の阿蘇凝灰岩が用いられ、東西2.32m、南北1.07m、現地表からの深さ75cmの墓壇が掘られる。棺身内法長さ

1.59m、幅76cm、深さ75cmで、床面には円鏝が敷かれていたようである。これも棺蓋は屋根形をなし、周縁に平坦面を持つタイプである。1号と同じく両小口に1個ずつの円柱状の縄掛突起がつくが、長側面に突起はない。

4号は他例と異なり石蓋の土壇であるが、棺蓋には2石の阿蘇凝灰岩板石が用いられ、棺身に当たる土壇は長さ195cm、幅85cm、深さ40cmある。蓋石が地山面にのっていることから考え4号棺が最初に造られたものでなかったならば、盛土を掘削して土壇を削り、遺体や蓋を置いた後に再び土で埋めたということになり、他の4例の石棺棺蓋上に被っていた土の厚さから見ても本来の墳頂はかなり高かったものとみられる。棺蓋は長さ121cm、幅79cm、厚さ10cmと、長さ67cm、幅90cm、厚さ8cmの平板な石2枚が用いられている。

5号石棺は上記4例の石棺から約15m離れており一つだけ存在する。組み合わせ式の箱式石棺であり、長さ195cm、幅85cm、深さ40cmの墓壇に、棺身内法長さ173cm、幅59cm、深さ55cmに

組まれ、棺身の長側石には各2枚、小口に各1枚が用いられる。

出土遺物 調査が早く行われた為に大正時代に発見された遺物の所在は明らかでないが、その折には、1号石棺から人骨2体・直刀2・鉄鏃若干(3?)が検出され、3号石棺から人骨片、5号石棺から刀剣類が検出されている。昭和60年の調査においては1号石棺から新たに2本の鉄鏃が発見されたのみである。それは、1本が圭頭広根弁箭式、もう1本は無茎の広鋒丸凹長三角形形式鉄鏃であり、従来不明であった遺物の一端が明らかになった意義は大きい。

時期 5基の埋葬時期に楯が見られるのは当然のことであるが、その配列から見ると並列する4基は余り時期の隔たらない頃に埋置されたものと考えられる。古墳が構築されたのは5世紀後半頃であろう。

備考 大正10年10月に県史蹟調査委員によって発掘調査が実施され、その直後に

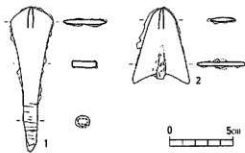
石棺の覆屋が架けられ、翌年11年の1月に京都大学の梅原末治氏が古墳を訪ね、調査を行っている。そして、昭和60年12月10日から昭和61年2月27日までに墳丘確認と古墳保存の為に発掘調査を実施し、昭和61年度から石棺の保存修復に着手。

文献 ①梅原末治「肥後國楯崎の古墳について」『歴史と地理』第12巻第5号、1925年。

②梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「宇土郡楯崎の古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊、1923年。

③高木恭二・木下洋介・元松茂樹「ヤンボシ塚古墳・楯崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集、1986年。

(高木・木下)



第55図 楯崎古墳1号棺出土鉄鏃実測図(1:3)



図版51 楯崎古墳1号棺出土鉄鏃

45. 女夫塚古墳 (女塚)

所在地 宇土市花園町字西原

立地 木原山の山塊から南側に広がる低い丘陵上に位置し、標高約28mを測る。南西方向約150mの地点に男塚(前方後円墳、下益城郡松橋町所在)があり、周辺には数多くの古墳が分布している。

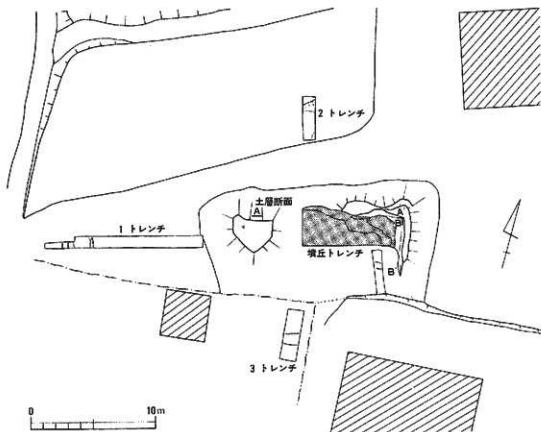
墳丘 土取りによって封土の大半がなくなっている為に古墳本来の形状は大きく変わっている。墳丘確認のために設定したトレンチによって周溝が確認され、単なる円墳とするには不都合なあり方を示しており、前方部を西に向け、主軸を東西とする前方後円墳である可能性が高い。

内部主体 破砕された凝灰岩を数多く確認したが実態は不明。

出土遺物 須恵器(脚付壺・提瓶・壺・甕)。

時期 6世紀後半。

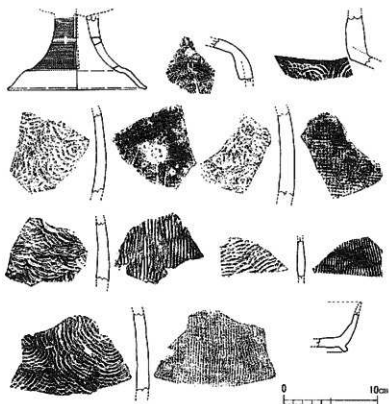
備考 昭和59年11月16～12月25日に宇土半島基部古墳群分布調査の一貫で確認調査を実施。



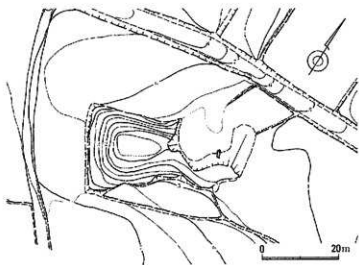
第56図 女夫塚古墳(女塚)地形測量図(1:300)

文 献 高木恭二・木下洋介・古城史雄『女夫塚古墳（女塚）』宇土市埋蔵文化財調査報告書
第11集、宇土市教育委員会、1985年。

(木下)



第57図 女夫塚古墳（女塚）出土遺物実測図（1：4）



第58図 女夫塚古墳（男塚）墳丘測量図（1：1000）

46. 古墳参考地（^{ひがしうらごの}字東潤野）

所在地 宇土市立岡町字東潤野

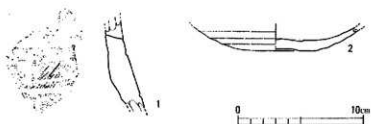
立地 宇土半島基部の北東部にも数多くの古墳が分布する。檜崎古墳、女夫塚古墳、山下古墳（下益城郡松橋町所在）、晚免古墳は一つの迫を見下ろすような位置にある。本参考地も地理的には同様な地形にある。しかし、現状では古墳であることを明確に示す根拠はない。ところでこの地の様子は東南方向から延びる丘陵の先端に円形の丘を形成している。標高約34m、迫の水田との比高差20mを測る。

墳丘 円墳？（径約15m、高さ約3m程度であるが、古墳であると断定するには疑問がある。）

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。



第59図 古墳参考地（宇東洞野）表採須恵器実測図（1：3）

第6表 古墳参考地（宇東洞野）表採須恵器観察表

No	種別	器種	法	址	技法の特徴	胎土	焼成	色	調	備考
1	須恵器	器台			外観の上部と下部に縁描 並文。中部に斜行へろ 幅文を施し3段に分かれ た4ヶ所のスカシ孔が確 認される	緻密	良好	外面：灰青褐色 内面：よい橙色		参考地の西側約 25mの斜面付近 表採
2	須恵器	壺(?)			外面：体部にナデ調整 内面：ナデ調整	緻密	良好	外面：灰色 内面：灰白色		同上

備 考 本参考地から西方約25mの地点から須恵器（第59図）が採集された。

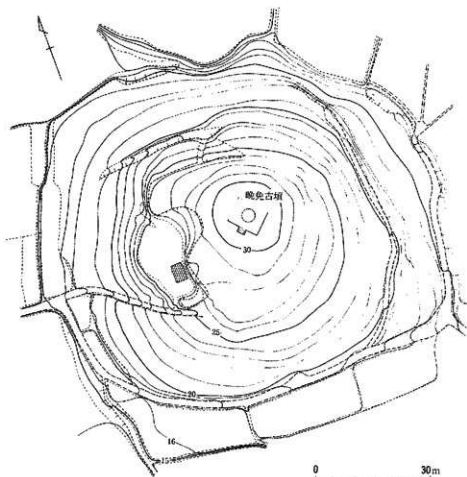
（木下）

47. ^{ばんめん}晩免古墳

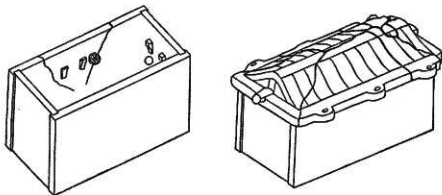
所在地 宇土市立岡町字晩免

立 地 宇土半島と、これに対峙する形で位置する雁回山との間には小規模な平野が広がっており、そこは熊本平野と八代平野とを結ぶ重要な交通の要衝となっている。この平野に面した両側の丘陵上には数多くの古墳が散在し、雁回山側から延びた丘陵の一つにこの古墳は位置し、墳頂付近の標高は33mある。西側前面には洪積台地があり、その付近との比高差は約20m。

墳 丘 小丘陵の尾根先端の頂部を利用して築かれたものであるが、古墳がどの範囲の規模であるかはよく分からない。地形測量図（第60図）を見ても分かる通り、比高13m下部の独立丘陵そのものが良好な円形を呈し、あたかも全体が一つの円墳であるかのような状況をなす。実際、南東側の丘陵を詳細に観察すると、そこがもともとは晩免古墳方向に向けての丘陵であり、その先端部を切断したかのように見える。永年の地形の変化によってこの独立丘のところどころには地山が見えている所があり、しかも葎石などを観察出来ないことから必ずしも断定出来ない。なお、明治時代に出土した家形石棺の内部に菊花文のような装飾が見られたことや付近に伝わる伝承など、この古墳が安徳天皇の墓でないかということから“花園陵墓参考地”



第60圖 晚免古墳地形測量圖 (1 : 1000)



第61圖 晚免古墳家形石棺見取圖

として宮内庁の指定を受け、現在もその管理下にある。そのため、石棺の部分は石垣で覆われてしまっており、墳丘規模その他を知ることは出来ない。

内部主体 明治19年頃に発見されたものであり、その際の公文書や絵図の写しが残っており出土時の状況を知ることが出来る。それによると、主体部は組み合わせ式の家形石棺であり、棺蓋に2石・棺身に4石の凝灰岩を用いている。棺蓋は墨根形を呈し、周縁に平坦面を持ち、両長側面にそれぞれ3個ずつの環状縄掛突起と両小口に1個ずつの円柱状縄掛突起を造り出す。斜面部には長方形区画が施される。長さ約7尺・幅3尺6寸。棺身の内面には小口と長側のそれぞれに1対の刀剣状突起が造り出されており、長側の突起の横には菊花状の、小口の突起の下には円文の装飾がそれぞれ見られる。

出土遺物 石棺の発見が偶然的であったことや、早い頃であったために遺物については殆ど分かっていないが、当時の記録では“刀剣に擬わしきもの數個”とある。

時期 5世紀後半。

備考 明治19年発見の直後から、村の戸長や県令から国へ、あるいは国から県・郡・村にあてた公文書の写しが残されており、当時の文化財に対する措置を詳細に知ることが出来る。花園（安徳天皇）陵墓参考地として宮内庁の指定を受けているが、時期的にも合わない。

文献 ①小杉徳師「雑録 肥後國に埋蔵するめづらしき石棺」『帝國古蹟取調會々報』第3号、1902年。

②浜田耕作・梅原末治・島田貞彦「肥後國宇土郡花園村の古墳」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第3冊、1919年。

③高木恭二「肥後南部の石棺資料（1）」『宇土市史研究』第2号、1981年。

④花園興輝校訂「古墳発願記録（抄）」『宇土市史研究』第3号、1982年。

⑤富樫卯三郎「晚免古墳—花園陵墓参考地—」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県教育委員会、1984年。

(高木)

48. 古墳参考地（宇^よ土^と半^ど島^し基部）

所在地 宇土市古保里町宇土四度橋765-1~3

立地 宇土半島基部の平野の北東縁部には山塊から延びた低い舌状の丘陵が派生しており、その先端部には古くから集落を形成している。山塊のやや急な斜面には神ノ山古墳群が分布しておりこの斜面が平坦地に変化する地点からさほど離れないところに本参考地が位置する。また北側先端部域には古保里箱式石棺群がある。標高約11m東西両方向の水田との比高差5mを測る。

墳丘 不明（字図によれば前方後円墳状を呈するが、現在は削平され平坦地となってい

る)。

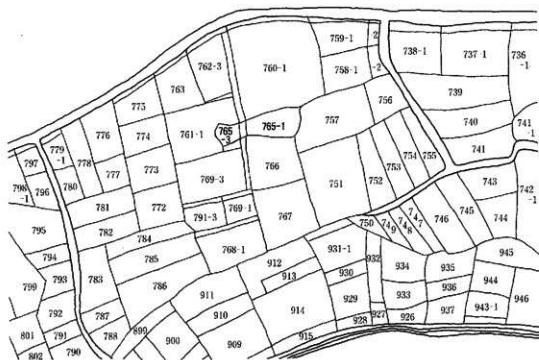
内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

備考 字図には原野と記載されているが、地元ではツカと呼んでいる。

(木下)



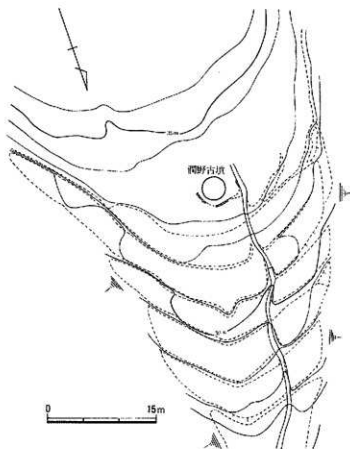
第62図 古墳参考地(宇四度橋)周辺字図

49. ^{うるこの}潤野古墳

所在地 宇上市立岡町字潤野

立地 雁回山側から延びた丘陵斜面に位置し、標高は約35m。晩古墳とは谷を挟んで約300m南にあり、周辺部との比高差は約25mを測る。

墳丘 丘陵の尾根を巧みに利用して築かれたものであるが、現状では古墳の規模を明らかに出来ない。明治16年に出土した家形石棺は、国の指示により石棺を石垣で覆い、その上には“古墳”と彫り刻んだ石柱が立てられている。



第63図 洞野古墳周辺地形測量図 (1:500)

内部主体 明治16年3月に偶然発見されたものであり、その当時の文書によって発見時やその後の状況を知ることが出来る。それによると、主体は組み合わせ式の家形石棺であるが、棺蓋の残りは悪い。凝灰岩を用いており、棺蓋は屋根形を呈する。周縁には平坦面を造るようであり、両長側辺にそれぞれ2個ずつの環状縄掛突起を造り出す。棺蓋の下面に平資盛・吾人などの落書きがある。棺身側壁の長さ約7尺4寸・幅2尺5寸・高さ3尺2寸を測る。棺身の内面の長側辺に1対の刀掛突起が造り出されており、この突起の上部には罫歯文を施した長方形の区画があり、突起の間や下部、更には小口石にも円文がある。

出土遺物 不明。

時期 5世紀後半。

備考 明治16年3月に発見され、その後石棺は埋め戻された。

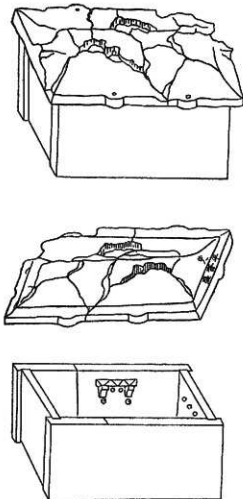
文 獻 ① 浜田耕作・梅原未治・島田貞彦「肥後國宇土郡花園村の古墳」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第3冊、1919年。

② 高木恭二「肥後南部の石棺資料(1)」『宇土市史研究』第2号、1981年。

③ 花岡興輝校訂「古墳発願記録(抄)」『宇土市史研究』第3号、1982年。

④ 富樫卯三郎「潤野古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県教育委員会、1984年。

(高木)



第64図 潤野古墳家形石棺見取図

50. 古墳参考地 (字四度橋)

所在地 宇土市古保里町字四度橋817-1

立地 宇土半島基部の平野の北東縁部には山塊から延びた低い舌状の丘陵が派生しており、その間の迫には細長い平野が熊手状に侵入している。この中の一つの平野の最も奥まったところの低い台地上にあり、東西両方向から丘陵が迫っている。標高12m。迫の水田との比高差5mを測る。

墳丘 円墳？(航空写真から水田の中央に円墳の周溝と推測できる土色の変化が認められる)。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

(木下)

51. 三日鬼ノ窟古墳

所在地 宇土市花園町字大曾

立地 宇土半島基部の平野と熊本平野を分断するように標高314.4mの雁回山がある。この山の南麓には緩やかな傾斜の丘陵が数多く延びていて、本墳もこの一つの丘陵のほぼ先端部に位置し標高は約40mを測る。眼下には台地が広がり、西方向には女夫塚古墳(男塚・女塚)が分布する。

墳丘 封土の大部分は流出しているが、現状で径12m、高さ3m以上と推測出来る。

内部主体 横穴式石室。主軸方向南北で南に開口する。石室内には多量の土砂が堆積していて、現状で石室の全長5.4m、玄室の長さ3m、幅2~1.65m、玄門部の幅1.1m、長さ1.2m、羨道部は長さ1.2m、幅1.2mを測る。また石室に使用した石材は主に礫岩で、一部に安山岩も使用している。天井には3個の巨石を用いている。

出土遺物 なし。

時期 6世紀後半~木塚？

文献 高木恭二・木下洋介・古城史雄他「如来寺跡」『宇土市埋



図版52 三日鬼ノ窟古墳石室

52. スリバチ山古墳^{やま}

所在地 宇土市神合町字水谷

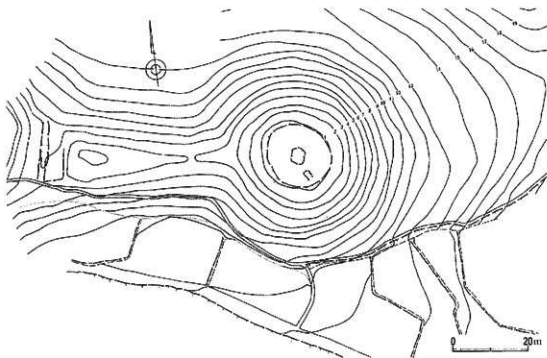
立地 宇土半島基部の小平野を東側眼下に望み、眺望に優れた丘陵上に位置する。標高は約95mを測り、沖積平野との比高差は約90mである。この古墳からは熊本・八代平野、さらには有明海・不知火海を見ることもでき、古墳のある位置からみても当古墳の重要性を窺うことができる。築尾山から延びる丘陵尾根上に造られたもので、東側約70mに迫ノ上古墳がある。

墳丘 昭和40年8月の発見がみかん園の開墾作業によったために、測量後に大きく破壊されてしまった。全長約96m・後円部径約60m・後円部高さ11m・前方部幅28m・前方部高さ4mを測り、主軸を東西にとる。

内部主体 不明。

出土遺物 みかん園造成工事中、墳丘頸部付近で底部穿孔土師器の列が発見され、墳丘を巡ることが明らかとなった。

時期 4世紀後半。



第65図 スリバチ山古墳墳丘測量図 (1:1000)

備考 昭和40年8月発見。

文献 富樫卯三郎「摺鉢山古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年。

(富樫・高木)

53. ^{まこ}追ノ^{うえ}上古墳

所在地 宇土市神合町字追ノ上

立地 宇土半島基部に広がる平野を挟んで位置する西側の宇土半島側丘陵にある古墳であり、前記スリバチ山古墳とは70m離れるのみで、極めて近接する。スリバチ山古墳と同じく昭和40年8月にみかん園の開墾によって発見された。標高約75mであり、同一丘陵の東側下方先端部には城ノ越古墳や猫ノ城古墳などがあり、眼下の水田面との比高差は約70mを測る。

墳丘 丘陵尾根を利用して古墳は築かれており、後円部を東側におく。全長約56m・後円部径約32m・後円部高さ約4m・前方部幅約15m・前方部高さ約2mで、主軸は東西に近い。墳丘の調査によって土師器片が出土しているが、それが列をなすものかどうかは明らかでない。

内部主体 後円部に、墳丘の主軸と同じ方向の割石小口積み竪穴式石室がある。石室周辺の控え積みは、東西8m・南北3.5mであり、天井石は砂岩製。石室の石積みも砂岩であり、石室の長さ5.08m・幅1m・高さ0.7mであり、床面には木棺の跡が粘土床として残る。

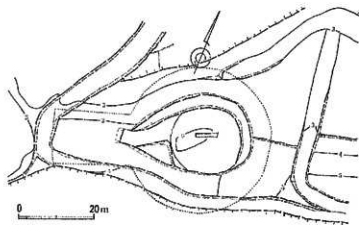
出土遺物 墳丘調査によって若干の土師器片が出土しており、石室から鉄刀・鉄剣・鉄鏃・鉄刀子・ヤリガンナなどが検出されている。

時期 4世紀後半。

備考 昭和40年8月に発見され、翌昭和41年1月に発掘調査が実施された。

文献 富樫卯三郎「追ノ上古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年。

(富樫・高木)



第56図 追ノ上古墳墳丘測量図 (1:1000)

54. 古墳参考地 (字北請^{きたうけ})

所在地 宇土市伊無田町字北請

立地 城ノ越古墳の東250mに位置し、その間に北側に開く谷が形成されている。丘陵は、標高35m、水田との比高差約30mを測り、北方へ突出している。周辺には久保1号・2号墳、城ノ越古墳、猫ノ城古墳、神台古墳などがあり、それらの立地から見ても、本地に古墳が存在した可能性は十分に考えられる。

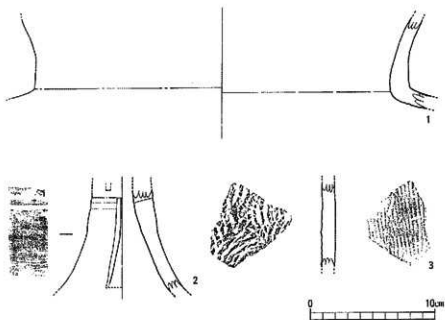
墳丘 不明。

内部主体 以前に開墾されており、現在は雑木林になっている。今回、須恵器を採集した地点には、安山岩の転石が数多く確認できたが、それらが石室材として用いられたものかは不明である。

出土遺物 須恵器片を採集。

時期 古墳時代後期。

(木下)



第67図 古墳参考地 (字北請) 表採須恵器実測図 (1:3)

第7表 古墳参考地（字北請）表採須恵器観察表

No.	種別	器種	法 量	技法の特徴	胎土	焼成	色 調	備 考
1	須恵器	人差		内面下部を除きハケ目を通す内面下部には背海波印き	密	良	外面：灰色 内面：褐灰色	
2	須恵器	高杯		胴部上下2段にスカシ孔（各3ヶ所）外面下部にカキ目上部に磨崖文(?)を通す	緻密	良	外面：黒褐色 内面：にぶい黄棕色	
3	須恵器	棗(?)		外面：平行印き 内面：背海波印き	密	良	青灰色	

55. 久保1号墳

所在地 宇土市伊無田町字北請

立地 宇土半島の山塊の東端部に派生した丘陵には数多くの古墳が分布する。神合古墳・猫ノ城古墳・城ノ越古墳・久保2号墳などは本墳と同じ丘陵にある。また、平野を隔てて対峙する丘陵にも多くの古墳が分布する。

久保古墳は、久保2号墳から東へ約70m程離れたところの、丘陵の端部にあり標高35mを測る。

墳丘 円墳。北西～南東で11m、北東～南西で9m、高さ2.3mを測り、楕円形を呈する。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

(木下)

56. 久保2号墳

所在地 宇土市伊無田町字北請

立地 宇土半島の山塊の東端部の丘陵には数多くの古墳が分布している。丘陵の尾根から北側に僅かに下ったところにあり、標高35mを測る。また、この久保2号墳の位置する丘陵には東に久保1号墳、西に城ノ越古墳・猫ノ城古墳・神合古墳がある。

墳丘 円墳。主軸方向で径12.4m、高さ1.35mを測る。石棺から谷側の墳裾までは5mを測るが、頂部側の墳裾は現状では判断出来ない。

内部主体 主軸方向北西(N-58°-W)の箱式石棺



図版53 久保2号墳

で、内法の長さ188cm・北西側の幅46cm・南東側の幅32cmを測る。北東側壁は4石、小口は1石の安山岩から成り、南西側壁は北西側の1石を残すのみで、盗掘を受けたらしく蓋石と共に遺存しない。

出土遺物 なし。

時期 不明。

備考 伊無田天満宮境内の西側にある。

(木下)

57. ^{おおひら}大平横穴墓

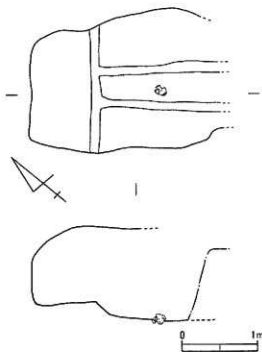
所在地 宇土市栗崎町字大平

立地 宇土半島基部の西側にあたる半島側丘陵に位置し、標高は約35mを測る。眼下の沖積平野との比高差は約30mで、横穴の付近はミカン園の開墾で大幅な地形変化を受けている。

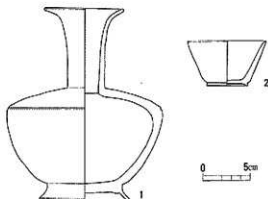
墳丘 なし。

内部主体 この横穴以外にもまだ幾つかがあったかもしれないが、明確には確認できていない。地形の改変によって横穴の入口部に当たる羨道の構造も不明であり、基底部はまだ残存しているかもしれない。玄室はドーム型の天井をもち、床面は三つの屍床と通路がつくり出される。奥壁に沿った奥屍床はやや高く、中央の通路を挟んで両側にもそれぞれ屍床をつくる。横穴の幅は1.83m、長さは2.1m以上、高さは1.18mある。この横穴から5mほど離れた所に閉塞石と思われる板石があった。

出土遺物 中央の通路部から須恵器がセットで発見された。高台付きの長頸壺と碗がそれで、色調や焼成も全く同じである。



第68図 大平横穴墓実測図 (1:50)



第69図 大平横穴墓出土土器実測図 (1:4)

時期 7世紀。

備考 昭和41年の春に発見されたものであり、同年6月に発掘調査を実施。

文献 平山修一「大平横穴古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年。

(富樫・高木)

58. ^{おけぞこ}桶底古墳

所在地 宇土市松山町字桶底

立地 宇土半島基部の東側丘陵からはやや独立する通称“高城”(標高95m)から派生した丘陵が沖積平野に延びた低台地上に位置し、標高は約9m。

墳丘 不明。病院建設に際して破壊されたものであり、本来の古墳の場所には何も残っていない。

内部主体 巨石を用いて造られた横穴式石室と思われるが、その石材が現存しないため詳細は不明である。

出土遺物 なし。

時期 不明。

(高木)

59. チャン^{ヤマ}山古墳

所在地 宇土市松山町字南山内

立地 宇土半島基部の東側丘陵にあり、東南約400mに御手水古墳、南約400mには向野田古墳が位置する。丘陵先端の頂部を利用して築かれており、古墳からの眺望はよい。標高約40mであり、眼下の洪積台地との比高差は約30mを測る。

墳丘 採土の途中で発見されたために墳形は明確でないが、丘陵の先端頂部を利用して築かれた円墳のようである。墳丘裾部に葺石を巡らし、径は約20m・高さ約2mある。採土工事中の発見であるため墳丘や内部主体の半分が削られてしまっており、詳細を知ることが出来ない。

内部主体 地表下約1mの所に主軸を南北とする割石積み竪穴式石室があり、天井石(安山岩板石)には粘土被膜がある。石室の石積みはかなり粗雑であり、板状の安山岩割石と基盤となっている人頭大の頁岩の栗石を乱雑に積んでいるが、基底部は板石を立てている。工事中に発見されたため石室の一部は削られ、全長を知りえない。現存する石室側壁の長さは4.2m・幅1.2m・高さ0.8mである。床面には木棺の跡が粘土床として残っているが、底のカーブは緩やかで両側は垂直である。遺物の出土状態からみて頭位は北側であろう。

出土遺物 残存部中央からやや北側で、主軸中央より東によった位置から鉄刀1本・鉄剣1本・

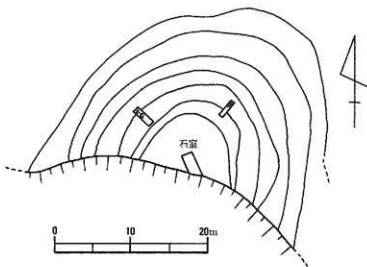
船載の鳥獸鏡1面が出土した。鏡は白銅質の後漢鏡であり、直径10.5cm。

時期 4世紀後半。

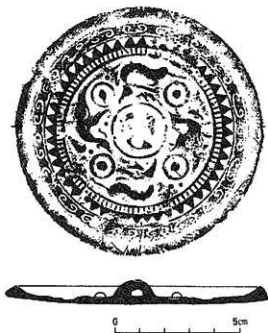
備考 昭和42年2月に発見され、翌3月にかけて緊急調査を実施。

文献 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」『石人』第9巻第7号、1968年。

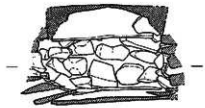
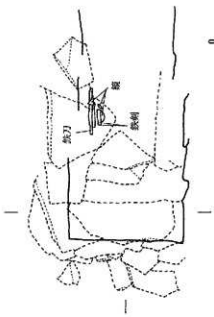
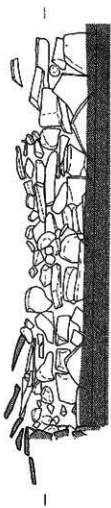
(富樫・高木)



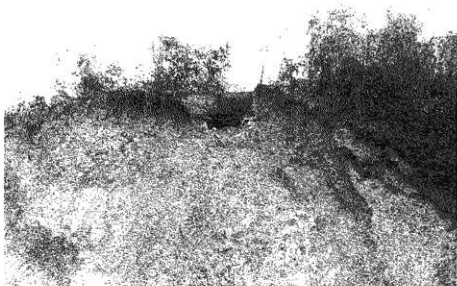
第70図 チャン山古墳墳丘測量図 (1 : 500)



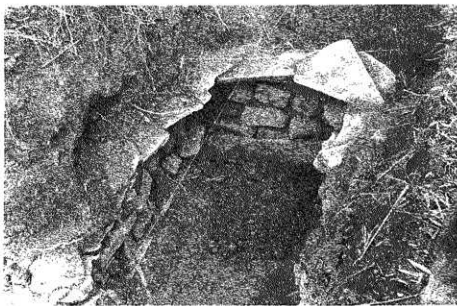
第71図 チャン山古墳出土鳥獸鏡 (2 : 3)



第72図 チャン山古墳石室実測図 (1:40)



図版54 チャン山古墳墳丘



図版55 チャン山古墳石室

60. ^{みなみやまうち}南山内石蓋土墳墓

所在地 宇土市松山町字南山内

立地 この石蓋土墳墓は南山内古墳と丘陵先端との鞍部に位置し、標高39mを測る。周辺には向野山古墳、御手水古墳の前方後円墳が位置し、他にも円墳や箱式石棺、石蓋土墳墓が分布している。

内部主体 石蓋土墳墓。北側部分が削取られ、安山岩の蓋石も落ち、半壊の状態である。

出土遺物 なし。

時期 不明。

(木下)

61. ^{みなみやまうち}南山内古墳

所在地 宇土市松山町字南山内

立地 御手水古墳から延びる丘陵には南山内箱式石棺群、南山内石蓋土墳墓などが分布している。その尾根上に位置し標高約43mを測る。

墳丘 円墳。雑木林の中に微妙に盛り上がる地形を呈する。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時期 不明。

(木下)

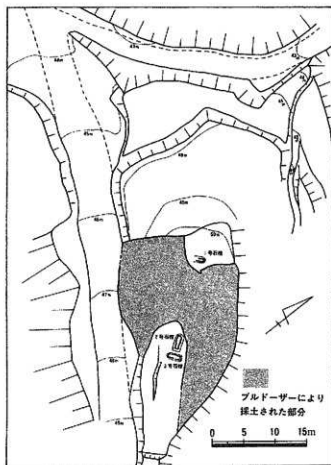
62. ^{みなみやまうち}南山内箱式石棺群

所在地 宇土市松山町字南山内

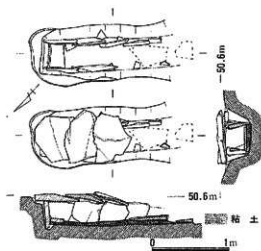
立地 宇土半島基部の東よりに標高96mの丘陵が広がっている。そのなかで西へ延びる尾根の標高77mの地点に前方後円墳の御手水古墳があり、さらにこれから続く急な尾根が緩やかになるあたりに本石棺群が位置する。地形は、標高50～51mを測り、南北方向は急傾斜をなし、南北に幅の狭い平坦部を形成している。この平坦部には、3基以外の石棺等の存在はないようである。また、さらに丘陵は分岐し、延びる尾根上に南山内古墳・南山内石蓋土墳墓・御手水2号墳、尾根の端部には竪穴式石室のチャン山古墳や前方後円墳で竪穴式石室の向野山古墳等があり、半島基部においても墳墓の密集度の高い地域である。

墳丘 なし。

内部主体 1号石棺は、発見時に南側の一部壊されてはいるが、長さは推定で1.9m、幅は床面

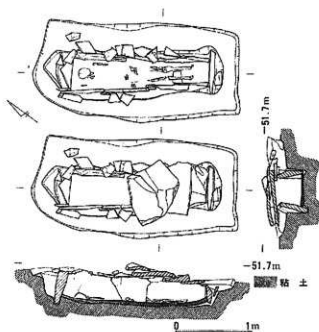


第73図 南山内箱式石棺群地形測量図 (1 : 600)



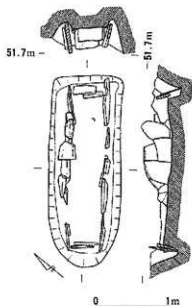
第74図 南山内1号石棺実測図 (1 : 50)

中央部で23cm、主軸方向はN-47°-Eを測る。墓壇は、堅い地山を掘ったもので幅75cm、深さ44cmの石棺に沿った隅丸長方形を呈し、小口の下部はさらに掘り凹め、上部には浅い段を設けている。また、石棺材には、安山岩の板石を用い、墓壇との間は粘土で埋められている。棺内北側には、枕石と思われる30cm×20cm、厚さ5cmの板石がほぼ水平に置かれ、赤色顔料が濃く塗られている。側石の基底部には、西側に4個、東側に2個の小さな割り石を置きささえをなしている。蓋石は北側から架けている。

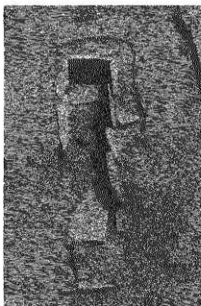


第75図 南山内2号石棺実測図 (1:50)

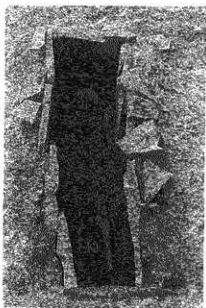
2号石棺は、内法で長さ1.92m、幅は床面中央部で42.5cm、主軸方向はN-36.5°-Wを測る。墓壇は、2.71m×1.31mの隅丸長方形をなし、石材を埋める部分でもう一段の掘方を設け、側石の下部はさらに掘り凹めている。また、墓壇と石棺の間は粘土で埋められている。石材は東側石に3枚、西側石に4枚、両小口に各1枚の安山岩の板石を用いている。棺内は赤色顔料が塗られ、床には厚さ3~5cmで粘土を敷いている。また、棺内には、頭部を西に向けた仰臥伸展葬の人骨1体と頭部右側に切先を足先方向、刃部を外に向けた刀子が1本出土した。出土人骨の右足下部には1枚の板石を敷いている。蓋石は南側から架け、側石・小口の間には、小さな板石を置き蓋石の安定をなしている。



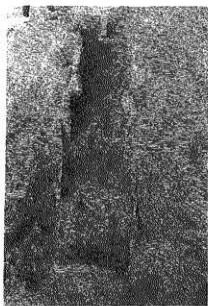
第76図 南山内3号石棺実測図 (1:50)



图版56 南山内1号石棺



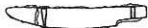
图版57 南山内2号石棺



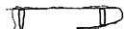
图版58 南山内3号石棺



图版59 南山内箱式石棺群出土刀子



2号石棺出土 刀子



3号石棺出土 刀子

0 5cm

第77图 南山内箱式石棺群出土铁器实测图(2:5)

3号石棺は、主軸方向N-51.5°-Eを測り、東に位置する2号石棺の主軸と直交する。今回の発見時以前になんらかの破壊を受けていたものと思われ、蓋石は1枚も残らず、側石には上端部を欠くものや、亀裂が生じ現位置をとどめていないものもある。石棺は、内法で長さ1.95m、幅は中央部で53cm、棺内は赤色顔料が塗られている。両小口には、2枚の板石を用い幅の調整を行なっている。墓壇は、堅い地山を掘ったもので長さ2.5m、幅1m、深さ30cmを測り、側石の下部はさらに10~15cm程掘り凹めている。石棺材には、安山岩の板石を用いている。棺内は、擾乱されているが、床面上5cmの地点から直角に曲がった刀子が出土した。

出土遺物 2号石棺、3号石棺から刀子各1本。

2号石棺から男性人骨1体、年齢30代後半から40代前半、身長165.1cm~166.3cmと推定出来る。

時期 4世紀後半~5世紀。

備考 昭和53年7月18日、土地所有者が採土中に発見。翌日7月19日から26日まで市教育委員会が発掘調査を行なう。

文献 北條暉幸・平山修一・木下洋介「宇上市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究』創刊号、1980年。

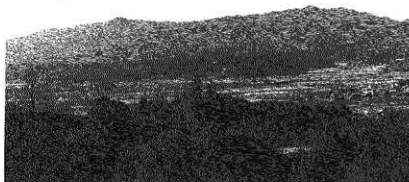
(平山・木下)

63. ^{おちようず}御手水古墳

所在地 宇土市松山町字御手水

立地 宇土半島基部に広がる平野を望む東側の丘陵上には向野田古墳・チャン山古墳を始め数多くの古墳が散在する。この一群のうち最も高い場所に位置し、眺望にすぐれるのが御手水古墳であり、標高77mの高所にある。

墳丘 丘陵尾根先端部を前方部とし、尾根を巧みに利用して造られている。地形の関係で



図版60 御手水古墳遠景

後円部と前方部の比高差が大きい。略測では全長65～70m位であり、墳丘の形態からみて前期に属するものと思われる。後円部平坦面は広く、周縁に葦石が確認出来る。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時 期 4世紀？

(高木)

64. 御手水^{おちようず}2号墳

所在地 宇土市松山町字御手水

立 地 本墳の位置する丘陵には、前方後円墳の向野田古墳、御手水古墳を中心に多くの円墳や箱式石棺、石蓋土墳墓が分布していて、この古墳は御手水古墳の北西150m、向野田古墳の北東250mの地点にある。地形は南東方向にわずかに突出した尾根の頂部に位置し、標高49.9mを測る。

墳 丘 円墳。

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時 期 不明。

(木下)

65. 古墳参考地 (字^{みなみやまうち}南山内)

所在地 宇土市松山町字南山内

立 地 御手水古墳から延びる丘陵には南山内箱式石棺群、南山内古墳などが分布している。その丘陵の先端部に位置し標高約35mを測るが、地形は大幅に改変されている。

墳 丘 円墳？

内部主体 不明。

出土遺物 なし。

時 期 不明。

備 考 通称“マルヤマ”。

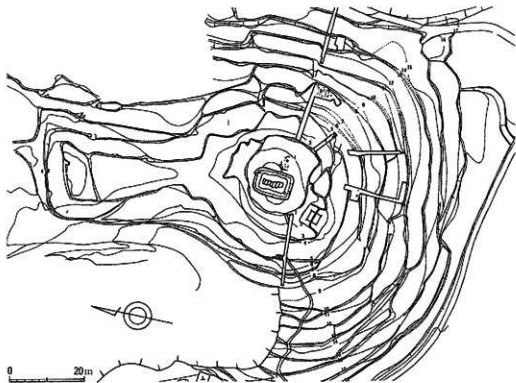
(木下)

66. 向野田古墳

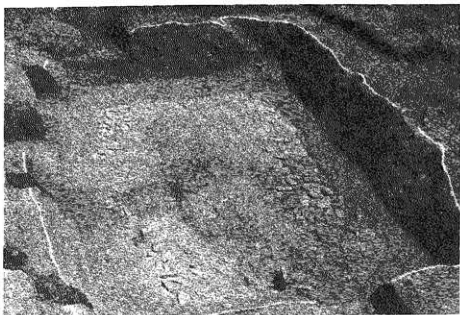
所在地 宇土市松山町字向野田

立地 宇土半島基部に広がる平野を挟んで東と西の丘陵上には数多くの古墳が散在し、当地の一大特色をなしている。そのうち、東側丘陵からはやや独立した形で通称“高城”（標高約100m）を中心とした小山塊がある。ここから派生した丘陵先端部に向野田古墳は位置し、その標高は約39mであり、眼下の水田面との比高差は約30mを測る。昭和42年に始まった採土によって古墳を含めた丘陵のかかなりの部分が地下げされてしまった。

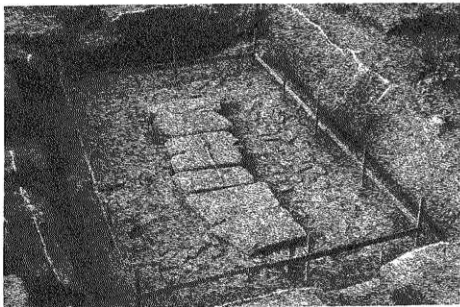
墳丘 丘陵尾根の先端部を後円部とし、丘陵側を切断して前方部を造っている。前方部の基底面は高く、後円部裾は丘陵斜面と見分けがつきにくい。全長約86m・後円部径約53.7m・後円部高さ約8m・前方部幅約33.5m・前方部高さ約4mで、主軸はほぼ南北をとる。後円部は平坦面が広く、昭和43年からの採土工事と競合して行われた断続的な墳丘調査によって葦石や円筒埴輪が確認されているが、それが何列まわるのか確認できていない。



第78図 向野田古墳墳丘測量図 (1:1000)



図版61 向野田古墳壜穴式石室 1

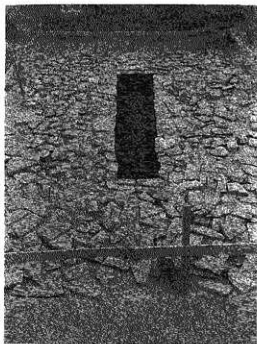


図版62 向野田古墳壜穴式石室 2

内部主体 昭和42年2月に前方部から石棺のようなものが出たと言われるが、その実態は明らかでない。後円部の埋葬施設が良好に残っているらしいことは既に昭和44年の早い頃に判っていたが、この年の5月にはブルドーザーが後円部に登り古墳全体の消滅も時間の問題というところまで来た。その為、6月に入って後円部に主体部確認のトレンチを入れ、埋葬当時のままの状態です穴式石室の粘土被膜が残っていることが明らかとなった。

埋葬主体は、舟形石棺を内蔵した割石小口積みの穴式石室であり、壘掘を全く受けていなかった。石室の墓壇は東西約7m・南北約10mの長方形プランで逆台形をなし、掘り込み面から深さ1.2mの所で幅50～80cmの平坦面がある。この墓壇に入る為の降り口として、北東コーナーに3段の階段がある。その階段を降りた面には東西約4.2m・南北約6.7mの範囲で石室控え積みがあり、この石室控え積みが2段目の墓壇に収まる。石室基底部の調査によって、その深さは約1.7mを測り、掘り込み面から基底までは3m近い深さになる。いわゆる二段墓壇である。石室には長さ1～1.54m・幅40～95cm・厚さ9～18cmの大きめの板状砂岩7枚を蓋石とし、これには全体を粘土被膜で覆っている。被膜の範囲は長さ5.7m・幅1.8～2.25m。石室は砂岩の板状板石を割石小口積みしたものであり、床面での石室の内法は、長さ4.25m・北側幅1.1m・南側幅0.94m、高さは1.08mあり、これに舟形石棺を取める。石室の内面には赤色顔料が塗られ、床面は礫が敷かれている。

石室床面下の基底部の調査によって下部構

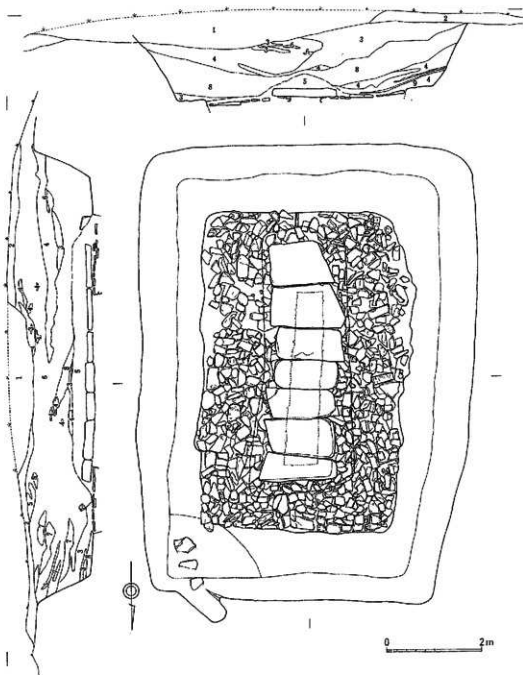


図版63 向野田古墳穴式石室3



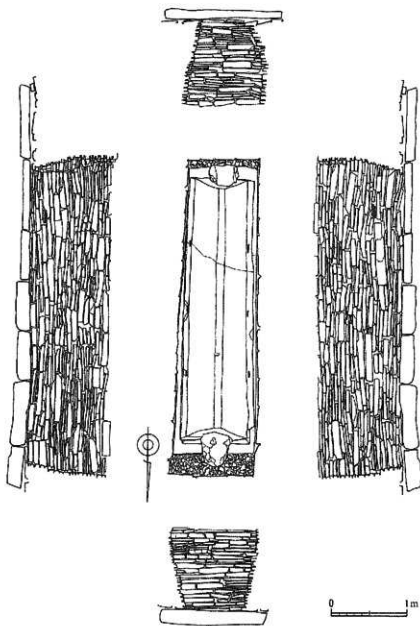
図版64 向野田古墳石棺内状態

造が明らかになっている。それによると、石棺下部には礫が敷かれるが、石棺直下には厚さ11.5cmの粘土があり、その下は板石があって、更に板石の下は拳大より小さな礫が15cmの厚さに、その下は砂混じりの砂利が約10cmあり、地山となる。

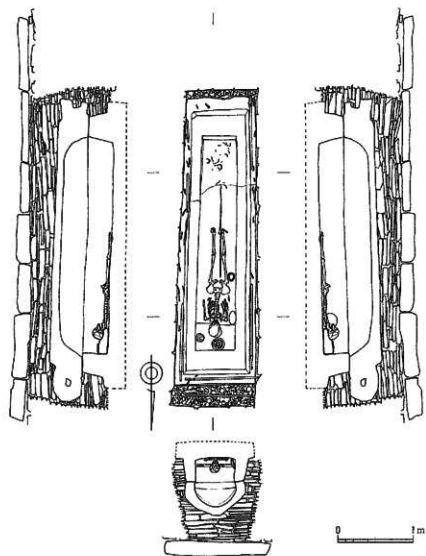


第79図 向野田古墳竪穴式石室実測図(1) (1:80)

石棺は削り抜き式の舟形石棺であり、棺蓋棺身とも一石の阿蘇溶結凝灰岩を用いる。石室いっばいに石棺は収められており、棺身の長さは3.95m、幅は北側で1.06m、南側で0.9m、高さは0.55mある。基部周縁に幅10～25cmの棺台状の張り出しがあり、上部は箱形を呈する。棺身の内法長2.86m、内法幅52～45cm、深さ33cmで、棺身内底の北側に同質材で造った石枕が嵌



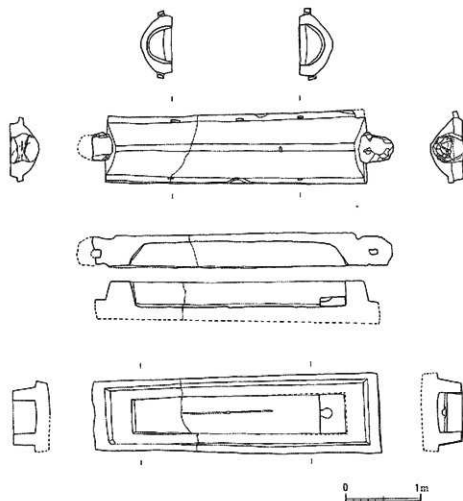
第80図 向野田古墳壜穴式石室実測図(1) (1:50)



第81图 向野田古墳竖穴式石室実測図(1:50)

め込まれており、そこには被葬者の頭がのるように円形のくりこみがある。棺蓋は屋根形を呈し、長側に平坦面を持つ。両小口に1個ずつの亀頭状をなし水平方向に穿孔を施した環状の縄掛突起を造り出すが、南側の突起は半分欠失している。石室構築時には既に欠失していたようであり、短くなった状態で石棺ざりざりに石室が造られている。棺蓋の現存長は4mであるが、元来の長さは4.2mを測り、刳抜式の石棺としては佐賀県の熊本山石棺につぐ長さである。幅は北側で1m、南側で0.87mの尻つぼまりな平面形で、高さは44cm。両長側辺には幅7~10cmの平坦面があり、そこには各辺に3個所ずつ、幅1.5~2.5cm・長さ6~10cmの矩形穿孔がある。

遺物は棺外と棺内に分けることができる。即ち、石棺の周りで石室との間には武器を中心とした鉄器が数多くあった。鉄刀・鉄剣・鉄斧・鉄刀子などで、これらの多くには布帛が付着し



第82図 向野田古墳舟形石棺実測図(1:50)

ていたが、武器の多くは抜き身のままであった可能性が高い。被葬者が女性であることを考えあわせると、外敵から守るという思想のもとに配されたのではなかろうか。棺内には人骨1体が残り、副葬品としては鏡・車輪石・玉類・貝製腕輪(?)などの装身具類に限られた。

出土遺物 墳丘調査によって多くの朝顔形埴輪が出土しているが、その多くは小片であり、全形を知りうるものは殆どない。石棺周辺から検出されたのは鉄刀4本・鉄剣4本(その内1本は木製の長い柄がついていたようであり、槍と思われる。)・鉄斧3本・鉄刀子78本であり、武器や工具類に限られる。また、鉄刀柄部の木製の刀装具の残りはよく、古墳時代前期の良好な

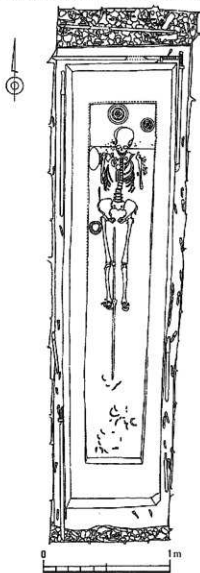
資料となっている。石棺内には30代後半～40代の女性人骨1体が仰臥伸展葬で安置され、方格規矩鏡1面・内行花文鏡1面・鳥獸鏡1面・碧玉製車輪石1個・硬玉製勾玉4個・碧玉製管玉82個・ガラス製小玉228個+ α ・二枚貝製の腕輪と思われる残片多数など、棺内は装身具類に限られており、女性にふさわしい遺物であった。首長墓に女性が葬られているという事実は重要で、稀小な例である。

なお、昭和53年発行の『向野田古墳』(文獻①)において、出土遺物(管玉)の出土地点に誤記があったため本書において訂正しておく。

『向野田古墳』報告書の54頁(第6表管玉計測表)の中で、図番号21～28は右肩北側となっているが、これを左肩北側とし、図番号29～38の左肩北側となっているものを右肩北側と改める。報告書の作成が、発掘調査が終了してから10年近い歳月が経って、遺物に付してあったラベルが入れかわってしまったためにこのような混乱が生じたものである。古墳を考える上において、副葬遺物の配置が重要な意味をもつことはいうまでもないことであるが、訂正する機会があったことは幸いであった。当該内容の混乱を指摘された白木原和美先生に謝意を表したい。

時 期 4世紀末。

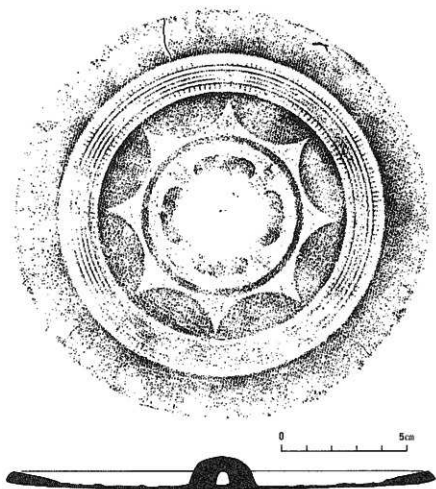
備 考 昭和43年2月から翌昭和44年5月まで断続的に墳丘確認調査を実施し、同年6月には後円部の埋葬主体確認、その年の9月に竪穴式石室の発掘調査を



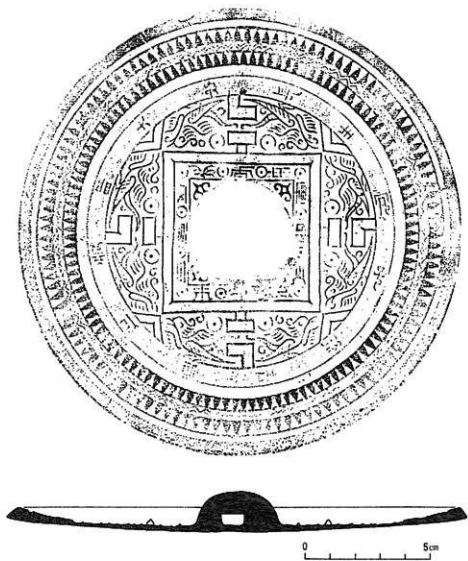
第83図 向野田古墳遺物配置図(1:30)

実施。

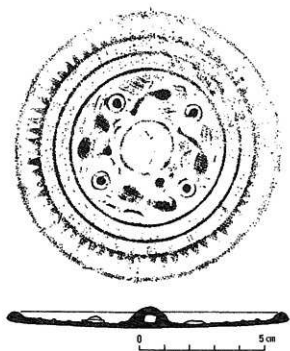
- 文 献 ①富樫卯三郎「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1978年。
②高木恭二「肥後南部の石棺資料(1)」『宇土市史研究』第2号、1981年。
③布目頼郎「向野田古墳の銅製品について」『宇土市史研究』第2号、1981年。
④北條暉幸「向野田前方後円墳(熊本県宇土市)の人骨」『宇土市史研究』第5号、1984年。
(富樫・高木)



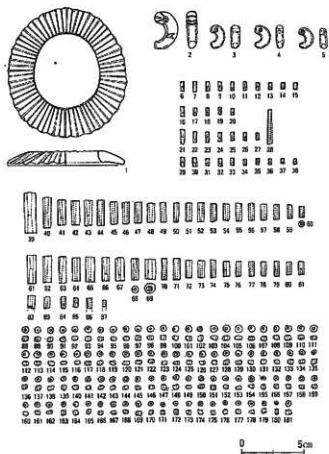
第84図 向野田古墳出土内行花文鏡(2:3)



第85圖 向野田古墳出土方格規矩鏡 (2:3)



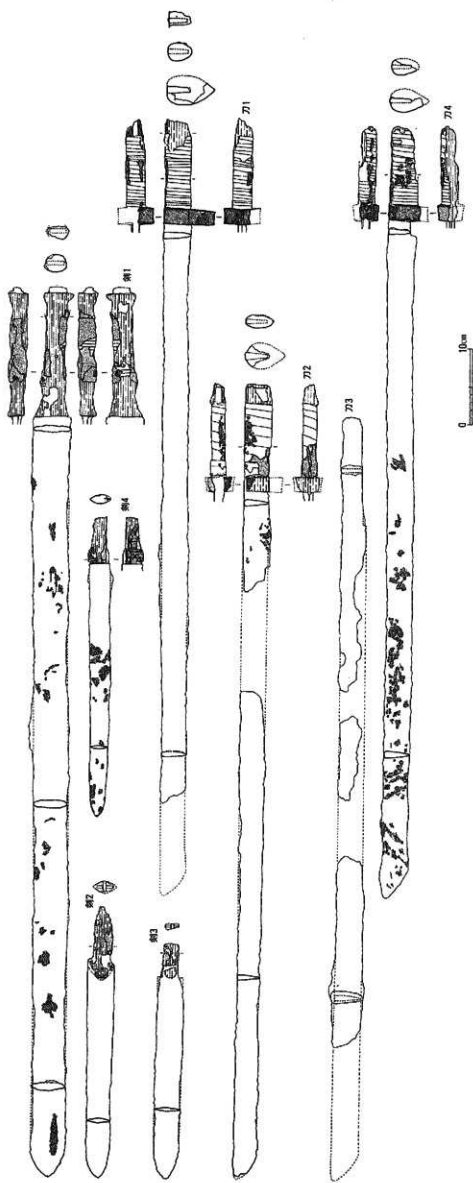
第86図 向野田古墳出土鳥獸鏡 (2:3)



第87図 向野田古墳出土鏡身具実測図 (1:3)

1 碧玉製車輪石 2~5 碧玉製勾玉 6~87 碧玉製管玉

88~181 ガラス製小玉

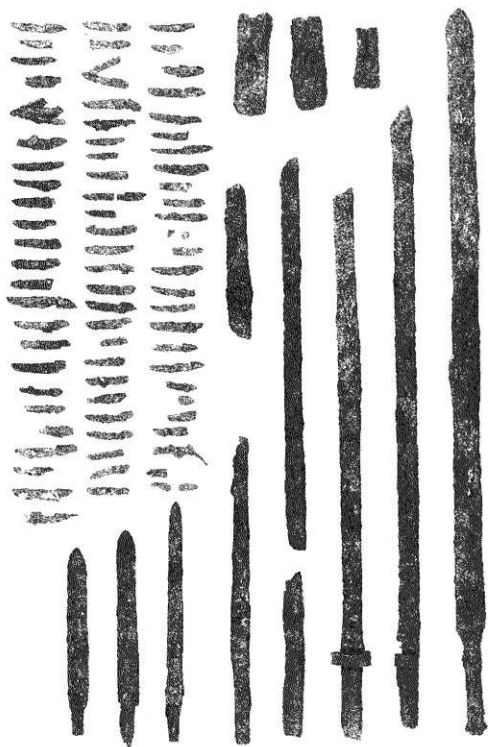


第88圖 向野田古墳出土鉄剣，鉄刀実測図（1：5）





图版65 向野田古墳出土装身具



図版66 向野田古墳出土鉄器

67. 向野田石蓋土墳墓

所在地 宇土市松山町字向野田

立地 宇土半島に対峙する東側丘陵側の小山塊から延びた丘陵の一つに位置し、前記向野田古墳から北側約40mにあり、標高は約35m付近である。

墳丘 丘陵側縁部の傾斜変化点にあり、墳丘はないようである。

内部主体 石蓋土墳の主軸はほぼ南北であり、石蓋には安山岩の板石4枚を用い、これには粘土被膜がある。土墳底は船底状を呈し、南側には粘土枕を造る。長さ約165cm・幅47~43cm・深さ30~20cmを測る。石蓋内面や土墳には赤色顔料がみられ、特に枕の付近が濃い。

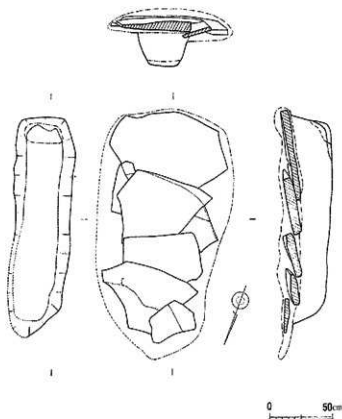
出土遺物 なし。

時期 不明。

備考 昭和43年2月調査。

文献 富樫卯三郎「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年。

(富樫・高木)



第89図 向野田石蓋土墳墓実測図 (1:30)

68. 古墳参考地 (字向野田^{むこうの だ})

所在地 宇土市松山町字向野田

立地 向野田古墳の北150mのところであり、旧地形は土取りで改変している。

墳丘 円墳？

内部主体 箱式石棺？(安山岩の板石が散乱)。

出土遺物 不明。

時期 不明。

(木下)

69. 西潤野古墳^{にしうるこの}

所在地 宇土市立岡町字西潤野

立地 雁回山側からの丘陵が立岡付近でやや独立した小山塊を造り、その一派生丘陵上の標高約25mに古墳は位置する。晚免・潤野古墳とは同一丘陵の反対にあたり、周辺部との比高差は約12mを測る。

墳丘 丘陵尾根を巧みに利用して築いた円墳であり、同一墳丘に二つの埋葬施設を持つ。

内部主体 石蓋土壇と小形箱式石棺の2基がある。土壇は通常のものとは異なり、石蓋に用いられたのが家形石棺の棺蓋と全く同じである。阿蘇凝灰岩の一石をくり抜いたものであり、長側辺に各3箇所、小口に各1箇所の縄掛突起がつく。蓋の頂部には平坦面を造り、側辺に平縁を巡らす。蓋の長さ約205cm・幅88cm・高さ34cm、棺身に当たる土壇は粘土が敷かれ、船底状を呈する。長さ約170cm・幅55cm・深さ23cm。この石蓋土壇から4m離れて小形の箱式石棺が1基ある。石棺は、内法長さ約87cm・幅38cm・深さ45cmの極めて小さいものであり、長辺・小口とも各1枚の凝灰岩板石を用いる。

出土遺物 不明。

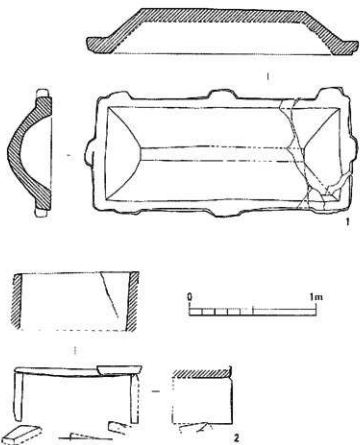
時期 5世紀代？

文献 富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」『ともしび』第5号、1960年。

(富樫・高木)



図版67 西潤野古墳石蓋土壇



第90図 西洞野古墳石蓋土壙・箱式石棺実測図 (1:30)
 1 石蓋土壙の家形石蓋 2 小形箱式石棺



IV 付 章

1. 宇城^{うま}地方古墳発掘調査年譜一覧表 (第8表)

(1987年3月現在)

遺 跡 名	調査年・月	文 献 ・ 調 査 者
-------	-------	-------------

江戸時代

不知火町鬼塚古墳	1673～1683 <small>(遺文・尺牘等)</small>	『肥後国誌』
不知火町鶴籠古墳	1715.11	(石工、新三郎)
城南町塚原古墳群	1716～1735	『肥後国誌』
城南町吉野山石棺	1761.4	寺本 直隆1784「古今肥後見聞雜記」
宇土市善道寺石棺	1761.12	(善道寺村塚石衛門)

明治時代

宇土市薮野古墳	1883	『古墳発掘記録』
宇土市晩免古墳	1886.5か	小杉 楳邪1902「肥後国に埋蔵するめづらしきお棺」帝國古蹟取調會 会報第3号

大正時代

三角町清水古墳	1913	角田 政治1918「三角町の古墳」熊本県史蹟調査報告第1回
三角町松本古墳	1918.8	
松橋町字賀岳古墳	1918	島田 貞彦1919「肥後国下益城郡松橋の古墳」京都帝國大学文学部考 古学研究報告第3冊
城南町坂本古墳	1918	梅原 未治1919「肥後国上益城郡杉上村の古墳」人類学雑誌第32巻162 号
宇土市仮又古墳	1918	島田 貞彦1919「肥後国宇土郡蘇川村の古墳」京都帝國大学文学部考 古学研究報告第3冊
城南町西阿高横穴	1920.12	清野 謙治1921「考古漫録」
宇土市鶴嶋古墳	1921.10	梅原 未治1923「肥後国鶴嶋の古墳に就て」歴史と地理第12巻第6号
三角町金桁古墳	1922.3	清野 謙治1925「日本人の研究」

昭和時代

中央町橋原石棺	1932.4	小林 久雄 「下益城郡中山村大字橋原の石棺群」九州縄文土器の 研究 (1967再録)
城南町東阿高横穴	1938.6	小林 久雄
城南町丸尾石棺	1949.1	小林 久雄1949「下益城郡豊田村塚原丸尾の石棺」九州縄文土器の研 究
松橋町の石棺	1949.3	小林 久雄
宇土市キリギス山石棺 (不知火町か)	1949.3	小林 久雄

三角町平松古墳群	1956. 5	坂本 経典1957「熊本県三角町平松の箱式石棺群」
宇土市古保里石棺	1957. 2	富樫 卯三郎1977「古保里石棺群」宇土市の文化財第3集
城南町坂野の 東天神原乙古墳	1957. 7	
松橋町古保山古墳	1957. 7	富樫卯三郎
宇土市梅原石蓋土塼	1958. 1	三島 格1959「宇土市轟、精原における石蓋土塼の一例」熊本史学 第15-16号
宇土市上松山箱式石棺	1958. 2	富樫卯三郎
城南町基九郎山古墳	1958. 3	三島 格1965「城南町史」
城南町狐塚古墳	1958. 3	三島 格1965「城南町史」
小川町年の神古墳	1958. 9	富樫・松本1959「小川町年の神古墳-20体近くの人骨の出土」熊本史学 第15-16号
宇土市境目箱式石棺	1959. 4	富樫卯三郎
宇土市西渡野古墳	1959. 6	富樫卯三郎1960「宇土市大字立岡西渡野古墳」ともしび第5号
城南町石之室古墳	1959.11	三島 格1965「城南町史」
宇土市塩屋古墳	1960. 3	
宇土市古保里2号石棺	1961. 2	富樫卯三郎1983「株文鏡-古保里2号箱式石棺」肥後考古第3号
不知火町桂原古墳	1961.12	三島 格1966「熊本県宇土郡不知火町桂原古墳」日本考古学年報14
宇土市小松古墳	1962. 2	富樫卯三郎
不知火町八久保古墳	1963.12	富樫卯三郎
不知火町道免古墳	1963.12	富樫卯三郎
不知火町東塩屋浦古墳	1963.12	富樫卯三郎
不知火町国越古墳	1964. 1	富樫卯三郎
中央町楠原石棺	1964. 1	伊藤 幸二・佐藤 伸二・高島 忠平・菊池 大和1966 「熊本県中部楠原の装飾ある家形石棺」熊本史学第31号
松橋町女夫塚古墳	1964. 3	
宇土市網田中学校 裏習地内古墳	1964	
宇土市スリバナ山古墳	1965	富樫卯三郎1977「檜峰山古墳」宇土市の文化財第3集
不知火町国越古墳	1965. 8	
不知火町弁天山古墳	1965. 8	富樫卯三郎1966「弁天山古墳調査概報-新発見の肥後最古の竪穴石室 墳」熊本史学第30号
宇土市迫ノ上古墳	1966. 1	富樫卯三郎1977「迫ノ上古墳」宇土市の文化財第3集
不知火町塚原1号墳	1961.12	三島 格1966「熊本県宇土郡塚原古墳群」日本考古学年報14
宇土市小郡田 横穴墓群	1966. 1	富樫卯三郎1972「小郡田横穴古墳群」宇土市の文化財第1集

宇土市城ノ越古墳	1966.4~5	富樫卯三郎1967「宇土市美時町城ノ越古墳出土の三角漆神駄鏡」熊本史学第33号
宇土市大平横穴墓	1966.6	平山 修一1977「大平横穴古墳」宇土市の文化財第3集
不知火町国越古墳	1966.8	乙益 重隆1967「不知火町国越古墳」昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報
宇土市チャン山古墳	1967.2~3	富樫卯三郎1968「茶白山古墳出土の鳥駄鏡」石人No.106
宇土市梅崎古墳	1967.5	富樫卯三郎・清見 末喜1969「梅咲山古墳発見棟刻の舟」考古学ジャーナル20号
宇土市神ノ山1号墳	1967.6	富樫卯三郎1977「神ノ山古墳群」宇土市の文化財第3集
宇土市神ノ木山古墳	1967.7~8	富樫卯三郎1977「神ノ木山遺跡」宇土市の文化財第3集
宇土市横崎古墳	1967.12	三島 格
宇土市古保里3号石棺	1968.3	富樫卯三郎
宇土市神ノ山2号墳	1968.3	富樫卯三郎
宇土市向野田古墳	1968.3	富樫卯三郎1978「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集
三角町辺田古墳	1968.5	富樫卯三郎1968「三角町辺田古墳調査概報」
宇土市向野田古墳	1969.9	富樫卯三郎1978「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集
豊野村土橋北ノ原石棺	1970.8	富樫卯三郎・卯野水盈二
宇土市マブシ石棺	1972.1	富樫卯三郎・卯野水盈二1975「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」宇土半島自然と文化
城南町塚原古墳群	1972.4~1974.3	野田 拓治・松本 健郎・島津 義昭・江本 直1975「塚原」熊本県文化財調査報告第16集
宇土市尾ノ上横穴墓ノ上群	1973.2	富樫卯三郎1977「城塚尾上横穴古墳群」宇土市の文化財第3集
城南町塚原古墳群	1976.4	緒方 勉・杉村 彰一1976「塚原古墳群調査報告書」
宇土市南山内石棺	1978.7	平山 修一・木下 洋介1980「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」宇土市史研究刊号
三角町小田良古墳	1978.9~10	松本 雅明・江本 直1979「小田良古墳」三角町文化財調査報告
宇土市城2号墳	1978.12~1979.12	三島 格1981「城2号墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集
豊野村北原石棺	1979.8	卯野水盈二
城南町塚原古墳群(松手地区)	1979.10~	下村 智・島崎 晃一1980「塚原古墳群調査報告書」城南町文化財調査報告書第2集
富合町神の上古墳	1981.1~2	松本 健郎1982「富合町神の上古墳について」肥後考古第2号
宇土市小松2号墳	1981.4	富樫卯三郎
三角町大串古墳	1981.4~	村井 真輝・浦田 信智1982「大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」熊本県文化財調査報告第57集
三角町要古墳群	1981.4~	村井 真輝・浦田 信智1982「大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」熊本県文化財調査報告第57集
不知火町大見観音崎石棺	1981.4~	村井 真輝・浦田 信智1982「大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」熊本県文化財調査報告第57集

城南町塚原古墳群 (丸尾地区)	1981.7~12	豊崎 晃一1982「塚原古墳群調査報告書」城南町文化財調査報告書第3集
宇土市飯又古墳	1981.8~12	平山 修一1982「飯又古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集
三角町丸子島古墳	1982.8	三島 格
三角町鬼塚古墳	1983.5	甲元 真之1986「宇土半島古墳群分布調査報告Ⅱ」三角町文化財調査報告第6集
三角町兎島古墳	1983.8	甲元 真之1986「宇土半島古墳群分布調査報告Ⅱ」三角町文化財調査報告第6集
城南町塚原古墳群 (第5次)	1983.8	豊崎 晃一・清田 純・1983「塚原古墳群調査報告(丸尾地区Ⅱ)」城南町文化財調査報告第4集
三角町彦江崎古墳	1984.7	酒田 信智・河北 毅
三角町寺島古墳	1984	甲元 真之1986「宇土半島古墳群分布調査報告Ⅱ」三角町文化財調査報告第6集
三角町重盤山古墳	1984.8~9	甲元 真之・松本 健郎1986「宇土半島古墳群分布調査報告Ⅱ」三角町文化財調査報告第6集
宇土市女夫塚古墳 (女塚)	1984.11~12	木下 洋介・古城 史雄1985「女夫塚古墳(女塚)」宇土市埋蔵文化財調査報告第11集
宇土市ヤンボシ塚古墳	1985.2~3	高木 恭二・木下 洋介・元松 茂樹1986「ヤンボシ塚古墳・櫛崎古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告第13集
城南町塚原古墳群 (第6次)	1985.8 ~1986.3	豊崎 晃一・清田 純一1985「塚原古墳群調査報告」城南町文化財調査報告第5集
宇土市伝ニツ枝古墳	1985	平岡 勝昭1986「新南郡・潤野遺跡」熊本県文化財調査報告第84集
宇土市櫛崎古墳	1985.12 ~1986.2	高木 恭二・木下洋介・元松茂樹1986「ヤンボシ塚古墳・櫛崎古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告第13集
松橋町大道夫婦塚古墳	1986	村井 真輝・高谷 和生

※本表は高木が作成した「宇城地方発掘調査年譜一覧表」(『宇城地方の文化財』第3集に掲載)から古墳関係の発掘調査を抜粋し、1982年以降の分を元松が追加・補足したものである。

2. 宇城地方古墳時代関係文献一覧表 (第9表)

(1987年3月現在)

著 者	論 文 ・ 文 献
-----	-----------

江 戸 時 代

寛文9 (1669) 年

北嶋 雲山 『國郡一統志』

寶暦11 (1761) 年

『寛根八、一五 寶暦九年と全十二年迄』

明和9 (1772) 年

森本 一瑞 『肥後國誌』

天明4 (1784) 年

寺本 直藏 『古今肥後見聞雜記』

明治時代

『古墳発掘記録』

明治23 (1890) 年

若林 勝邦 『肥後旅行談』、『東京人類学会雑誌』第5巻第49号

明治35 (1902) 年

小杉 細郭 『肥後國に埋蔵するめづらしき石棺』、『帝國古蹟取調會々報』第3号

明治39 (1906) 年

廣松 良臣 『肥後松合村の古墳』、『考古界』第5巻第7号

大正時代

大正2 (1913) 年

『熊本縣宇土郡浦村前越の発掘品 (彙報)』、『考古学雑誌』第2巻第3号

大正6 (1917) 年

梅原 末治 『宇土郡不知火村古墳』、『肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊

梅原 末治 『肥後國杉上村の一石棺』、『人類学雑誌』第32巻162号

大正7 (1918) 年

角田 政治 『三角町の古墳』、『熊本県史蹟調査報告』第壹回

梅原 末治 『杉上村吉野山頂の古墳』、『熊本県史蹟調査報告』第壹回

大正8 (1919) 年

梅原 末治 『肥後國宇土郡花園村の古墳』、『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊

梅原 末治 『肥後國下益城郡杉上村の古墳』、『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊

島田 貞彦 『肥後國下益城郡松橋の古墳』、『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊

島田 貞彦 『肥後國宇土郡緑川村の古墳』、『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊

大正10 (1921) 年

宇土郡役所 『宇土郡誌』

大正11 (1922) 年

下益城郡役所 『下益城郡誌』

清野 謙次 『考古漫録』、『民族と歴史』第8巻第5号

大正12 (1923) 年

梅原 末治 『肥後國橋崎の古墳に就て』、『歴史と地理』第12巻第6号

大正14 (1925) 年

梅原・古賀・下林 「宇土郡檜崎の古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊

清野 謙次 「日本人の研究」

昭和時代(戦前)

昭和3 (1928) 年

井上 正 「宇土史蹟踏査の榮」『地歴研究』第4篇第2号

昭和7 (1932) 年

小林 久雄 「下益城郡中山村大字楠原の石棺群」(未発表。『九州縄文土器の研究』1967年に収録。)

昭和10 (1935) 年

小林 久雄 「横穴古墳閉塞石の裝飾」(未発表。『九州縄文土器の研究』1967年に収録。)

昭和11 (1936) 年

小林 久雄 「横穴古墳出土の亀骨」『考古学』第7巻第9号

昭和時代(戦後)

昭和21 (1946) 年

梅原 末治 「肥後の二古墳—豊田村石之冢と免田町の鬼の釜古墳—」『史跡と美術』第16巻の3(通巻169号)

昭和24 (1949) 年

小林 久雄 「組合箱式石棺について—豊田村塚原丸尾・敷田の石棺—」(未発表。『九州縄文土器の研究』1976年に「下益城郡豊田村塚原丸尾の石棺」として収録。)

昭和27 (1952) 年

内野仁之助 「古代宇土の地歴考」『熊本史学』創刊号

昭和29 (1954) 年

乙益 重隆 『肥後上代文化史』日本談義社

昭和32 (1957) 年

坂本 経典 「平松箱式石棺群」三角町

坂本 経典 「熊本県三角町平松の箱式石棺群」『九州考古学』第2号

三島 格 「九州における突起ある横穴式石室墳」『熊本史学』第13号

花岡 興輝 「古墳発願記録」『熊本史学』第13号

昭和33 (1958) 年

乙益重隆・松本雅明・山口修 『熊本の歴史』1、熊本日日新聞社

三島 格 「熊本県宇土郡轟糟原に於ける石蓋土塚の一例」『九州考古学』5・6

昭和34 (1959) 年

富樫卯三郎・松本雅明 「小川町年の神—20体近くの人骨」『熊本史学』第15・16号

三島 格 「宇土市轟糟原における石蓋土塚の一例」『熊本史学』第15・16号

昭和35 (1960) 年

金村 治之 「塚原古墳の調査」『ともしび』第5号

富樫卯三郎 「宇土市大字立間西洞野古墳」『ともしび』第5号

昭和37 (1962) 年

乙益 重隆 「熊本県下益城郡狐塚古墳」『日本考古学年報』11

三島 格 「熊本県下益城郡甚九郎古墳」『日本考古学年報』11

昭和38 (1963) 年

坂本 経亮 「熊本県宇土郡平松箱式石棺群」『日本考古学年報』10

古田 一英 「熊本県不知火町出町の弥生遺跡及び箱式石棺」『熊本史学』第26号

昭和40 (1965) 年

乙益 重隆他 「熊本県史—総説篇 熊本県

松本雅明・三島格 「城南町史」城南町

国分直一・三島格 「熊本県における考古学調査の概要」『九州考古学』25・26

昭和41 (1966) 年

富樫卯三郎 「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の堅穴石室墳—」『熊本史学』第30号

三島 格 「熊本県宇土郡不知火町桂原古墳」『日本考古学年報』14

三島 格 「熊本県宇土郡塚原古墳群」『日本考古学年報』14

高島忠平・菊池大和・佐藤伸二・伊藤幸二 「熊本県中郡橘原の裝飾ある家形石棺」『熊本史学』第31号

三島 格 「肥後における古墳研究—戦後の成果と問題点—」『古代文化』第17巻第3号、九州古代史特輯(1)

昭和42 (1967) 年

乙益 重隆 「不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』

富樫卯三郎 「宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獸鏡」『熊本史学』第33号

富樫卯三郎 「熊本県下益城郡松嶺町久具出土の子持勾玉について」『夜豆志呂』3

宇土高校社会部 「宇高社会部報」第1号、プリント版

昭和43 (1968) 年

富樫卯三郎 「茶白山古墳出土の鳥獸鏡」『石人』第9巻7月号(通巻第106号)

富樫卯三郎 「三角町辺田古墳調査概報」三角町教育委員会

宇土高校社会部 「宇高社会部報」第2号、プリント版

昭和44 (1969) 年

富樫卯三郎・清見末喜 「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』第20号

昭和45 (1970) 年

富樫卯三郎 「神ノ木山の遺跡」『石人』第11巻3月号(通巻第126号)

佐藤 伸二 「中部九州に於ける前期古墳発生の一側面」『法文論叢』第26号

昭和46 (1971) 年

坂本経亮・坂本経昌 『天草の古代』
宇土高校社会部 『宇高社会部報』第3号、プリント版

昭和47 (1972) 年

坂本 経亮他 『不知火町史』不知火町
宇土高校社会部 『宇高社会部報』第4号、プリント版
富樫卯三郎他 『宇土市の文化財』第1集、宇土市教育委員会
宇土高校社会部 『宇高社会部報』第5号、プリント版

昭和48 (1973) 年

富樫卯三郎他 『宇土市の文化財』第2集、宇土市教育委員会
富樫卯三郎 『熊本県宇賀嶽古墳の装飾』『古代学研究』第68号
斎藤 忠 『日本装飾古墳の研究』講談社
宇土高校社会部 『宇高社会部報』第6号、プリント版

昭和49 (1974) 年

熊本県教育委員会 『熊本県の装飾古墳白書』
富樫卯三郎 『宇土市西岡台遺跡の調査と保存』『考古学ジャーナル』12月号(通巻102号)
近藤 義郎 『天草式装埴土器』『日本埴業の研究』第15集

昭和50 (1975) 年

宇土高校社会部 『宇高社会部報』第7号、プリント版
富樫卯三郎 『古代から近代までの遺跡について』『花園小学校』創立百周年記念誌
野田拓治他 『塚原一 熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査』『熊本県文化財調査報告』第16集
丸山 武水・松村道博 『沈目奥野遺跡』
富樫卯三郎・卯野木盈二 『宇土市下網田町マブシ出土の石棺—マブシ古墳群の所在—』『宇土半島 自然と文化』
卯野木盈二 『宇土半島の歴史』『宇土半島 自然と文化』

昭和51 (1976) 年

緒方 勉他 『塚原古墳群調査報告書』熊本県教育委員会
平山修一・高木恭二他 『西岡台遺跡調査概報』宇土市教育委員会、プリント版

昭和52 (1977) 年

平山修一・高木恭二他 『宇土城跡(西岡台)本文編・資料編』『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集
宇土市教育委員会 『社会科学習資料 わたしたちの宇土市』
中央町 『町誌中央』
緒方 勉 『沈目山遺跡—県道宇土・甲佐線改良工事に伴う文化財調査—』『熊本県文化財調査報告』第26集
富樫卯三郎他 『宇土市の文化財』第3集、宇土市教員委員会

昭和53 (1978) 年

宇土高校社会部 「宇高社会部報」第8号、プリント版
宇土市教育委員会 「社会科学習資料 わたしたちの宇土市」
富樫卯三郎 「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集
約場 義夫 「宇土ところどころ」

昭和54 (1979) 年

松本 健郎 「生産遺跡基本調査報告書Ⅰ-製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作跡-」『熊本県文化財調査報告』第38集
森田克己他 「小川町史」小川町
江本 直他 「小田良古墳」三角町教育委員会
林田 憲義 「松橋町史」松橋町
高木 恭二 「環状縄掛突起を有する石棺について(1)-特にその石棺材の産地をめぐって-」『熊本史学』第53号

昭和55 (1980) 年

野田 拓治 「熊本県城南町塚原、上ノ原遺跡」『九州考古学』55
平山修一・高木恭二 「熊本県宇土市上綱田、城2号墳の調査」『九州考古学』55
北條輝幸・平山修一・木下洋介 「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究』創刊号
松本 健郎 「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ-須恵器窯跡・瓦窯跡・陶磁器窯跡」『熊本県文化財調査報告』第48集
下村智他 「塚原古墳群調査報告書-塚原松手地区古墳群詳細確認調査-」『城南町文化財調査報告』第2集
高木 恭二 「環状縄掛突起を有する石棺について(2)-特にその石棺材の産地をめぐって-」『熊本史学』第54号
土生田純之 「突起をもつ横穴式石室の系譜」『考古学雑誌』第66巻第3号
乙益 重隆 「石塚系石室古墳の成立」『國學院大學大学院紀要』第11輯

昭和56 (1981) 年

佐藤 伸二 「宇土半島をめぐる古墳文化の諸問題-向野田古墳を中心として-」『肥後考古学会誌』創刊号(宇土を中心とする古墳と生産遺跡特集-)
松本 健郎 「製塩・製鉄遺跡と古墳文化」『肥後考古学会誌』創刊号(宇土を中心とする古墳と生産遺跡特集-)
富樫卯三郎・平山修一・高木恭二 「熊本県南方後円墳地名表」『肥後考古学会誌』創刊号(宇土を中心とする古墳と生産遺跡特集-)
平山 修一 「宇土半島基部の古墳時代遺跡紹介」『肥後考古学会誌』創刊号(宇土を中心とする古墳と生産遺跡特集-)
高木 恭二 「肥後南部の石棺資料(一)」『宇土市史研究』第2号
布目 順郎 「向野田古墳出土の絹製品について」『宇土市史研究』第2号
三島 格他 「城2号墳-宇土市上綱田町字城所在城2号墳調査報告-」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集

昭和57 (1982) 年

富樫卯三郎・高木恭二 「熊本県城ノ越古墳出土の三角縁神鏡について-鳥取県普賢寺2号墳出土鏡との比較-」『考古学雑誌』第67巻第3号

花岡興輝校訂「古墳発掘記録(抄)」『宇土市史研究』第3号
水井 昌文 「城2号墳人骨について」『宇土市史研究』第3号
高木 恭二 「肥後南部の石棺資料(二)」『宇土市史研究』第3号
村井真輝・浦田信智 「大見隈音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」『熊本県文化財調査報告』第57集
豊崎晃一他 「塚原古墳群調査報告書-塚原丸尾地区古墳群範囲確認調査-」『城南町文化財調査報告』第3集
平山 修一 「仮又古墳-宇土半島基部古墳群分布調査報告(I)-」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第6集
宇土高校社会部 「宇高社会部報」第10号、プリント版
熊本日日新聞社 「熊本県大百科事典」
松本 健郎 「富合町神ノ上古墳について-古墳の再利用-」『肥後考古』第2号
平山 修一 「宇土市仮又古墳の調査」『肥後考古』第2号

昭和58(1983)年

高木 恭二 「肥後南部の石棺資料(三)」『宇土市史研究』第4号
松本・野田他 「上の原遺跡I」『熊本県文化財調査報告』第58集
岡崎 敬 「熊本県の古鏡-弥生時代と古墳時代-」『肥後考古』第3号(-肥後古鏡聚英-)
高木 恭二 「古墳時代の鏡」『肥後考古』第3号(-肥後古鏡聚英-)
富田 敏一 「熊本県下出土の土製模造鏡」『肥後考古』第3号(-肥後古鏡聚英-)
岡崎 敬 「日本における古鏡発見地名表(熊本県)」『肥後考古』第3号(-肥後古鏡聚英-)
平山修一・高木恭二 「戸馳島の調査」『肥後考古』第3号
北條 暉幸 「向野田前方後円墳の人骨」『宇土市史研究』第5号
富樫卯三郎 「考古ノート-長浜町井崎~岡町小松-」『宇土市史研究』第5号
豊崎晃一・清田純一 「塚原古墳群調査報告(丸尾地区II)」『城南町文化財調査報告』第4集
高木 恭二 「石棺輸送論」『九州考古学』第58号

昭和59(1984)年

高木 恭二 「宇城地方の文化財」第3集
松本・野田他 「上の原遺跡II」『熊本県文化財調査報告』第64集

昭和60(1985)年

木下洋介・古城史雄 「女夫塚古墳(女塚)」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第11集
野田 拓治 「上の原遺跡III」『熊本県文化財調査報告』第73集
清田 純一 「小林コレクションI-城南町東南部-」『城南町歴史民俗資料館収蔵品目録第1集』

昭和61(1986)年

豊崎晃一・清田純一 「塚原古墳群発掘調査報告書-史跡・塚原古墳群整備事業に伴う調査I-」『城南町文化財調査報告』第5集
高木恭二・木下洋介 「ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集
甲元真之・松本健郎 「宇土半島古墳群分布調査報告II」『三角町文化財調査報告書』第6集

高木 恭二 「鴨別と鴨籠」、『Museum Kyusyu』第21号

高木 恭二 「石棺を運ぶ」、『東アジアの古代文化』第50号

※本表は高木が作成した「宇城地方考古学関係文献目録」（『宇上市史研究』第7号に掲載）から、古墳時代関係文献を抜粋し、1983年以降の分を元松が追加・補正したものである。

3. 宇城地方古墳・石棺出土人骨一覧表（第10表）

No.	古墳名	所在地	内部主体	人骨	文献
1	迫ノ上古墳	宇上市神合町	壑穴式石室	成年?	
2	橋崎古墳1号石棺	宇上市花園町	家形石棺	2体	藤原ほか「宇上郡橋崎の古墳」、『熊本朝日新聞』2、1925
3	橋崎古墳2号石棺	宇上市花園町	舟形石棺	人骨片	藤原ほか「宇上郡橋崎の古墳」、『熊本朝日新聞』2、1925
4	向野田古墳	宇上市松山町	壑穴式石室(舟形石棺内蔵)	壮年♀(30後半-40前半)	佐藤ほか「向野田古墳の古墳の人骨」、『宇上市史研究』5、1983
5	境目1号石棺	宇上市境目町	箱式石棺	1体	
6	境目2号石棺	宇上市境目町	箱式石棺	2体	
7	境目6号石棺	宇上市境目町	箱式石棺	2体	
8	境目8号石棺	宇上市境目町	箱式石棺	1体	
9	境目7号棺	宇上市境目町	木棺	1体	
10	西岡台石棺	宇上市神馬町	箱式石棺	1体	
11	城2号墳	宇上市上綱田町	壑穴系横口式石室	成年♀・成年♀?	永井高文「城2号墳人骨について」、『宇上市史研究』3、1982
12	南山内2号石棺	宇上市松山町	箱式石棺	壮年♀	北塚他「宇上市松山町南山内2号石棺」、『宇上市史研究』3、1982
13	晚泉古墳	宇上市立岡町	家形石棺	2体(並置)	藤原ほか「宇上市立岡町晚泉古墳」、『熊本朝日新聞』1989
14	古保里1号石棺	宇上市古保里町	箱式石棺	人骨	藤原ほか「古保里石棺」、『宇上市の文化財』第3号、1977
15	古保里3号石棺	宇上市古保里町	箱式石棺	3体	藤原ほか「古保里石棺」、『宇上市の文化財』第3号、1977
16	国越古墳	宇土郡不知火町長崎	壑穴式石室	2体(奥石棺) 2体(並置)	乙原重孝「宇土郡不知火町国越古墳」、『熊本朝日新聞』1967
17	小田良古墳	宇土郡三角町中村	壑穴式石室	幼年♀?	北塚ほか「小田良古墳」、『熊本朝日新聞』1979
18	平松1号石棺	宇土郡三角町波多	箱式石棺	2体(並置)	坂本他「平松箱式石棺」、『熊本朝日新聞』1957
19	平松3号石棺	宇土郡三角町波多	箱式石棺	2体	坂本他「平松箱式石棺」、『熊本朝日新聞』1957
20	平松4号石棺	宇土郡三角町波多	箱式石棺	5体(東3・西2)	坂本他「平松箱式石棺」、『熊本朝日新聞』1957
21	平松7号石棺	宇土郡三角町波多	箱式石棺	2体(並置)	坂本他「平松箱式石棺」、『熊本朝日新聞』1957
22	金折古墳	宇土郡三角町郡浦	箱式石棺	5体(東2・西3)	高野次夫「日本原人の研究」、『熊本朝日新聞』1952
23	要3号石棺	宇土郡三角町大口	箱式石棺	熟年	北塚ほか「要3号墳出土の人骨について」、『熊本朝日新聞』1982
24	要4号石棺	宇土郡三角町大口	箱式石棺	成年♀・成年♀ 成年(2・3号対置)	北塚ほか「要4号墳出土の人骨について」、『熊本朝日新聞』1982
25	要5号石棺	宇土郡三角町大口	箱式石棺	成年・成年♀(対置)	北塚ほか「要5号墳出土の人骨について」、『熊本朝日新聞』1982
26	清水乙古墳	宇土郡三角町波多	箱式石棺	人骨	北塚ほか「清水乙古墳出土の人骨について」、『熊本朝日新聞』1982
27	寺島5号石棺	宇土郡三角町寺島	箱式石棺	小・小・小・熟年♀ 老年♀(3-1対置)	土肥有吉・田中良之介「井原市「寺島5号墳」石棺墓出土人骨の調査」、『三興研究』6、1986
28	岸甲古墳	下益城郡城南町		人骨	三島他「岸甲」、『熊本朝日新聞』1984
29	阿弥陀尾横穴	下益城郡城南町阿高		2体	高野次夫「日本原人の研究」、『熊本朝日新聞』1952
30	敷田石棺	下益城郡城南町敷田		子・子	
31	丸尾1号墳	下益城郡城南町塚原	箱式石棺	成年♀・小人数	三島他「丸尾」、『熊本朝日新聞』1985

32	丸尾4号墳	下益城郡城清町塚原	箱式石棺	成年♂・成年♀	「箱形埴輪」研究」風南町史、1965
33	丸尾5号墳	下益城郡城南町塚原	箱式石棺	壮年♀ 熟年♂(対置)	「高野原」塚原(中門前塚・丸尾5号)出土の土人骨について」熊本県誌16、1975
34	塚原56年1号石棺	下益城郡城清町塚原	箱式石棺	♀(20代前半)、♂・ 熟年♀	「高野原」塚原(中門前塚・丸尾5号)出土の土人骨について」熊本県誌16、1975
35	橋原石棺	下益城郡中央町中部	家形石棺	4体	「高野原」塚原(中門前塚・丸尾5号)出土の土人骨について」熊本県誌16、1975
36	飯前2号石棺	下益城郡中央町中部	家形石棺	5体	「高野原」塚原(中門前塚・丸尾5号)出土の土人骨について」熊本県誌16、1975
37	飯前3号石棺	下益城郡中央町中部	家形石棺	9体	「高野原」塚原(中門前塚・丸尾5号)出土の土人骨について」熊本県誌16、1975
38	年の押古墳	下益城郡小川町	横穴式石室		「高野原」塚原(中門前塚・丸尾5号)出土の土人骨について」熊本県誌16、1975

(高木)

V 総 括

宇土半島基部の古墳が注目されるようになったのは昭和40年代に入ってからであり、それまでこの地域の古墳について語られることはあまりなかった。発見された古墳の数が増えたというだけではなく、九州では数少ない前期古墳集中地帯のひとつということが重要な点であり、この地域の古墳についての特色をいくつか項目ごとに整理し、結びにかきたい。なお、第1章4でもふれたごとく宇土半島基部という場合は、宇土市・宇土郡不知火町・下益城郡松橋町・下益城郡富合町の1市3町にまたがっており、本書では宇土市内の全古墳についてふれている。考古学的には宇土市内の古墳の全てを宇土半島基部の古墳として捉えることはできず、一部は区別して考えなければならない。その線引きは研究者によって異なると思われるので本章ではそれ以外の、いわゆる宇土半島基部全域を含んで記述することにする。なお、第1図に示した古墳分布図は宇土市以外の行政区をも含むものである。

1. 前方後円墳・円墳

これまでの調査によって宇土半島基部における確実な前方後円墳といえるものは11基であり、やや不確かな檜崎古墳・女夫塚古墳を加えれば13基となる。そのうち宇土市に属するものは8基。全体的な数としての13基という数は小地域に於ける首長墓の数としては一般的な数であり、他地域でもよく見られるパターンである。時期的には、前期に属すると思われるものが宇土市では城ノ越古墳・追ノ上古墳・スリバチ山古墳・御手水古墳・向野田古墳、不知火町の弁天山古墳の計6基となり、全体数からみればやや多すぎるきらいがある。このことは、中期に属する前方後円墳が殆どないという現象と考えあわせ、極めて重要な意味をもつものと思われる。すなわち明らかに中期に属するものは天神山古墳だけであり、やや不確かな檜崎古墳を加えても2基だけということからみても、その不自然さが納得できるのである。後期に属するのは宇土市では、やや不明確ながら女夫塚古墳（女塚）があり、不知火町の国越古墳・仁王塚古墳、松橋町の大塚古墳・女夫塚古墳（男塚）などの計5基を挙げることができ、前期にも比肩できる内容を持つ。宇土半島基部古墳群の編年序列は次のように考えられる。

前期	中期	後期
城ノ越古墳	天神山古墳	大塚古墳
弁天山古墳	檜崎古墳	国越古墳
スリバチ山古墳		女夫塚（男塚）古墳
追ノ上古墳		女夫塚（女塚）古墳
御手水古墳		仁王塚古墳
向野田古墳		

墳丘規模の点からみれば、天神山古墳が110mと県下でも最大級であり、スリバチ山古墳が96m、向野田古墳・大塚古墳が80m級、御手水古墳・国越古墳が65m、その他が45～55mを測り、この点から見ても、前半期古墳の有力さは明らかである。熊本県内の前方後円墳の総数62基のうち100mを超えるものは3基、80m以上100m未満が6基であり、県下でも最大の勢力を持った一群としてとらえることができる。県下の前方後円墳は河川ごとに大きく9群に分けることが可能で、そのうち2基以上の群を形成しているのは菊池川下流域11基・菊池川中流域11基・阿蘇谷2基・緑川中流域5基・宇土半島基部13基・氷川下流域6基・球磨川下流域7基・球磨川上流域3基であり、宇土半島基部の有力性が明確となってくる。

円墳で規模の大きいものは宇土半島基部では殆ど知られておらず、最大でも25mである。ただ、晩免古墳の場合は古墳の範囲が明確でないものの、周辺にはかなりの人口的な地形変化が認められ、可能性としては85mに近い規模が考えられる。前方後円墳が幾つか集まっている地域には円墳や石棺も見られ、小地域ごとのグルーピングが可能である。例えば、スリバチ山古墳・城ノ越古墳の一群、御手水古墳・向野田古墳の一群、弁天山古墳・国越古墳のグループなどであり、それらは首長とそれにごく近い一族の墓域としてとらえることが出来よう。宇土半島基部から離れた周辺部には前方後円墳は全く見られず、一つの特色をなしているが、そこには2～3基の円墳と墳丘を持たない小型竪穴式石室・箱式石棺が一群としてまとまったところが何箇所もあり、宇土市では城1号墳・城2号墳・ヤンボシ塚古墳に代表される網田平野の古墳群がある。

装飾古墳が熊本県下に多いことは良く知られており、その総数は約180基を数え、このうちの大正年間における京都大学調査以来、肥後中部の装飾古墳の存在はよく知られる。宇土半島基部では13基があるが、前方後円墳としては国越古墳の1基のみで、円墳は仮又古墳・東畑古墳・梅崎古墳・城塚古墳(?)・晩免古墳・潤野古墳・古城古墳参考地石材(?)・塚原1号墳・鴨籠古墳・柱原1号墳・柱原2号墳・宇賀岳古墳の12基が知られる。家形石棺の棺蓋に直弧文を施した鴨籠古墳、家形石棺の棺身内壁に円文を表した晩免・潤野古墳、横穴式石室では直弧文のくずれた文様をなす国越古墳のような線刻と彩色を併用したものは、他には宇賀岳古墳がある。その他は船の線刻を主文様とするものとなっており、これは県内でもこの地域に限定されるひとつの特色である。

2. 石棺・横穴

明らかに墳丘を持たないものや墳丘を持つかどうか不明確な箱式石棺・石蓋土壇、それに、横穴が幾つかある。

箱式石棺には、境目石棺・古保里石棺のように石棺が幾つか集まって群をなすものと、西岡台石棺・向野田土壇のように単独で存在するものがある。群をなすものは洪積台地に限られ、単独のものは丘腹上の見晴らしの良い場所に位置するという傾向は指摘出来そうであり、副葬

遺物は前者にだけ見られる。しかし前にも触れたように前方後円墳の殆どは丘陵上であり、これらの差異が古墳や石棺に葬られた被葬者の性格の差を物語るものと考えられる。石棺や土壇に用いられたのは殆ど安山岩板石であり、前方後円墳の主体部に用いられた石材は安山岩だけでなく砂岩が大きいウエイトを占めるようになる。このことは重要で、石棺のように少数の板石を使うだけでこと足るものと違い、多量でしかも巨大な石材を必要とする石室に、遠隔地（天草であろう）から運ばねばならない砂岩が用いられているということは、前方後円墳の築造に強い動員力があつたことを物語っていると見て良からう。

崖面をくりぬいて造った横穴は古墳時代の後半に数多く利用されるようになるが、この宇土半島基部には殆どない。県内では菊地川流域が特に著名であり、装飾の施されたものや数百基が同一の崖面に並んでいるという所も多い。宇土半島基部では皆無に近い状態であり、大平横穴と尾上横穴に知られるくらいである。

3. 出土遺物・出土人骨

古墳出土遺物にはかなりの種類があり、その性格や内容に様々なものがある。ここでは埋葬施設に伴ったいわゆる副葬品と墳丘上の埴輪とに分け、被葬者である出土人骨についても若干触れたい。なお、古墳の副葬品について触れる前に、石棺や石室内における遺物出土状態やその意味について考える必要性もある。例えば、向野田古墳の舟形石棺のように棺内が殆ど土を被ることなく埋葬当時の遺物配置のまま確認でき、石棺内と棺外（竪穴式石室内）が歴然と区別されていたことを知るができるものや、国越古墳をはじめとした横穴式石室を持つものでは石室内の屍床によって、言い換えれば被葬者ごとの副葬品がわかるもの。更には、大古墳や小古墳そして石棺などの埋葬施設による副葬遺物の質や量の違いなど、詳細に比較検討を加えればかなりの内容が明らかに出来るものと思われる。

古墳時代前期の副葬品が呪術的性格をもち、次第に実用的な内容のものにかわっていく傾向があることは早くから指摘されて来たところであり、そのことはこの地域でも例外ではない。発掘調査によって内部主体や遺物の詳細が明らかになっている前方後円墳は迫ノ上古墳・向野田古墳・国越古墳の3基で、前二者が竪穴式石室、後者は横穴式石室である。その詳細は本文に譲るとしても、各古墳を比較することによって時代の違いによる遺物の組み合わせや当時の社会の変化を探ることも不可能ではないと思われる。

出土遺物として注目されるものには、城ノ越古墳の三角縁神獣鏡、向野田古墳の車輪石、城二号墳の琴柱型石製品などがあり、城ノ越鏡は鳥取県普段寺二号墳の鏡と同型鏡で、国越古墳の画文帯神獣鏡は全国に6面の同范鏡が、同じく国越古墳の獣帯鏡も8面の同范鏡がある。

厳密な意味では埴輪と区別されねばならないが底部穿孔土師器が確認された弁天山古墳、それが列をなして並んでいたスリバチ山古墳の2例。黒斑を有する向野田古墳の朝顔形円筒埴輪、人物・馬等を含む形象埴輪を持つ国越古墳、やや特徴的な円筒・朝顔形埴輪の大塚古墳などが

前方後円墳に埴輪をもつものであり、円墳では宇土市の神合古墳、松橋町の山下古墳、不知火町の道免古墳・鶴籠東古墳・塚原平古墳の5例。前田A地点は埴輪集積地と思われ、近くに埴輪製作地があるのではないかと考えられる。古墳に伴って発見されたものではないが轟貝塚・宇土城（西岡台）遺跡からも円筒埴輪が出土している。

検出された人骨としては、向野田古墳が30~40才位の女性で、前方後円墳の被害者としては全国でも殆どない稀少な例として注目される。また、箱式石棺に複数が埋葬されたものの中には、頭位を平行にする並置埋葬や頭位を違えて対置埋葬を行なうもの、さらに3体以上をいれたものの中にはそれを混ぜ合わせたものなど、多様がある。

4. 集 落

今報告では述べていないが、古墳時代に属する集落も何箇所か確認されている（第1表参照）。とはいえ、古墳の数に比べると遺跡数は少ないように思われるし、調査された集落遺跡の数が少ないため、具体的に当時の集落の実態や生活の内容、更には生産活動の実態は全くといっていいほどわからない。しかし、この地域での拠点集落として宇土市の境目遺跡と宇土城（城山）遺跡の2箇所を挙げることが出来るのみである。また、宇土市神馬町の宇土城（西岡台）遺跡はV字溝に囲まれ防禦機能を持った環濠集落（?）であり、この地域の集団の性格を考える上で忘れることの出来ない遺跡となっている。なかでも、この遺跡のV字溝（幅4m・深さ3.7m）の中から発見された大量の古式土師器（布留式）は典型的な作りのものが殆どで、その製作にあたった人が極めて畿内地方と近い関係にあったことを窺うことができ、その意義は大きい。

（高木・木下）

宇土半島基部古墳群

宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集

昭和62年3月31日

発行 熊本県宇土市教育委員会
熊本県宇土市浦田町51番地

印刷 (資) 下田印刷

